

南久米沖台B遺跡
鷹子新畑遺跡
中ノ子I遺跡
下苺屋遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2012

松山市教育委員会

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

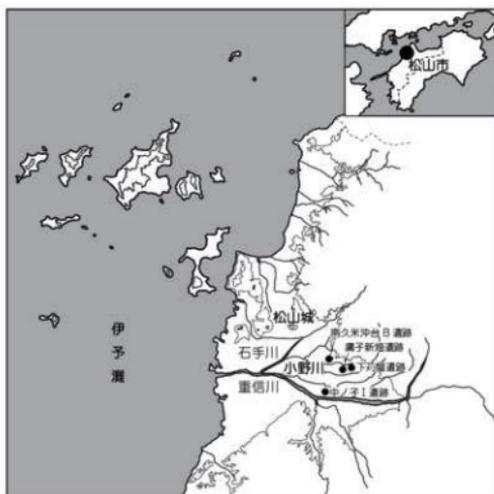
みなみくめおきだい
南久米沖台B遺跡

たかのこしんぼた
鷹子新畑遺跡

なかのこ
中ノ子I遺跡

しもかりや
下菟屋遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2012

松山市教育委員会

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は、松山市東部の来住・久米地区と平井地区で平成元年と同7年に実施した個人住宅建設に伴う国庫補助事業による発掘調査報告書です。

2地区とも全国的に知られている重要な遺跡が存在する地域で、来住・久米地区には国史跡「久米官衙遺跡群 久米官衙跡 来住廃寺跡」、平井地区には平成23年に国史跡に指定された「葉佐池古墳」があります。

今回報告します来住・久米地区にある南久米沖台B遺跡では、古代の建物跡が検出され、久米官衙遺跡群の北方地域の集落構造を解明する貴重な資料を得ることができました。また、平井地区にある下苧屋遺跡では、古墳時代後期の堅穴建物を9棟検出し、焼け歪んだ土器が多数出土したことから、窯業生産地の中継地点と推定されるなど、新しい知見を得ることができました。

このような成果を上げることができたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

本書が、松山市民をはじめ多くの方々の埋蔵文化財保護意識の向上と埋蔵文化財調査の一助となり、考古学研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成24年3月

松山市教育長
山内 泰

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会が平成元年と平成7年に松山市南久米町、鷹子町、南土居町、平井町内で実施した4遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター(埋文センター)が松山市教育委員会から委託を受けて行った。
3. 遺構の略号は、堅穴建物：SB、土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、性格不明遺構：SX、掘立柱建物：掘立とし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
4. 遺構の測量は、調査担当者の指示のもと補助員、作業員が実施した。
5. 遺物の実測及び掲載図の製図は、高尾和長、河野史知、宮内慎一の指示のもと、田崎真理、矢野久子、多知川富美子、仙波千秋、猪野美喜子が行った。
6. 掲載の遺構図、遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。
7. 掲載の遺構図の北は磁北を示す。
8. 写真図版は、遺構撮影は調査担当者が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は高尾と協議のうえ大西朋子が行った。
9. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
10. 本書の執筆、編集は高尾和長が行った。
11. 報告書抄録は巻末に掲載している。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	
第2節	調査・刊行組織	
第3節	立地・環境	
第Ⅱ章	南久米沖台B遺跡	7
第1節	調査の経過	
第2節	層位	
第3節	遺構と遺物 (1) 古代 (2) 近現代 (3) その他の遺構と遺物	
第4節	小結	
第Ⅲ章	鷹子新畑遺跡	21
第1節	調査の経過	
第2節	層位	
第3節	遺構と遺物 (1) 古墳時代 (2) 地点不明出土遺物	
第4節	小結	
第Ⅳ章	中ノ子Ⅰ遺跡	35
第1節	調査の経過	
第2節	層位	
第3節	遺構と遺物 (1) 弥生時代 (2) 古墳時代 (3) 近世 (4) 時期不明遺構と遺物	
第4節	小結	
第Ⅴ章	下苅屋遺跡	55
第1節	調査の経過	
第2節	層位	
第3節	遺構と遺物 (1) 古墳時代 (2) その他の遺構と遺物	
第4節	小結	
第Ⅵ章	成果と課題	111

挿 図 目 次

第I章 はじめに

第1図 調査地周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)	5
------------------------------------	---

第II章 南久米沖台B遺跡

第2図 周辺調査地位置図 (縮尺 1/2,000)	10
第3図 調査地位置図 (縮尺 1/1,000)	11
第4図 遺構配置図・北壁・南壁土層図 (縮尺 1/100)	12
第5図 掘立1測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/40)	14
第6図 SD4測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/40)	15
第7図 SD1・SD2・SD3・SX2測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/40)	16
第8図 SX1測量図 (縮尺 1/40)	16
第9図 SP出土遺物・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	18

第III章 鷹子新畑遺跡

第10図 調査地位置図 (縮尺 1/1,000)	23
第11図 周辺調査地位置図 (縮尺 1/4,000)	24
第12図 遺構配置図・土層図 (縮尺 1/80)	26
第13図 SB1測量図 (縮尺 1/40)	27
第14図 SB1出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	28
第15図 SD1・SD2測量図 (縮尺 1/40)	29
第16図 SD3測量図 (縮尺 1/40)	30
第17図 SP1・SP2測量図・SP1出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/40)	30
第18図 地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/4)	31

第IV章 中ノ子I遺跡

第19図 周辺調査地位置図 (縮尺 1/4,000)	38
第20図 遺構配置図 (縮尺 1/120)	39
第21図 北壁土層図 (縮尺 1/40)	40
第22図 SB1測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/40)	41
第23図 SK1・SK2・SK3測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/20)	42
第24図 掘立1測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4、1/80)	44
第25図 掘立2測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/80)	44
第26図 掘立3測量図 (縮尺 1/80)	45
第27図 掘立4測量図 (縮尺 1/80)	46
第28図 SD7出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	46
第29図 SD7測量図 (縮尺 1/80)	47

第30图	SD 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/80)	48
第31图	SD 2 測量図 (縮尺 1/80)	49
第32图	SD 3 測量図 (縮尺 1/80)	49
第33图	SD 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/80)	50
第34图	SD 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/80)	50
第35图	掘立5 測量図 (縮尺 1/80)	50
第36图	地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	51

第V章 下町屋遺跡

第37图	周辺調査地位位置図 (縮尺 1/6,000)	58
第38图	調査地位位置図 (縮尺 1/1,500)	59
第39图	区割図 (縮尺 1/400)	59
第40图	遺構配置図 (縮尺 1/200)	60
第41图	SB 1 測量図 (縮尺 1/50)	61
第42图	SB 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	62
第43图	SB 2 測量図 (縮尺 1/50)	63
第44图	SB 2 カマド測量図 (縮尺 1/20)	64
第45图	SB 2 出土遺物実測図① (縮尺 1/3)	64
第46图	SB 2 出土遺物実測図② (縮尺 1/2、1/3、1/4)	65
第47图	SB 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/50)	66
第48图	SB 4 測量図 (縮尺 1/50)	67
第49图	SB 5 ①~④測量図 (縮尺 1/50)	68
第50图	SB 5 ①測量図 (縮尺 1/50)	69
第51图	SB 5 ②測量図・遺物出土状況図 (縮尺 1/6、1/12、1/50)	70
第52图	SB 5 ②出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	70
第53图	SB 5 ③測量図・遺物出土状況図 (縮尺 1/6、1/50)	71
第54图	SB 5 ③炉①・炉②測量図 (縮尺 1/20)	72
第55图	SB 5 ③出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	72
第56图	SB 5 ④測量図・遺物出土状況図 (縮尺 1/6、1/12、1/50)	73
第57图	SB 5 ④炉①測量図 (縮尺 1/20)	74
第58图	SB 5 ④出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	74
第59图	SB 5 一括出土遺物実測図① (縮尺 1/3)	75
第60图	SB 5 一括出土遺物実測図② (縮尺 1/2)	76
第61图	SB 6 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/50)	77
第62图	SK 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/2、1/3、1/50)	78
第63图	SK 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/50)	80
第64图	SK 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/50)	81
第65图	SK 4 測量図 (縮尺 1/50)	81

第66図	SK 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	82
第67図	SK 5 測量図 (縮尺 1/50)	82
第68図	SD 1 測量図 (縮尺 1/50)	83
第69図	SD 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	84
第70図	SD 2 測量図 (縮尺 1/50)	85
第71図	SD 2 遺物出土状況図 (縮尺 1/6、1/50)	86
第72図	SD 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	87
第73図	SD 3 測量図 (縮尺 1/50)	88
第74図	SD 4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/50)	88
第75図	石組遺構測量図 (縮尺 1/50)	89
第76図	石組遺構出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)	90
第77図	SX 1 測量図 (縮尺 1/50)	91
第78図	SX 1 出土遺物実測図① (縮尺 1/3)	92
第79図	SX 1 出土遺物実測図② (縮尺 1/2、1/3)	93
第80図	SP 出土遺物実測図① (縮尺 1/3、1/4)	94
第81図	SP 出土遺物実測図② (縮尺 1/2)	95
第82図	グリッド出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	95
第83図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	96
第84図	地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/1、1/3)	97

表 目 次

第 I 章 はじめに	表 31	SD 5 出土遺物観察表	土製品	
表 1 調査地一覽	4	表 32	地点不明出土遺物観察表	土製品
第 II 章 南久米沖台 B 遺跡		第 V 章 下舟屋遺跡		
表 2 掘立柱建物一覽	19	表 33 堅穴建物一覽	99	
表 3 溝一覽		表 34 土坑一覽		
表 4 性格不明遺構一覽		表 35 溝一覽	100	
表 5 掘立 1 出土遺物観察表	土製品	表 36 石組遺構一覽		
表 6 SD 4 出土遺物観察表	土製品	表 37 性格不明遺構一覽		
表 7 SD 2 出土遺物観察表	石製品	表 38 SB 1 出土遺物観察表	土製品	
表 8 SD 3 出土遺物観察表	土製品	表 39 SB 2 出土遺物観察表	土製品	
表 9 SP 出土遺物観察表	土製品	表 40 SB 2 出土遺物観察表	石製品	
表 10 地点不明出土遺物観察表	土製品	表 41 SB 3 出土遺物観察表	土製品	
第 III 章 鷹子新加遺跡		表 42 SB 5② 出土遺物観察表	土製品	
表 11 堅穴建物一覽	33	表 43 SB 5③ 出土遺物観察表	土製品	
表 12 溝一覽		表 44 SB 5④ 出土遺物観察表	土製品	
表 13 SB 1 出土遺物観察表	土製品	表 45 SB 5一括出土遺物観察表	土製品	
表 14 SP 出土遺物観察表	土製品	表 46 SB 5一括出土遺物観察表	石製品	
表 15 地点不明出土遺物観察表	土製品	表 47 SB 6 出土遺物観察表	土製品	
表 16 地点不明出土遺物観察表	石製品	表 48 SK 1 出土遺物観察表	土製品	
第 IV 章 中ノ子 I 遺跡		表 49 SK 1 出土遺物観察表	石製品	
表 17 堅穴建物一覽	52	表 50 SK 2 出土遺物観察表	土製品	
表 18 掘立柱建物一覽		表 51 SK 3 出土遺物観察表	土製品	
表 19 土坑一覽		表 52 SK 4 出土遺物観察表	土製品	
表 20 溝一覽		表 53 SD 1 出土遺物観察表	土製品	
表 21 SB 1 出土遺物観察表	土製品	表 54 SD 2 出土遺物観察表	土製品	
表 22 SK 1 出土遺物観察表	土製品	表 55 SD 4 出土遺物観察表	土製品	
表 23 SK 2 出土遺物観察表	土製品	表 56 石組遺構出土遺物観察表	土製品	
表 24 SK 3 出土遺物観察表	土製品	表 57 SX 1 出土遺物観察表	土製品	
表 25 掘立 1 出土遺物観察表	土製品	表 58 SX 1 出土遺物観察表	石製品	
表 26 掘立 2 出土遺物観察表	土製品	表 59 SP 出土遺物観察表	土製品	
表 27 SD 7 出土遺物観察表	土製品	表 60 SP 出土遺物観察表	石製品	
表 28 SD 7 出土遺物観察表	石製品	表 61 グリッド出土遺物観察表	土製品	
表 29 SD 1 出土遺物観察表	土製品	表 62 包含層出土遺物観察表	土製品	
表 30 SD 4 出土遺物観察表	土製品	表 63 地点不明出土遺物観察表	土製品	
		表 64 地点不明出土遺物観察表	鉄製品	

写真図版目次

第II章 南久米沖台B遺跡

- 写真図版 1 1. 掘立1検出状況(東より)
写真図版 2 1. SD1・SD2・SD3・SX2
検出状況(北より)
2. SD4遺物出土状況①(北より)
写真図版 3 1. SD4遺物出土状況②(北東より)
2. SD4土層堆積状況(北東より)
写真図版 4 1. 調査風景(西より)
2. 出土遺物

第III章 鷹子新畑遺跡

- 写真図版 5 1. 調査地遠景(南より)
2. 重機による掘削状況(南より)
写真図版 6 1. 北壁土層(南より)
写真図版 7 1. 遺構検出状況(東より)
写真図版 8 1. SB1検出状況(西より)
2. SB1遺物出土状況①(西より)
3. SB1遺物出土状況②(東より)
写真図版 9 1. SB1完掘状況(東より)
2. 遺構完掘状況(西より)
写真図版 10 1. 作業風景(東より)
2. 出土遺物

第IV章 中ノ子I遺跡

- 写真図版 11 1. 遺構検出状況(西より)
2. SD1・SD2・SD3完掘状況(南西より)
写真図版 12 1. 掘立1・掘立2完掘状況①(北より)
2. 掘立1・掘立2完掘状況②(南西より)
写真図版 13 1. 掘立3・掘立4・SD4・SD5・SD7完掘状況(北東より)
2. SK1・SK2・SK3完掘状況(西より)
写真図版 14 1. 調査区より久米中学校を望む(南より)
2. 出土遺物

第V章 下町屋遺跡

- 写真図版 15 1. 重機による掘削状況(北より)
2. 遺構検出状況(北より)
写真図版 16 1. SB1検出状況(北東より)
2. SB2検出状況(北より)
写真図版 17 1. SB3・SB4検出状況(北東より)
2. SB3・SB4完掘状況(南より)
写真図版 18 1. SB2カマド検出状況
(上:南より、下:東より)
写真図版 19 1. SB2カマド完掘状況
(上:南より、下:西より)
写真図版 20 1. SB5③④検出状況(北東より)
2. SD2遺物出土状況(北より)
写真図版 21 1. 石組遺構検出状況(南より)
2. 現地説明会
写真図版 22 1. 遺構完掘状況①(南より)
2. 遺構完掘状況②(南西より)
写真図版 23 1. 出土遺物
写真図版 24 1. 出土遺物
写真図版 25 1. 出土遺物
写真図版 26 1. 出土遺物

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成元年～平成7年の間に、松山市南久米町438番2、鷹子町582番2、南土居町304番3、平井町2389番外の4ヶ所について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された。確認願いが申請された南久米町438番2は松山市が指定する〔No126高畑遺物包含地〕、鷹子町582番2は〔No129 鷹子遺物包含地2〕、南土居町304番3は〔No132 中ノ子廃寺・遺物包含地〕、平井町2389番外は〔No152 平井遺物包含地〕内にあり周知の遺跡地として知られており、各申請地周辺では、現在までに数々の発掘調査が行われている。

文化教育課では、確認申請が提出された4地点について埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、順次試掘調査と書類審査を実施した。調査の結果、申請地内には遺構や遺物が検出され、遺跡の存在が想定される状況にあった。

書類審査と試掘の結果より、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行い、弥生時代から古代の集落域やその構造を明らかにすることを目的とした調査を実施することとした。

発掘調査は、文化教育課及び松山市立埋蔵文化財センターが主体になり、申請者及び関係者の協議のもと、国庫補助を受け平成元年と平成7年に実施した。

第2節 調査・刊行組織

調査組織（平成元年4月1日時点）

松山市教育委員会

教育委員会文化教育課

松山市立埋蔵文化財センター

教 育 長	平井 亀雄
参 事	井出 治己
次 長	古本 克
次 長	井上 量公
課 長	渡部 忠平
係 長	西 伸二
所 長	森脇 将
係 長	西尾 幸則
主 事	栗田 正芳（調査担当）
調 査 員	松村 淳（調査担当）
調 査 員 補	水本 完児
	高尾 和長

調査組織（平成7年4月1日時点）

松山市教育委員会	教 育 長	池田 高郷
生涯教育部	部 長	渡辺 和彦
	次 長	杉本 博
	次 長	三好 俊彦
教育委員会文化教育課	課 長	松平 泰定
	係 長	西尾 幸則
	主 任	重松 佳久（調査担当）

整理組織（平成22年10月1日現在）

整理委託 松山市教育委員会	教 育 長	山内 泰
松山市教育委員会	局 長	藤田 仁
事務局	企 画 官	勝谷 雄三
	企 画 官	青木 茂
文化財課	課 長	駒澤 正憲
	主 幹	森 正経
	副 主 幹	三好 博文

整理組織 財団法人文化・スポーツ振興財団

文化・スポーツ振興財団	理 事 長	一色 哲昭
事務局	局 長	松澤 史夫
	次 長	砂野 元昭
	総務部長	中野 忠
	施設利用推進部長	中越 敏彰
埋蔵文化財センター	所 長	重松 佳久
	主 査	栗田 茂敏
	主 任	高尾 和長

刊行組織（平成23年4月1日現在）

刊行主体 松山市教育委員会

松山市教育委員会

事務局

文化財課

教育長 山内 泰

局長 嶋 啓吾

企画官 渡部 満重

企画官 青木 茂

課長 駒澤 正憲

主幹 森 正経

主査 竹内 明男

編集組織 財団法人文化・スポーツ振興財団

文化・スポーツ振興財団

事務局

埋蔵文化財センター

理事長 一色 哲昭

局長 松澤 史夫

次長 近藤 正

総務部長 中野 忠

施設利用推進部長 中越 敏彰

所長 田城 武志

主査 栗田 茂敏

主任 高尾 和長

調査員 大西 朋子（写真担当）

第3節 立地・環境（第1図）

（1）立地

道後平野には高縄山系に源を発し、北東から南西に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川はいくつかの支流を集めながら西流し、海岸から約4kmで合流し、伊予灘に注いでいる。報告を行う4遺跡は松山平野の南東部にあり、重信川、石手川の支流の小野川、堀越川、内川により形成された扇状地上に位置する。

（2）環境

ここでは4遺跡がある来住・久米地区を中心とした遺跡について、時代別に概要を説明する。

旧石器時代

鷹子新畑遺跡の北部の丘陵上にある五郎兵衛谷古墳の調査に伴って、サヌカイト製の角錐状石器が出土している。平井町の山田池では、ナイフ形石器が表面採集されている。

縄文時代

久米窪田森元遺跡からは、土坑内から後期後葉の一括資料である貴重な土器片が40点余り出土している。晩期では、久米高畑遺跡36次調査より円形罅穴式住居址、久米高畑遺跡26次調査と同35次調査からは、土坑が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は前期から後期まで、集落関連の遺構と遺物の検出割合が増える。特に注目されるのは、前期から中期初頭の大型の溝を複数検出した久米高畑遺跡 23 次調査、25 次調査、28 次調査、29 次調査があり、環濠集落の存在が明らかになりつつある。また土坑も 120 基以上検出され、その中には断面形態より貯蔵穴と考えられるものがある。

中期では来住廃寺 15 次調査の包含層中から、凹線文期の土器片が多数出土している。久米窪田古屋敷 C 遺跡からは、L 字状に折れ曲がる大型の溝から該期の土器が出土している。

後期では久米高畑遺跡 35 次調査、50 次調査、59 次調査、61 次調査、65 次調査で竪穴住居が検出されている。65 次調査検出の竪穴住居には、ベッド状遺構が付設されている。床面には焼土と炭化物が確認できることから、火災により焼失したか住居廃絶時の祭祀行為として火が放たれたことを示すものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構は、来住町遺跡 8 次調査、久米高畑遺跡 10 次調査、26 次調査、35 次調査、60 次調査、64 次調査において竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝が検出されている。中ノ子遺跡の東にある開遺跡では方形住居、掘立柱建物が検出され、出土遺物から 6 世紀初頭から後半までの住居の変遷が検討されている。平井遺跡 5 次調査、6 次調査、下苜屋 3 次調査、古市遺跡 1 次調査、2 次調査、五楽遺跡 2 次調査では竪穴住居、掘立柱建物、土坑などの集落関連遺構が多数検出されている。出土した遺物には生焼けや焼け歪みのある須恵器が含まれており、これらの遺跡や周辺地域は松山平野東部古窯址群からの須恵器運搬に伴う中継地点あるいは集積地として機能していた可能性が高いと考えられる。古墳では平野部にタンチ山古墳、前方後円墳の二つ塚古墳と波賀部神社古墳、丘陵部に五郎兵衛谷古墳がある。

古代

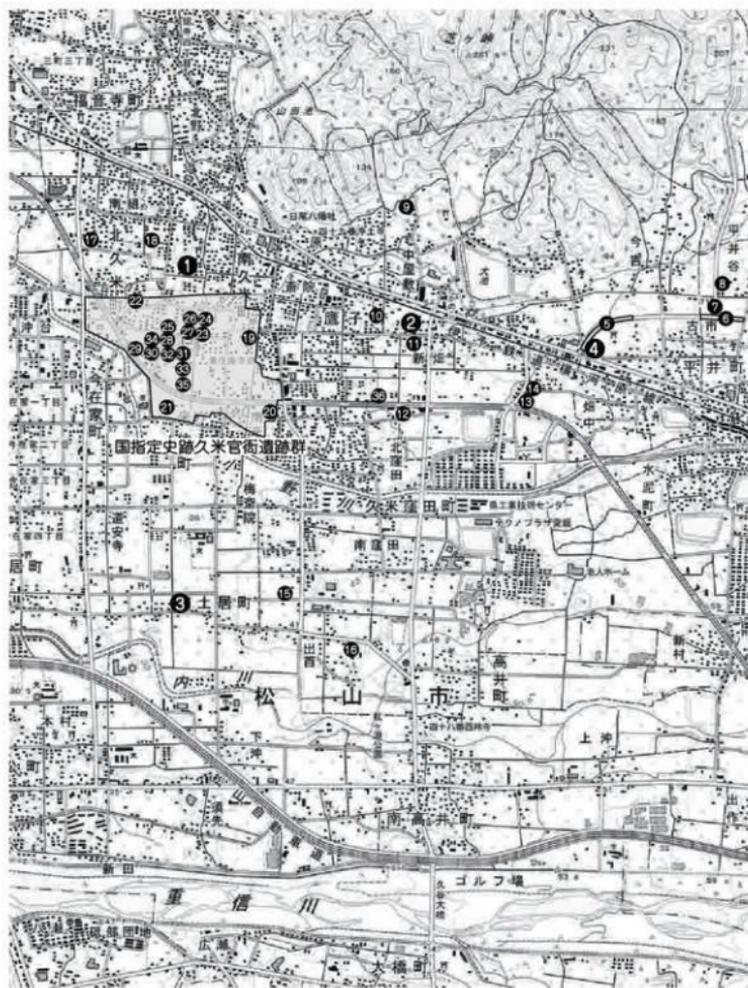
来住台地上には、松山市の国指定史跡久米官衙遺跡群がある。史跡内の調査は現在までに 120 ヶ所以上の調査が行われ、古代の回廊状遺構、評庁院、正倉院が発見され地方官衙の様相が明らかとなりつつある。

中世

中世では鷹子新畑遺跡 3 次調査、北久米遺跡 7 次調査、来住町遺跡 1 4 次調査において掘立柱建物や井戸などの集落関連遺構を検出している。一方、来住町遺跡 6 次調査からは水田耕作に伴う跡地などの生産関連遺構を検出している。

表 1 調査地一覧

No	遺跡名	所在	調査担当	申請面積㎡	調査期間
1	南久米沖台 B 遺跡	南久米町 438 番 2	松村 淳	230.48	H 1 . 8 . 2 ~ 9 . 6
2	鷹子新畑遺跡	鷹子町 582 番 2	栗田正芳	330.60	H 1 . 10 . 4 ~ 10.16
3	中ノ子 I 遺跡	南土居町 304 番 3	松村 淳	426.58	H 1 . 10 . 4 ~ 10.26
4	下苜屋遺跡	平井町甲 2389 番・甲 2390 番・甲 2391 番	重松佳久	1,896.00	H 7 . 6.19 ~ 9.27



- ① 南久米沖台B遺跡 ② 巖子新畑遺跡 ③ 中ノ子I遺跡 ④ 下刃屋遺跡 ⑤ 下刃屋遺跡3次調査 ⑥ 古市遺跡1次調査
 ⑦ 古市遺跡2次調査 ⑧ 五采遺跡2次調査 ⑨ 五郎兵衛谷古墳 ⑩ 巖子新畑遺跡3次調査 ⑪ タンチ山古墳 ⑫ 久米窪田古壇敷C遺跡
 ⑬ 平井遺跡5次調査 ⑭ 平井遺跡6次調査 ⑮ 開遺跡 ⑯ 芝賀部神社古墳 ⑰ 二ツ塚古墳 ⑱ 北久米遺跡7次調査
 ⑲ 栄住可遺跡6次調査 ⑳ 栄住可遺跡8次調査 ㉑ 栄住可遺跡14次調査 ㉒ 久米高畑遺跡10次調査 ㉓ 久米高畑遺跡23次調査 ㉔ 久米高畑遺跡25次調査
 ㉕ 久米高畑遺跡26次調査 ㉖ 久米高畑遺跡28次調査 ㉗ 久米高畑遺跡29次調査 ㉘ 久米高畑遺跡35次調査 ㉙ 久米高畑遺跡50次調査 ㉚ 久米高畑遺跡59次調査
 ㉛ 久米高畑遺跡60次調査 ㉜ 久米高畑遺跡61次調査 ㉝ 久米高畑遺跡64次調査 ㉞ 久米高畑遺跡65次調査 ㉟ 栄住高寺遺跡15次調査 ㊱ 久米窪田元遺跡

第1図 調査地周辺遺跡分布図

【文献】

- 重松佳久 1992 「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1989 「久米窪田森元遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ松山市教育委員会
2000 「古市遺跡」「下胡屋遺跡」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原秀仁 2001 「五楽遺跡Ⅱ次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小笠原善治 1998 「久米高畑遺跡36次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小玉亜紀子 1997 「久米高畑遺跡26次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知 2004 「久米高畑遺跡35次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 橋本雄一 1995 「久米高畑遺跡23次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高尾和長 2000 「久米高畑遺跡25次調査」松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1992 「久米窪田古屋敷C遺跡」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
2000 「久米高畑遺跡27次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 相原秀仁 1999 「来住庵寺7次調査」松山市埋蔵文化財調査年報11
松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1996 「開遺跡1次調査」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 森光晴 1986 「波賀部神社古墳」「ニツ塚」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会
- 栗田茂敏 1996 「駄馬姥ヶ嶺遺址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第Ⅱ章

南久米沖台B遺跡

第Ⅱ章 南久米沖台B遺跡

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第2図)

平成元年6月6日、松山市南久米町438番2における個人住宅建設に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「IH№126 高畑遺物包含地」内に位置することから、埋蔵文化財確認願及び文化財保護法第57条の2第1項の届出書(以下、届出書という)が松山市教育委員会(以下、市教委という)に提出された。これを受け、市教委は平成元年6月21日に試掘調査を実施し、結果、古代の溝と柱穴を確認し、当該地の全域において遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、国庫補助を受け、市教委文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、平成元年8月2日より着手した。

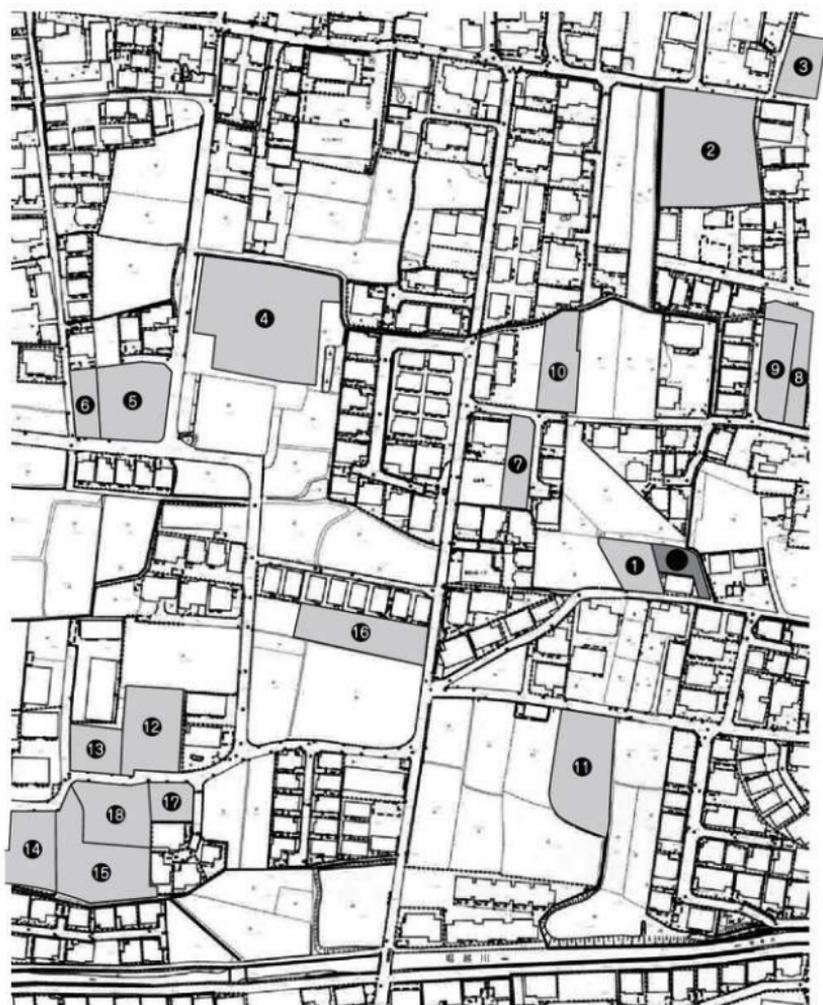
なお、調査地周辺では、これまでに縄文時代から古代にかけての数多くの調査が行われている。縄文時代から弥生時代の遺跡では、調査地の南西部に位置する久米才歩行遺跡4次調査から、縄文時代の土器片と弥生時代前期末の土器や石器が出土している。同2次調査からは、弥生時代前期末から中期初頭の竪穴建物が出た。古墳時代では久米才歩行遺跡2次調査と5次調査から、5世紀後半と6世紀前半の竪穴建物が出た。古代では、調査地の北側に位置する南久米遺跡から掘立柱建物が出た。柱穴内から墨書土器が出土している。また、調査地南側の堀越川を隔てた来住台地上には、7世紀から8世紀にかけての松山平野の主要な遺跡である国指定史跡久米官衙遺跡群があり、数多くの調査が行われている。

(2) 調査の経緯 (第3図)

調査は、はじめに調査区を設定し、西側より重機を使用して掘削を開始した。掘削土は、調査区の南側と北側を排土置き場とした。重機による掘削後に遺構検出作業を行い、溝、柱穴、掘立柱建物を検出した。遺構検出状況の写真撮影を行なった後、測量用の杭を3m間隔で設置し、平板測量にて50分の1の遺構配置図の作成と、埋土の土色確認を行った。続いて、調査壁の測量を行なった。遺構の調査を西側の溝より開始し、溝と掘立柱建物の柱穴内から遺物が出たため、測量と写真撮影を行った。すべての遺構を掘削後に、遺構完掘状況の測量を20分の1で行った。最後に写真撮影を行い、屋外調査を終了する。

第2節 層位 (第4図)

基本層位は、以下の4層である。なお、Ⅰ層は近現代の造成土、Ⅱ・Ⅲ層は農耕に伴う耕土である。Ⅰ層:造成土(真砂土)。調査区全域で厚さ50cmを測る。Ⅱ層:耕作土。調査区全域で厚さ15~20cmを測る。Ⅲ①層:黄褐色土(耕作土床土)。調査区全域で厚さ4~7cmを測る。Ⅲ②層:茶褐色土(耕作土床土)。調査区の南東に厚さ4~8cmを測る。Ⅲ③層:黄褐色土(黄色と黒色の粒混じり、耕作土床土)。調査区南東の一部で厚さ4cmを測る。Ⅳ層:黄色土(地山)。Ⅳ層上面で遺構を検出した。検出した遺構の時期は出土遺物から2期に分かれ、Ⅰ期は古代、Ⅱ期は近現代である。

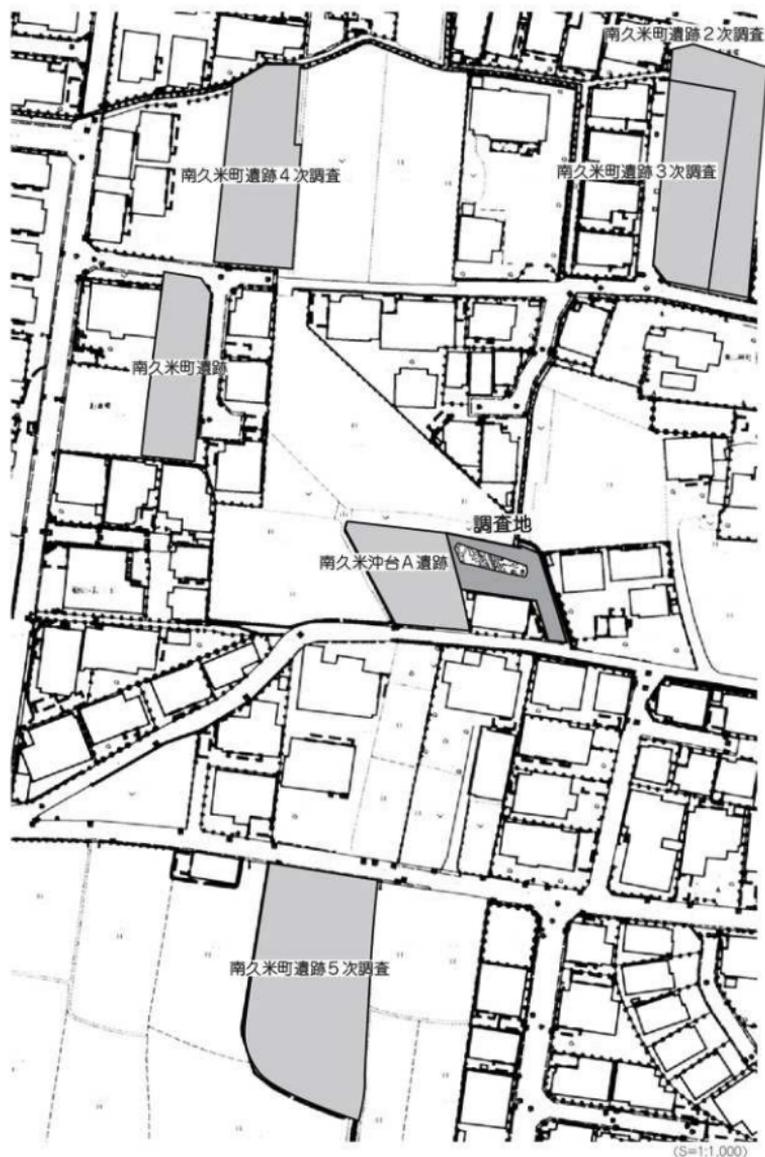


(S=1:2,000)

● 南久米沖台 B 遺跡

- | | | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------|
| ● 1 南久米沖台 A 遺跡 | ● 2 北野遺跡 1 次調査 | ● 3 北野遺跡 2 次調査 | ● 4 北久米遺跡 7 次調査 | ● 5 北久米町屋敷遺跡 |
| ● 6 北久米町屋敷遺跡 2 次調査 | ● 7 南久米町遺跡 | ● 8 南久米町遺跡 2 次調査 | ● 9 南久米町遺跡 3 次調査 | |
| ● 10 南久米町遺跡 4 次調査 | ● 11 南久米町遺跡 5 次調査 | ● 12 南久米町遺跡 6 次調査 | ● 13 久米才歩行遺跡 2 次調査 | |
| ● 14 久米才歩行遺跡 3 次調査 | ● 15 久米才歩行遺跡 4 次調査 | ● 16 久米才歩行遺跡 5 次調査 | ● 17 久米才歩行遺跡 6 次調査 | |
| ● 18 久米才歩行遺跡 7 次調査 | | | | |

第 2 図 周辺調査地位位置図



第3図 調査地位位置図

第3節 遺構と遺物

(1) 古代

検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝1条である。

1) 掘立柱建物(掘立)

掘立1(第5図、写真図版1・4)

掘立1は、調査区東部のA4・B4～6区に位置する。1×2間以上の東西棟で、規模は南北検出長2.7m、東西検出長4mを測り、柱穴4基を検出した。SP2～4は、調査区外に続く。柱穴の平面形態は長方形で、規模はSP1が長径1.03m、短径0.7m、深さ5.2～12.5cm、SP2は検出長1.05m、幅0.88m、深さ6.7～13.7cm、SP3は南北検出長0.38m、東西検出長0.87m、深さ4.2～5.3cm、SP4は南北検出長0.6m、東西長0.88m、深さ2.6～6.7cmを測る。埋土は、黒褐色シルトである。柱痕はSP1・2・4で検出され径10～15cmを測る。遺物は、SP4から須恵器片2点、SP1から長さ10～15cmの石2点、SP2から長さ17～25cmの石が凹地周辺から3点、SP3から長さ12cmの石が1点出土している。出土した石は、柱を固定する為のものと思われる。

出土遺物(1・2)

1・2は、SP4から出土した須恵器である。1は坏蓋。扁平な天井部で、口縁部は下方に屈曲し、端部は丸い。2は甕の頸部片で、外反する頸部の外面に波状文を2段に施す。

時期：出土遺物から、掘立1の埋没時期は8世紀前半とする。

2) 溝(SD)

SD4(第6図、写真図版2～4)

SD4は調査区西部のA・B1区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長3.57m、幅1.20～1.75m、深さ30cmを測り、中央部が楕円形状に僅かに窪む。断面形態は、レンズ状を呈する。埋土は2層に分かれ、①層：黒褐色シルト、②層：灰色砂質土に黄色土が混入するものである。遺物は、溝南側①層より須恵器が出土した。調査中は、常時水が湧く状態であった。

出土遺物(3・4)

3は高台の付く坏。「ハ」の字状に開く高台は太く、底体部境界より内側に付き、端部内面が接地する。4は鉢で丸味を持つ平底風の底部を持つ。

時期：出土遺物から、SD4の埋没時期は7世紀後半とする。

(2) 近現代

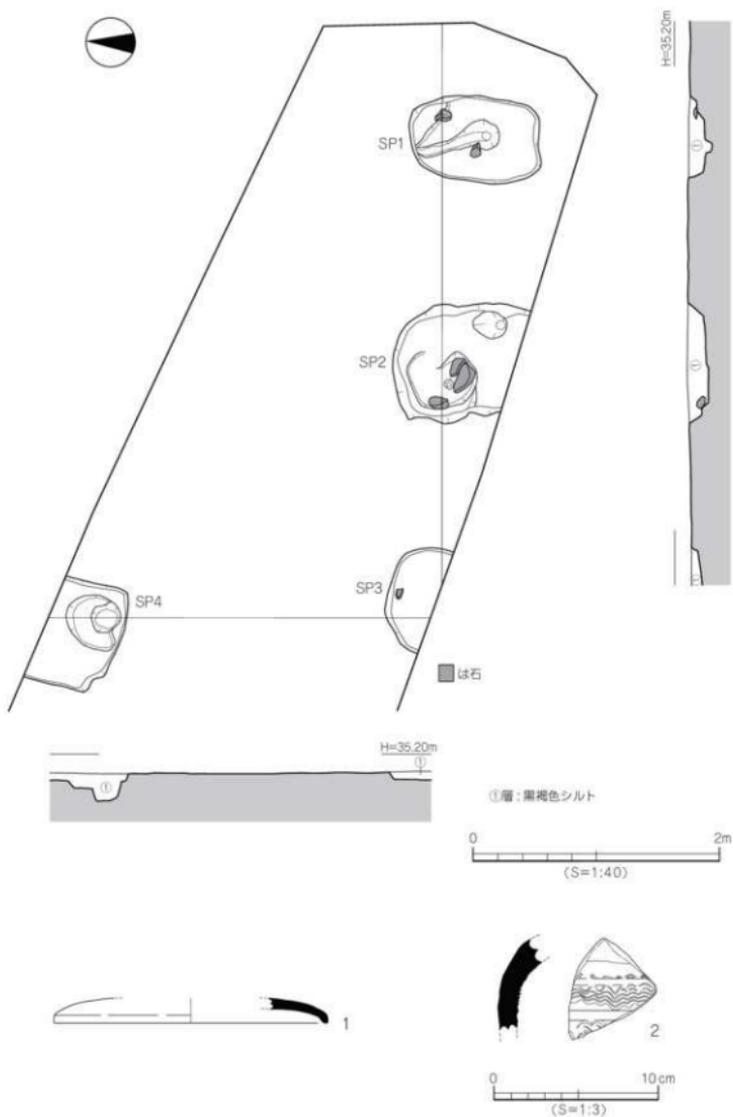
検出遺構は、溝3条、性格不明遺構2基、柱穴135基である。

1) 溝(SD)

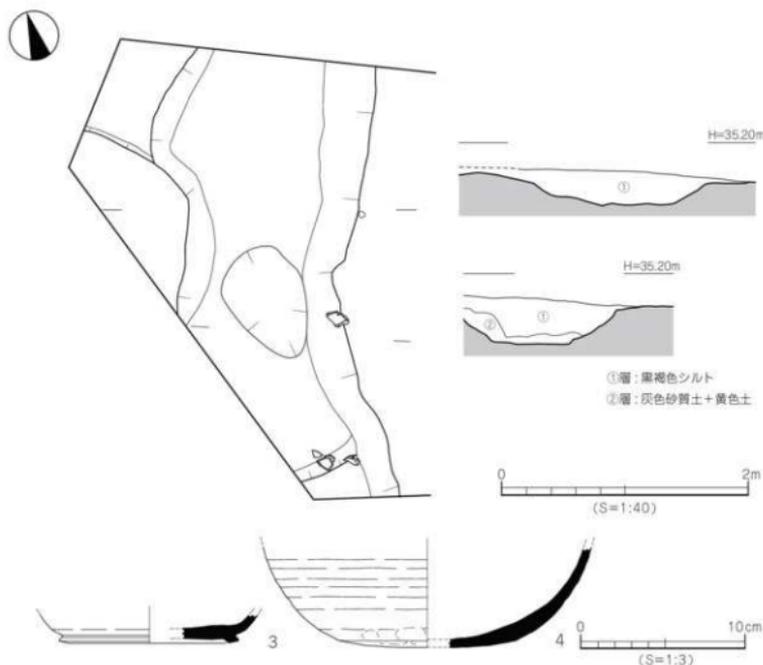
SD1(第7図、写真図版2)

SD1は調査区中央部のA・B4区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長3.45m、幅43～50cm、深さ2～3cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色砂質土の単層である。溝内からは、出土遺物はない。

時期：埋土から、SD1の埋没時期は近現代とする。



第5図 掘立1測量図・出土遺物実測図



第6図 SD4測量図・出土遺物実測図

SD2 (第7図、写真図版2)

SD2は調査区中央部のA3～B4区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長3.48m、幅20～28cm、深さ3～5cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色砂質土の単層である。出土遺物は、石製品が1点ある。

出土遺物

5は、サヌカイトの剥片である。

時期：埋土から、SD2の埋没時期は近現代とする。

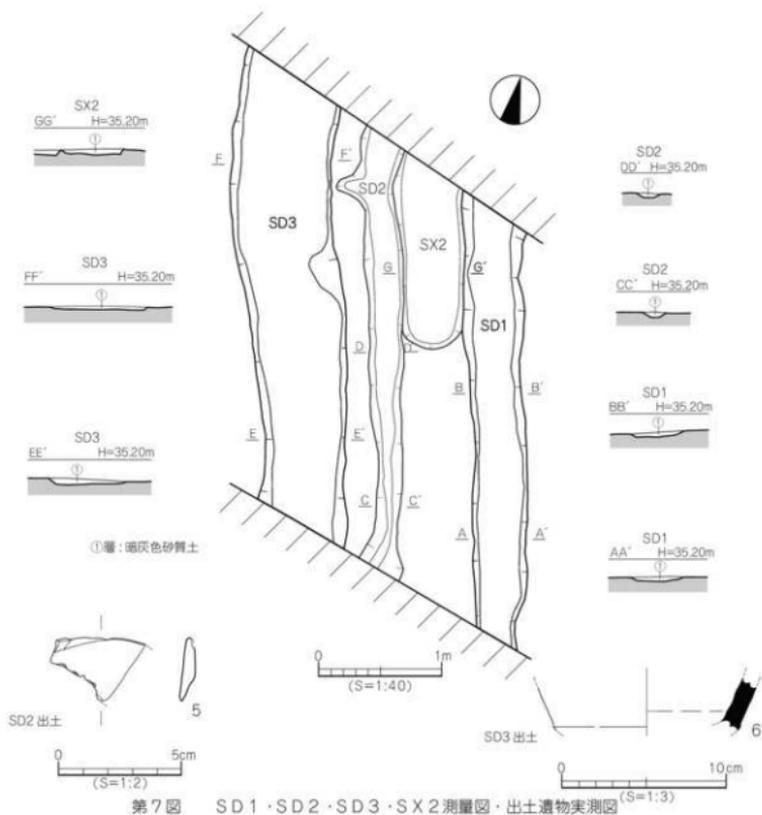
SD3 (第7図、写真図版2)

SD3は調査区中央部のA3～B4区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長3.55m、幅63～70cm、深さ2～4cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色砂質土の単層である。出土遺物は須恵器片が1点ある。

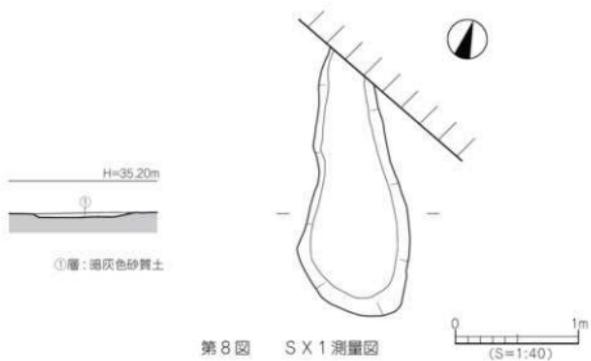
出土遺物

6は、須恵器壺の胴部片である。

時期：埋土から、SD3の埋没時期は近現代とする。



第7図 SD1・SD2・SD3・SX2測量図・出土遺物実測図



第8図 SX1測量図

2) 性格不明遺構 (SX)

SX1 (第8図)

SX1は調査区西部のA2区に位置し、北側は調査区外に続く。平面形態は不定形状を呈し、規模は検出長2.1m、幅45～90cm、深さ3～5cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色砂質土の単層である。SX1から、出土遺物はない。

時期：埋土から、SX1の埋没時期は近現代とする。

SX2 (第7図、写真図版2)

SX2は調査区中央部のA3・4区に位置し、北側は調査区外に続く。平面形態は不定形状を呈し、規模は検出長1.25m、幅50cm、深さ3～4cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色砂質土の単層である。SX2から、出土遺物はない。

時期：埋土から、SX2の埋没時期は近現代とする。

(3) その他の遺構と遺物

1) 柱穴 (SP) (第9図、写真図版4)

柱穴は、135基を検出した。埋土により、黒褐色土と褐色砂質土の2つのグループに分類できる。黒褐色土の埋土を持つ柱穴は10基、褐色砂質土の埋土を持つ柱穴は125基である。平面形態は円形と楕円形があり、円形を呈するものがほとんどである。規模は径4～10cm、深さ2～15cmを測り、ほとんどが10cm以下である。遺物は、SP7とSP135から須恵器片が出土している。埋土から褐色砂質土の埋土を持つ柱穴は、近現代とする。黒褐色土の埋土を持つ柱穴は、掘立1と同じであるため8世紀代とする。

出土遺物 (7・8)

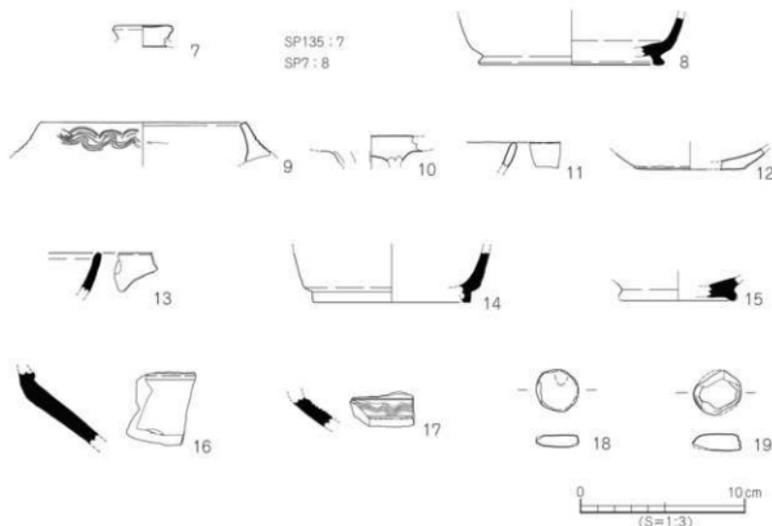
7は、SP135から出土した土師器坏蓋のつまみ部で、中央部が窪む。8は、SP7から出土した高台の付く坏である。高台は底体部境界より内側に付き「ハ」の字状に開く。

2) 地点不明出土遺物 (第9図、写真図版4)

出土地点不明遺物は遺構検出時に出土したもので、弥生土器、須恵器、土師器がある。

出土遺物 (9～19)

9は弥生土器。複合口縁壺の口縁部で、内傾する口縁部の外面に波状文を施す。10は土師器の高坏形土器。坏部と柱部との接合部である。11は土師器坏の口縁部片である。12は土師器坏の底部片である。13～17は須恵器。13は坏の口縁部で、口縁端部は丸味を持つ。14・15は高台の付く坏で、14の高台端部は水平に接地し、15の高台は短く「ハ」の字状に開く。16・17は壺形土器。16は頸部に凸帯を施し、17は肩部に波状文と沈線文を施す。18・19は、扁平な円盤状の土製品である。



第9図 SP出土遺物・地点不明出土遺物実測図

第4節 小 結

本調査では、古代の掘立柱建物1棟（掘立1）と溝1条（SD4）を検出した。掘立1は南北1間、東西2間分を検出した。柱穴は削平を受け、深さ5～6cmと遺存状態は悪いが、柱穴の規模は長さ1m、幅88cmと大きなもので、柱穴間が東西約2m、南北約3mを測ることから、大型の建物と考えられる。

SD4は、調査地西側に隣接する*南久米沖台A遺跡の東側で溝を検出している。溝の方位は南北方向を示し、埋土は黒褐色土である。遺物はSD4と同時期の須恵器が出土している。南久米沖台A遺跡の溝とSD4は、埋土と方向、出土遺物などから同一の溝と考えられ、溝幅は約5mを測る広い溝となる。

掘立1とSD4の検出では、集落と集落を区画する溝と考えられる。調査地周辺では、本調査以降に数多くの調査が行われており、調査地の北西に位置する南久米町遺跡からは掘立柱建物7棟が検出され、柱穴からは8世紀の墨書土器が出土している。調査地南側に位置する南久米町遺跡5次調査からは2間×3間規模の掘立柱建物を検出し、柱穴からは祭祀行為が行われたと思われる破砕した10世紀の土師器が出土し、表採資料として単弁十葉蓮華文軒丸瓦が出土している。この単弁十葉蓮華文軒丸瓦は、堀越川北部では初めての出土である。本調査と近年の調査成果を合わせると、調査地周辺の堀越川北側には、8～10世紀の掘立柱建物が広がることが明らかになった。

【文献】

「南久米町遺跡」『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書76

「南久米町遺跡5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報20

※南久米沖台A遺跡調査担当者栗田茂敏氏の助言（現在報告書整理中）。

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。
 例) 底→底部、口端→口縁端部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、密・精→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表2 掘立柱建物一覧

掘立	地区	方位	規模(間)	桁行長 (m)	梁行長 (m)	床面積 (㎡)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	A・B4 ~6	東西	(1)×(2)	(2.7)	(4.0)	(10.8)	黒褐色シルト	須恵器 石	8世紀前半	

表3 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A・B4	南北	皿状	3.45×0.43~0.50×0.02~0.03	暗灰色砂質土		近現代	
2	A3~B4	南北	皿状	3.48×0.2~0.28×0.03~0.05	暗灰色砂質土	石製品	近現代	
3	A3~B4	南北	皿状	3.55×0.63~0.70×0.02~0.04	暗灰色砂質土	須恵器	近現代	
4	A・B1	南北	レンズ状	3.57×1.20~1.75×0.30	黒褐色シルト 灰色砂質土に 黄色土混じり	須恵器	7世紀後半	

表4 性格不明遺構一覧

性格不明 遺構 (Sx)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A2	不定形	皿状	2.10×0.45~0.9×0.03~0.05	暗灰色砂質土		近現代	
2	A3・4	不定形	皿状	1.25×0.50×0.03~0.04	暗灰色砂質土		近現代	

表5 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
1	杯蓋	口径 (16.6) 残高 15	扁平な天井部。短く屈曲する口縁部。 肩部は丸い。	回転ナデ→ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○	SP4	4
2	葉	残高 62	外反する頸部の外面に2段の波状文 と凹線を施す。	回転ナデ→施文	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1~2) ◎	SP4	4

表6 SD4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
3	坏	底径 (9.8)	「ハ」の字状に開く高台。端部は内面が接地する。	④ 回転ヘラケズリ	⑤ ナデ	黄灰色	長 (1)		
		残高 1.7		回転ナデ	回転ナデ	黄灰色			
4	鉢	底径 (10.8)	平底風の底部。	⑤ ナデ(指頭肌)	マメツ	黄灰色	長 (1)		
		残高 6.1		ヨコナデ		灰黄色・黄灰色			

表7 SD2出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
5	割片	小片	サヌカイト	26	3.65	0.52	4.97		

表8 SD3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
6	壺	残高 3.2	胴部片。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	白色粒 ○		

表9 SP出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
7	灰蓋	残高 1.3	つまみ部。扁平で中央部が凹む。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	砂粒 ○	SP13G	4
8	坏	底径 (11.2)	「ハ」の字状に開く高台。端部は水平に接地する。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 ○	SP7	4
		残高 3.0							

表10 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
9	壺	口径 (12.5)	複合口縁壺の口縁部片。口縁部外面に波状文を施す。	ナデ→施文	⑤ ナデ	橙色 橙色	石 (1~2)		4
		残高 2.4			ヨコナデ				
10	高坏	残高 1.6	坏部と柱部の接合部。	工具によるナデ	ナデ	橙色 にぶい黄褐色	細砂粒 ○		4
11	坏	残高 1.5	口縁部の小片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	白色粒 ○		
12	坏	底径 (6.8)	底部片。	⑥ マメツ ヨコナデ	マメツ	橙色 褐色	密 ○		
		残高 1.3							
13	坏	残高 2.3	口縁部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
14	坏身	底径 (9.4)	高台端部は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	砂粒 ○		
		残高 3.1							
15	坏身	底径 (7.2)	高台端部は「ハ」の字状に開く。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 ○		
		残高 1.4							
16	壺	残高 4.5	頸部に1条の凸帯を施す。	回転ナデ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
		残高 1.7		マメツ					
17	壺	残高 1.7	肩部に波状文1段と凹線2条を施す。	回転ナデ→施文	回転ナデ	灰色 灰色	白色粒 ○		
18	円盤状 土製品	径 2.5	扁平。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	密 ○		4
		厚 0.7							
19	円盤状 土製品	径 3.0	扁平。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	密 ○		4
		厚 1.1							

第三章

鷹子新畑遺跡

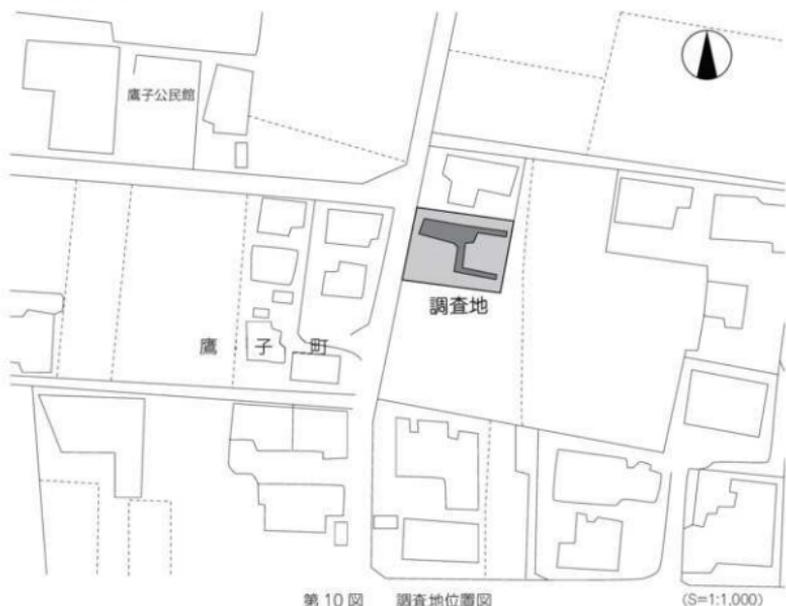
第三章 鷹子新畑遺跡

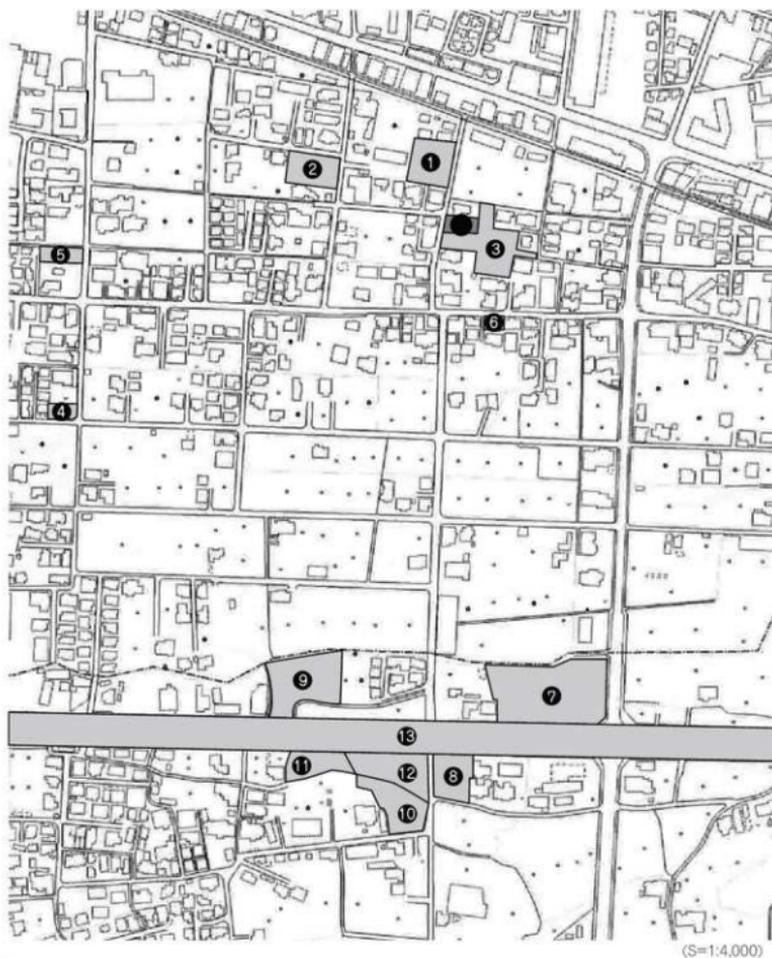
第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第10・11図)

平成元年8月19日、松山市鷹子町582番における個人住宅建設に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「No.129 鷹ノ子遺物包含地2」内に位置することから、埋蔵文化財確認願い及び文化財保護法第57条の2第1項の届出書(以下、届出書という)が松山市教育委員会(以下、市教委という)に提出された。これを受け、市教委は資料と遺跡分布調査を実施し、結果、当該地において遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、国庫補助を受け、市教委文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、平成元年10月4日より着手した。

なお、調査地周辺には、縄文時代から古代の遺跡がある。縄文時代では、後期の土坑を検出した久米窪田森元遺跡がある。弥生時代では、久米窪田古屋敷遺跡から弥生時代前期末から中期初頭の土坑と溝が検出されている。古墳時代の遺構は、久米窪田Ⅱ遺跡と久米窪田古屋敷遺跡から後期の掘立柱建物が検出されている。古代の遺構は、久米窪田古屋敷遺跡と久米窪田Ⅱ遺跡から掘立柱建物が多数検出されている。久米窪田Ⅱ遺跡からは木簡、硯、墨書土器の出土があり、7世紀～8世紀代の主要な遺跡である。





(S=1:4,000)

● 鷹子新畑遺跡

① 鷹子新畑遺跡 2次調査

② 鷹子新畑遺跡 3次調査

③ 鷹子新畑遺跡 4次調査

④ 鷹子遺跡 1次調査

⑤ 鷹子町遺跡 2次調査

⑥ タンチ山古墳

⑦ 久米窪田古屋敷 A 遺跡

⑧ 久米窪田古屋敷 C 遺跡

⑨ 久米窪田森元遺跡

⑩ 久米窪田森元遺跡 2次調査

⑪ 久米窪田森元遺跡 3次調査

⑫ 久米窪田森元遺跡 4次調査

⑬ 久米窪田 II 遺跡

第 11 図 周辺調査地位位置図

(2) 調査の経緯 (第12図、写真図版5)

調査範囲は、試掘調査の結果により幅3～4m、長さ11mの範囲を調査区とした。掘削は、重機を使用し遺構検出面まで行った。掘削土は、調査区の南側と北側を排土置き場とした。重機による掘削後に遺構検出作業を行い、堅穴建物、溝、柱穴を検出した。遺構検出状況の写真撮影を行なった後、測量用の杭を設置し、平板測量にて50分の1の遺構配置図の作成と遺構埋土の土色確認を行った。続いて、調査壁の測量を行なった。遺構の掘削を堅穴建物より開始した。堅穴建物と溝から遺物が出土したため、測量と写真撮影を行った。堅穴建物、溝、柱穴の掘削終了後、遺構完掘状況の測量と写真撮影を行い屋外調査を終了する。

第2節 層位 (第12図、写真図版6)

基本層位は4層に分層し、各層は土色・土質の違いによりⅠ層は2層、Ⅱ層は9層、Ⅲ層は8層、Ⅳ層は2層に細分した。

Ⅰ層：近現代の造成土で、2層に分層した。

Ⅰ①層：造成土（真砂土）。調査区全域で厚さ50cmを測る。

Ⅰ②層：ブロック基礎。北壁西側の一部で幅1.4m、厚み74cmを測る。

Ⅱ層：灰色を基本とした農耕に伴う客土で、僅かな土色の違いにより9層に分層した。

Ⅱ①層：灰色土（耕作土）。調査区全域で厚さ18cmを測る。

Ⅱ②層：灰色土＋暗灰色土（耕作土）。南壁の中央部から東で厚さ4～10cmを測る。

Ⅱ③層：灰色土＋暗灰色土（茶褐色土混じり）（耕作土）。南壁の中央部と西側で厚さ25cmを測る。

Ⅱ④層：灰色土（一部に茶褐色土混じり）。南壁の中央西側で厚さ13cm～23cmを測る。

Ⅱ⑤層：褐色土で灰色土混じり。南壁を除く調査壁で厚さ3～6cmを測る。

Ⅱ⑥層：灰色土（褐色土混じり）。北壁の中央より西側と東壁、西壁で厚さ6cm～10cmを測る。

Ⅱ⑦層：灰褐色土。北壁の中央より西側に厚さ5cm～10cmを測る。

Ⅱ⑧層：（Ⅱ⑤層＋Ⅱ⑥層）混合土。北壁中央部で厚さ3cmを測る。

Ⅱ⑨層：明灰色土（褐色土混じり）。北壁中央より東側で厚さ8cm～10cmを測る。

Ⅲ層：暗灰色土を基本とした遺物包含層で、僅かな土色の違いにより8層に分層した。

Ⅲ①層：暗灰色土。東壁を除く調査壁で厚さ10～28cmを測る。

Ⅲ②層：暗灰色土よりやや明るい。南壁中央部より東側で厚さ4cm～15cmを測る。

Ⅲ③層：暗灰色土よりやや明るい（褐色土混じり）。東壁で厚さ4cm～8cmを測る。

Ⅲ④層：暗灰茶褐色土（一部に黄色土混じり）。南壁東側で厚さ28cmを測る。

Ⅲ⑤層：暗灰色土（茶褐色土混じり）。南壁中央部で厚さ18cmを測る。

Ⅲ⑥層：暗灰色土（一部に黒色土混じり）。東壁で厚さ5cm～15cmを測る。

Ⅲ⑦層：暗灰茶褐色土。西壁で厚さ5cm～16cmを測る。

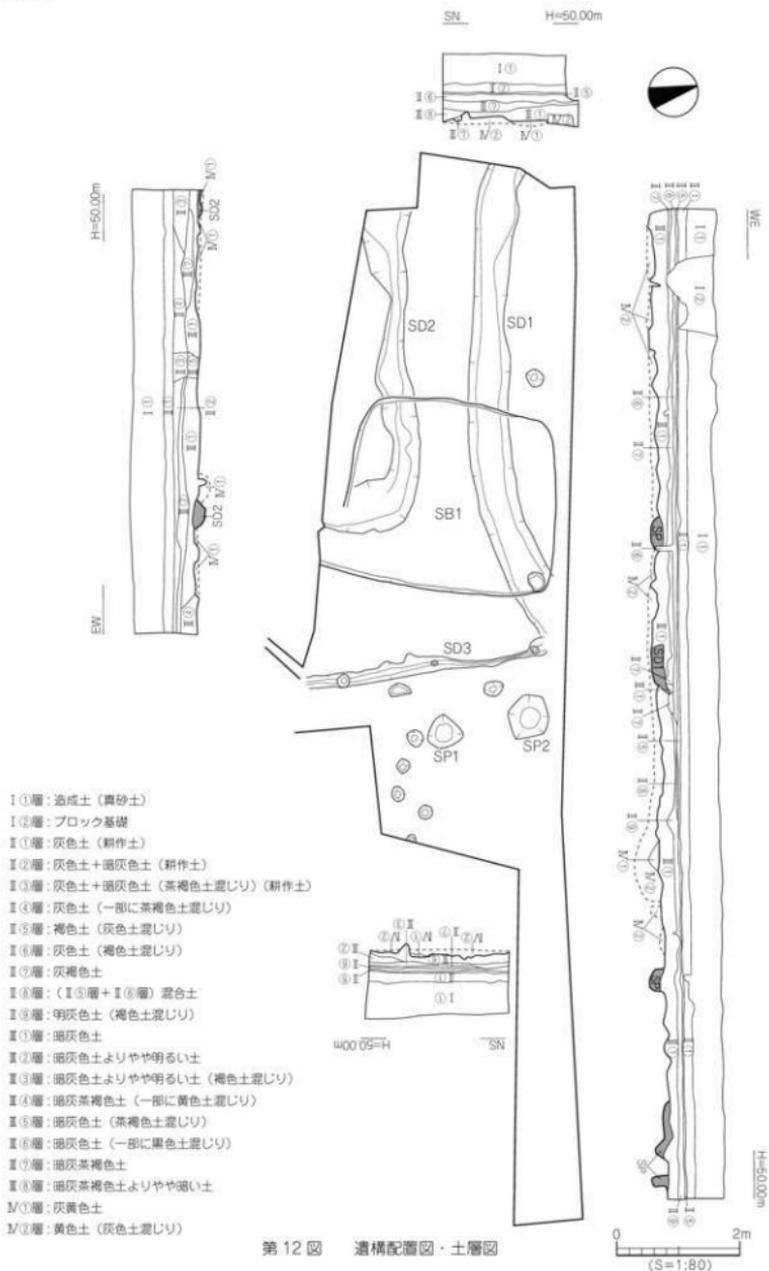
Ⅲ⑧層：暗灰茶褐色土よりやや暗い。西壁の南側で厚さ20cmを測る。

Ⅳ層：地山である。土色の違いにより2層に分層した。なお、Ⅳ層上面が調査における遺構検出面である。

Ⅳ①層：灰黄色土。

Ⅳ②層：黄色土（灰色土混じり）。

遺構は堅穴建物、溝、柱穴を検出した。時期は古墳時代である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器が出土している。



- I ①層：造成土（真砂土）
- I ②層：ブロック基礎
- II ①層：灰色土（耕作土）
- II ②層：灰色土＋珪灰色土（耕作土）
- II ③層：灰色土＋珪灰色土（茶褐色土混じり）（耕作土）
- II ④層：灰色土（一部に茶褐色土混じり）
- II ⑤層：褐色土（灰色土混じり）
- II ⑥層：灰色土（褐色土混じり）
- II ⑦層：灰褐色土
- II ⑧層：（II ⑤層＋II ⑥層）混合土
- II ⑨層：明灰色土（褐色土混じり）
- II ⑩層：暗灰色土
- II ⑪層：暗灰色土よりやや明るい土
- II ⑫層：暗灰色土よりやや明るい土（褐色土混じり）
- II ⑬層：暗灰茶褐色土（一部に黄色土混じり）
- II ⑭層：暗灰色土（茶褐色土混じり）
- II ⑮層：暗灰色土（一部に黒色土混じり）
- II ⑯層：暗灰茶褐色土
- II ⑰層：暗灰茶褐色土よりやや強い土
- M ①層：灰黄色土
- M ②層：黄色土（灰色土混じり）

第3節 遺構と遺物

(1) 古墳時代

検出した遺構は、竪穴建物1棟、溝3条である。

1) 竪穴建物 (SB)

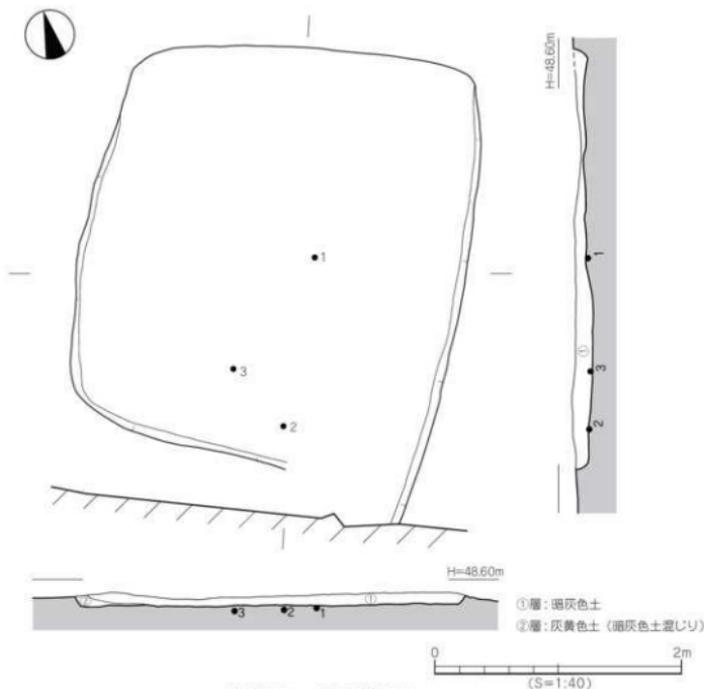
SB1 (第13・14図、写真図版7～10)

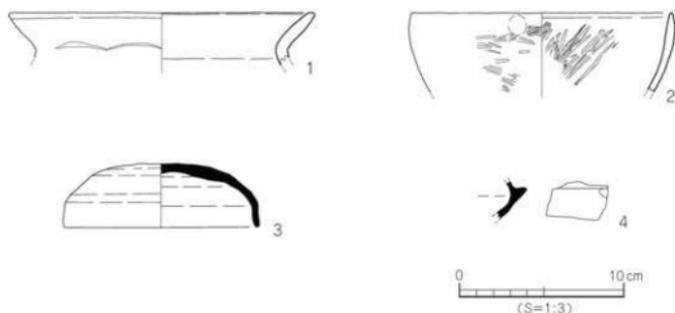
SB1は調査区中央部に位置し、SD1とSD2を切る。なお、住居南西の一部は明確でなく、調査区外に続く。平面形態は方形を呈し、規模は南北検出長3.70m、東西長3.10m、壁高10cmを測る。内部施設はない。埋土は2層に分層でき、①層:暗灰色土、②層:灰黄色土(暗灰色土混じり)である。出土遺物は、須恵器、土師器、弥生土器がある。

出土遺物 (1～4)

1・2は土師器。1は甕形土器の口縁部片、2は鉢形土器の口縁部片で、2の内外面にはヘラミガキを施す。3・4は須恵器。3は坏蓋の完形品。天井部は丸味をもち、天井部と口縁部の境界は稜をなす。4は坏身の小片である。

時期: 出土した須恵器の形態より、SB1の廃棄・埋没時期は古墳時代後期中葉とする。





第 14 図 SB 1 出土遺物実測図

2) 溝 (SD)

SD 1 (第 15 図、写真図版 7・9)

SD 1 は調査区北部に位置し、わずかに北側に湾曲する東西方向の溝である。東側の一部が SB 1 に切られ、西側と北側は調査区外に続く。SD 3 と重複するが、先後関係は不明である。規模は検出長 7.63m、幅 0.65m、深さ 8cm を測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色土 (黄色土混じり) の単層である。溝内から、遺物は出土していない。

時期：SB 1 に切られることより、SD 1 の埋没時期は古墳時代後期中葉以前とする。

SD 2 (第 15 図、写真図版 7・9)

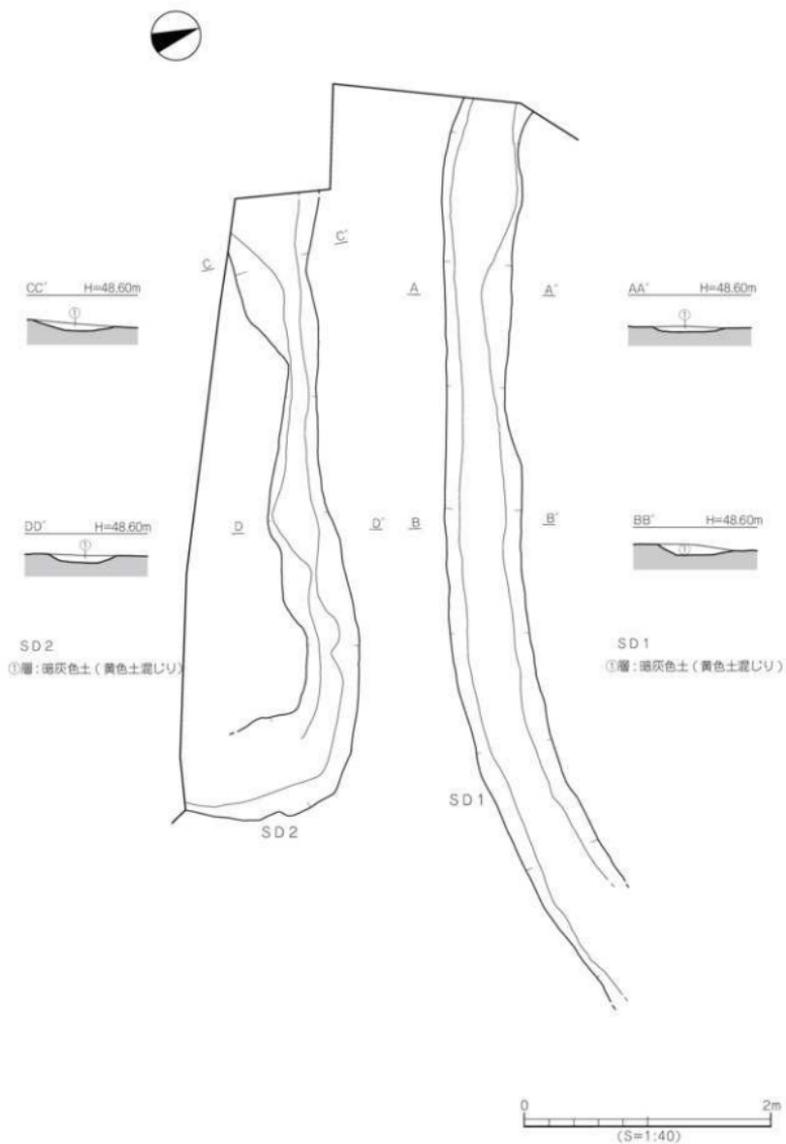
SD 2 は調査区南部に位置し、西から東方向に延び、南に折れ曲がる溝である。南東部の折れ曲がる部分が SB 1 に切られ、西側と南側は調査区外に続く。規模は検出長 5.95m、幅 0.24 ~ 0.84m、深さ 9cm を測る。断面形態は皿状で、埋土は暗灰色土 (黄色土混じり) の単層である。遺物は、弥生土器の胴部片 1 点が出土している。

時期：SB 1 に切られることより、SD 2 の埋没時期は古墳時代後期中葉以前とする。

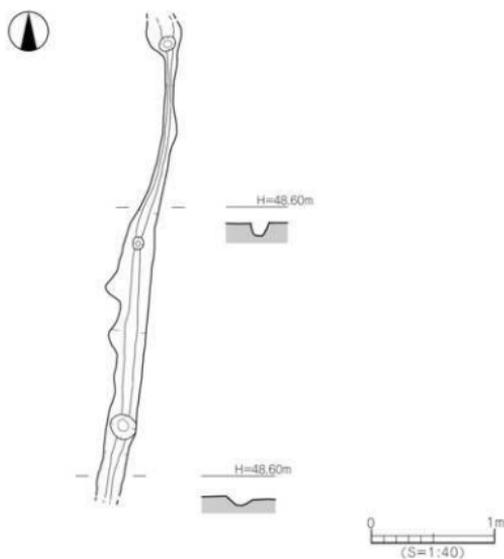
SD 3 (第 16 図、写真図版 7・9)

SD 3 は調査区東部に位置する南北方向の溝で、北側と南側は調査区外に続く。溝北側が SD 1 と重複するが、先後関係は不明である。規模は検出長 4.0m、幅 0.12 ~ 0.36m、深さ 6 ~ 10cm を測る。断面形態は、「U」字状である。埋土は不明である。遺物は、須恵器と土師器が出土している。

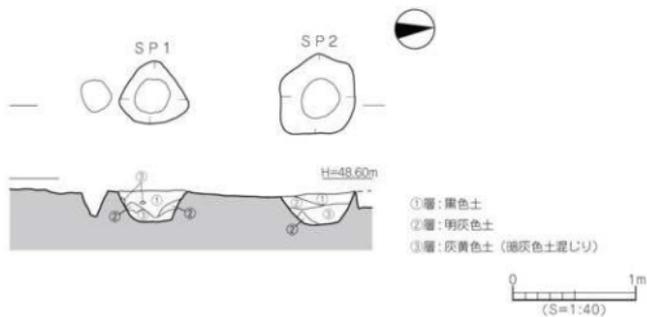
時期：出土遺物や SD 1 と重複することから、SD 3 の埋没時期は古墳時代後期中葉としておく。



第15図 SD1・SD2測量図



第16図 SD3測量図



第17図 SP1・SP2測量図・SP1出土遺物矢測図

3) 柱穴 (SP) (第17図、写真図版9)

柱穴は12基を検出した。SP1・SP2は調査区東部で、南北方向に1.4mの間隔を測る。平面形態は不整形形で、規模はSP1が長径55cm、短径51cm、深さ25cmを測り、SP2は、長径65cm、短径60cm、深さ25cmを測る。埋土は3層に分層でき①層：黒色土、②層：明灰色土、③層：灰黄色土（暗灰色土混じり）である。遺物は、SP1から甕形土器の口縁部片(5)が出土している。

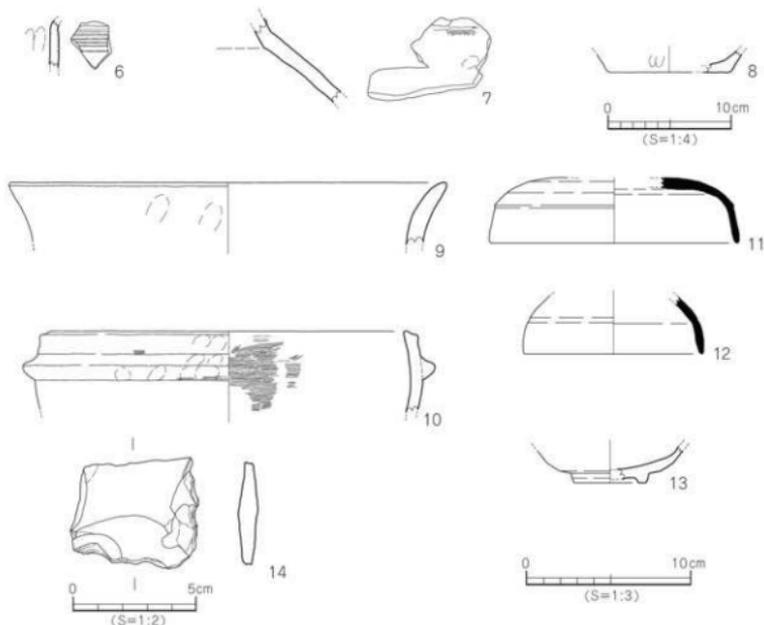
その他の11基の柱穴は、平面形態が円形を呈するものがほとんどである。規模は径15～33cm、深さ23～19.6cmを測る。柱穴内から、遺物は出土していない。

SP5出土遺物

5は土師器甕形土器の口縁部片で、口縁端部は僅かに上方へ肥厚する。

(2) 地点不明出土遺物 (第18図、写真図版10)

6～14は、出土地点が不明な遺物である。6～8は弥生土器。6は甕形土器の頸部から胴部の小片で、外面に沈線文を施す。弥生前期。7・8は壺形土器。7は頸部片。8は平底の底部の小片。9・10は土師器。9は甕の口縁部片で、口縁端部は尖り気味に丸い。10は土釜の口縁部で、口縁端部は外傾する凹面をなす。11・12は須恵器の坏蓋。13は陶器の碗である。高台が付く。14はサヌカイトの剥片である。



第18図 地点不明出土遺物実測図

第4節 小 結

本調査からは、古墳時代後期の竪穴建物1棟、溝3条及び弥生土器や土師器、須恵器、陶器、石器を検出した。調査地周辺では、平成18年までに鷹子新畑遺跡として4次の調査が行われ、弥生時代前期末から中世までの竪穴住居、溝、土坑、井戸を検出している。

地形 鷹子新畑遺跡内における4次の調査から検出した遺構面を検証すると、調査地周辺の地形は北東から南西に緩やかに傾斜していることが確認でき、集落を形成する環境に適していることが確認できた。

弥生時代 本調査からは弥生時代の遺構は検出されていないが、弥生時代前期末から中期初頭の遺物が包含層内から出土している。本調査の北側に位置する鷹子新畑遺跡2次調査からは、弥生時代前期末から中期初頭の溝と土坑を検出している。遺構内からは甕形土器や壺形土器の完形品が出土していることから、集落に関連する遺構が本調査地周辺にも展開すると思われる。

古墳時代 本調査からは、6世紀中葉の竪穴建物1棟と溝3条を検出した。調査地の北に位置する2次調査からは、古墳時代の竪穴建物4棟を検出し、その内の1棟は5世紀末の方形の竪穴建物でカマドが付設されている。調査地周辺には、5世紀後半から6世紀中葉にかけての集落が広がっていた事が確認できた。

【文献】

- | | |
|--------------|---------------|
| 「鷹子新畑遺跡2次調査」 | 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ |
| 「鷹子新畑遺跡3次調査」 | 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ |
| 「鷹子新畑遺跡4次調査」 | 松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ |

遺構・遺物一覧 ー 凡例 ー

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、頸→頸部、底→底部、天→天井部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウソモ、密→精→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 11 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長さ×幅×壁高 (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1		方形	3.70 × 3.10 × 0.10	暗灰色土 灰黄色土 暗灰色土混じり		須恵器・土師器・弥生土器	古墳時代 後期中葉	SD1・2を切る。

表 12 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1		東西	皿状	7.63 × 0.65 × 0.08	暗灰色土 (黄色混じり)		古墳時代 後期中葉以前	SB1に切られる。
2		西→東→南	皿状	5.95 × 0.24 ~ 0.84 × 0.09	暗灰色土 (黄色混じり)	弥生土器	古墳時代 後期中葉以前	SB1に切られる。
3		南北	U字状	4.0 × 0.12 ~ 0.36 × 0.06 ~ 0.10		須恵器 土師器	古墳時代 後期中葉	SD1と重複 先後関係不明

表 13 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
1	葉	口径 (18.4) 残高 3.2	外明する短い口縁部。外面頸部に弧状の工具痕。	ナデ	ナデ・ヨコナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1) 金 ◎		10
2	鉢	口径 (15.8) 残高 4.8	直立気味の口縁部。口縁端部は尖り気味である。内面に放射状暗文。	◎ナデ ヘラミガキ	ミガキ・ナデ	にぶい橙褐色 にぶい橙褐色	長 (1~2) 金 ◎		10
3	杯蓋	口径 11.8 残高 3.9	完形品。丸みを持つ天井部に、直立気味に接施する口縁部。口縁部は丸い。	◎ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石 (1) ◎		10
4	坏身	残高 2.4	短く水平に伸びる受部。端部は丸みを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		自然釉

表 14 SP出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
5	葉	残高 3.5	口縁端部は、わずかに上方へ肥厚する。	ナデ	◎ナデ ハケ・ケズリ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1) 金 ◎		SP1

表 15 地点不明出土土物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
6	甕	残高 38	外面に6本のへう描き沈線文を施す。	ナデ (指頭痕)	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) 金 ○		10
7	壺	残高 70	厚みのある底部片。	◎ ハケ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ○		
8	壺	底径 (9.8) 残高 17	平底の底部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐色	石 (1) ○		
9	甕	口径 (26.4) 残高 38	外反する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	ナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい赤褐色 褐色	石・長 (1) ○		
10	土釜	口径 (21.4) 残高 49	口縁部端面の中央部が凹む。外面に断面三角形の凸帯を巡らす。	ナデ	ハケ (11 本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○		
11	坏蓋	口径 (15.0) 残高 4.0	天井部と口縁部を分ける様は、わずかに段を持つ。口縁端部は丸みを持つ。	◎ 指頭へウケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉	10
12	坏蓋	口径 (11.0) 残高 3.5	口縁部片。端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	
13	碗	底径 (4.4) 残高 2.2	水平に接地する高台部。	◎ ケズリ 施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ○		

表 16 地点不明出土土物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
14	羽片		ナマカイト	4.5	5.1	0.75	25.77		10

第Ⅳ章

中ノ子Ⅰ遺跡

第Ⅳ章 中ノ子Ⅰ遺跡

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第19図)

平成元年9月8日、松山市南土居町304番3における個人住宅建設に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「Na132 中ノ子廃寺遺物包含地」内に位置することから、埋蔵文化財確認願及び文化財保護法第57条の2第1項の届出書(以下、届出書という)が松山市教育委員会(以下、市教委という)に提出された。これを受け、市教委は資料と遺跡分布調査を実施し、結果、遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、国庫補助を受け、市教委文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、平成元年10月4日より着手した。

なお、申請地周辺では、これまでに開遺跡が調査され、古墳時代の建物跡や、遺物が多数検出されている。

(2) 調査の経緯 (第20図)

はじめに、調査区の設定を行った。調査区は、東西方向に幅約6m、長さ約23m、南北方向に幅約9m、長さ約16mの逆「L」字状の調査区を設定した。掘削は、重機を使用して地表下20cmまで行った。掘削土は、南西部を排土置き場とした。重機による掘削後、遺構検出を行い、掘立柱建物、溝、土坑、柱穴を検出した。遺構検出状況の写真撮影を行い、遺構測量用の測量杭を3mグリッドで設置し、平板測量にて50分の1の遺構配置図の作成を行った。続いて、調査壁の測量を行ない、遺構埋土の土色確認を行った後、掘立柱建物より遺構の掘削を開始した。遺構からは遺物が出土したため、測量と写真撮影を行った。掘立柱建物、溝、柱穴など、すべての遺構掘削終了後に完掘状況の測量と写真撮影を行い、屋外調査を終了する。

第2節 層位 (第21図)

基本層位は土色の違いによりⅥ層に分層し、Ⅰ層は2層に細分した。

Ⅰ①層:耕作土①、調査区全域で厚さ8cm～17cmを測る。

Ⅰ②層:耕作土②、灰褐色土、調査区北壁の東側と西側で厚さ2～8cmを測る。

Ⅱ層:床土①、調査区北壁で厚さ2～5cmを測る。

Ⅲ層:床土②、灰褐色土と褐色土の混じり、調査区北壁東側で厚さ7cmを測る。

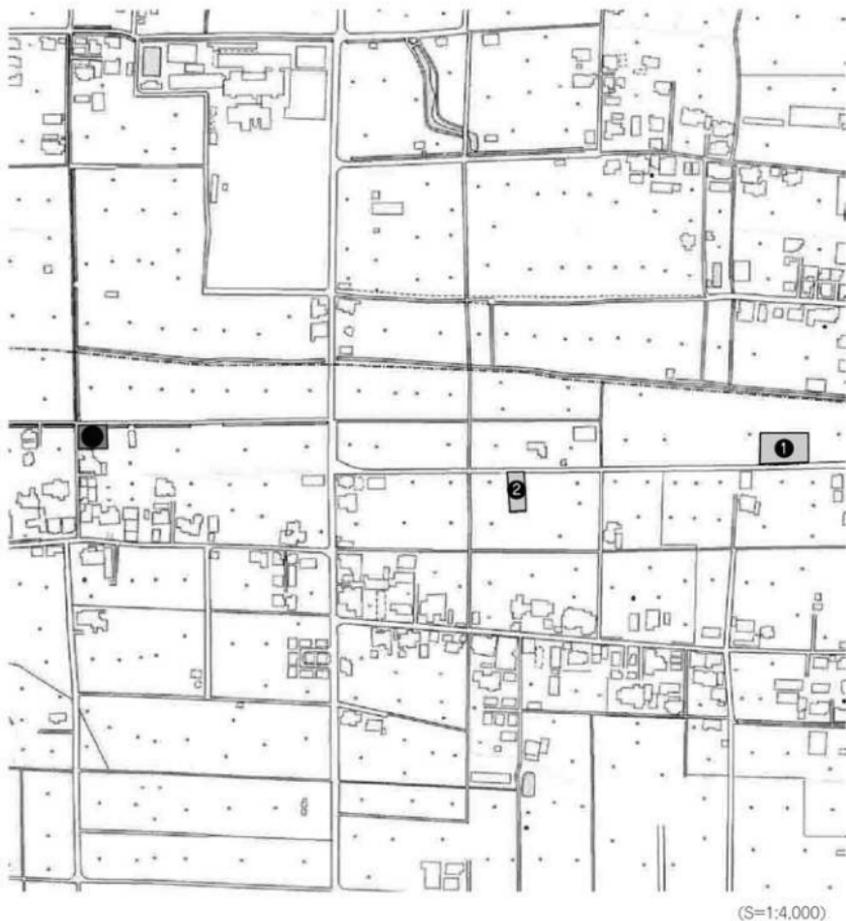
Ⅳ層:床土③、黄褐色土、調査区北壁中央部で厚さ8cmを測る。

Ⅴ層:耕作土③、褐色土と黄色土混じり、調査区北壁中央部と西側で厚さ3～8cmを測る。

Ⅵ層:耕作土④、褐色土、調査区北壁で部分的に厚さ6cmを測る。

グリッドは、南北軸が北から南にN1、N2…N6、N7東西軸が東から西にE1、E2…E8、E9とした。北東角がN1E1区、東から西にN1E2区、N1E3区と呼称する。

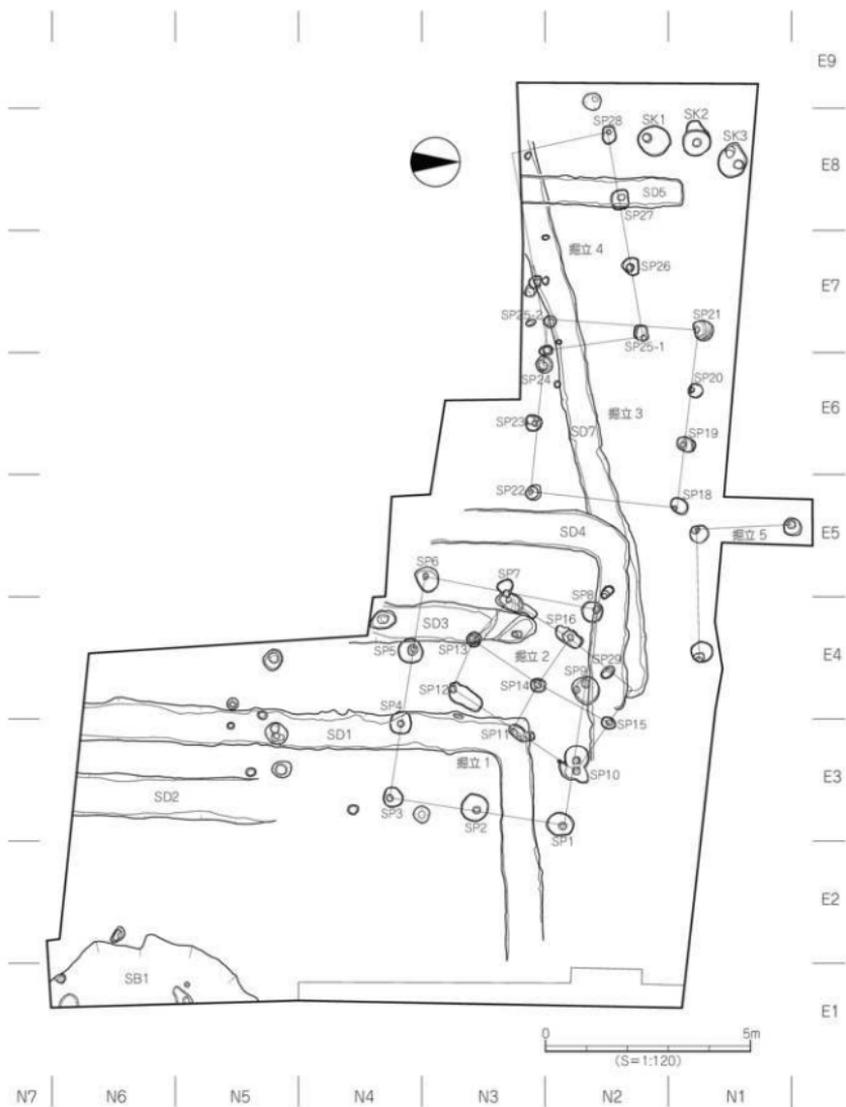
遺構は竪穴建物1棟、掘立柱建物5棟、土坑3基、溝6条、柱穴21基を検出し、遺物は弥生土器、須恵器、陶磁器、石製品が出土した。



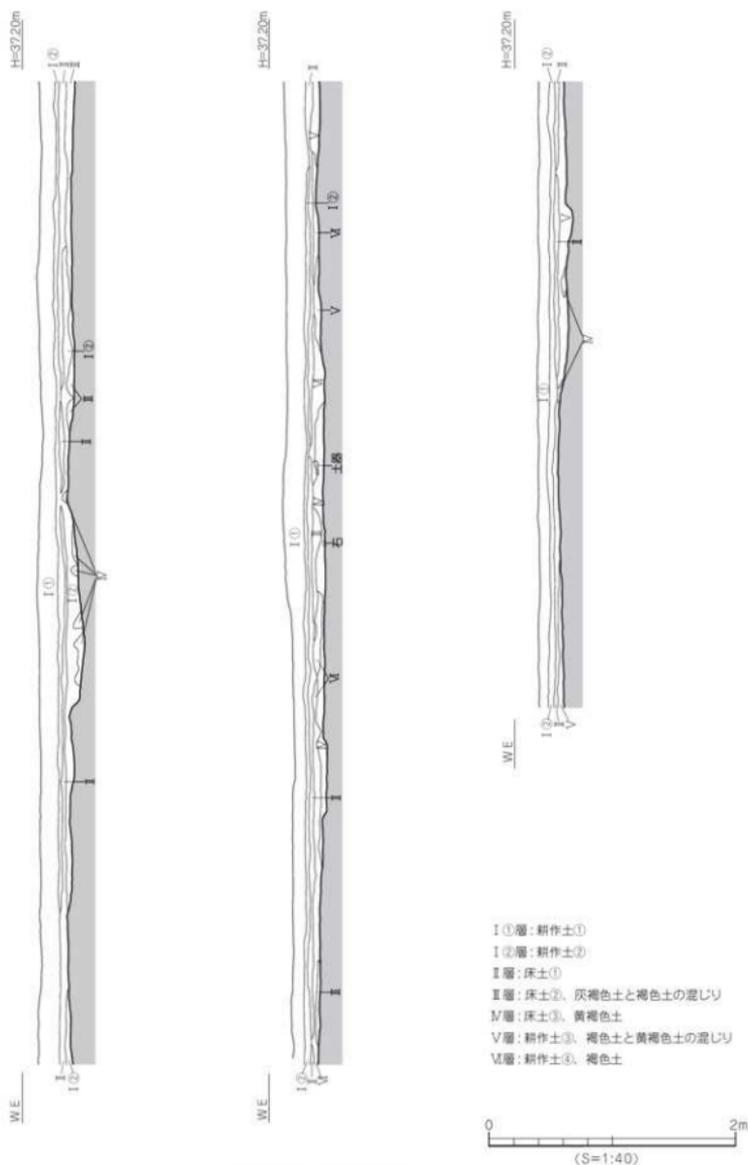
● 中ノ子I遺跡

① 開道跡1次調査 ② 開道跡2次調査

第19図 周辺調査地位位置図



第20図 遺構配置図



第 21 図 北壁土層図

第3節 遺構と遺物

(1) 弥生時代

検出した遺構は竪穴建物1棟、土坑3基である。

1) 竪穴建物 (SB)

SB1 (第22図、写真図版11・14)

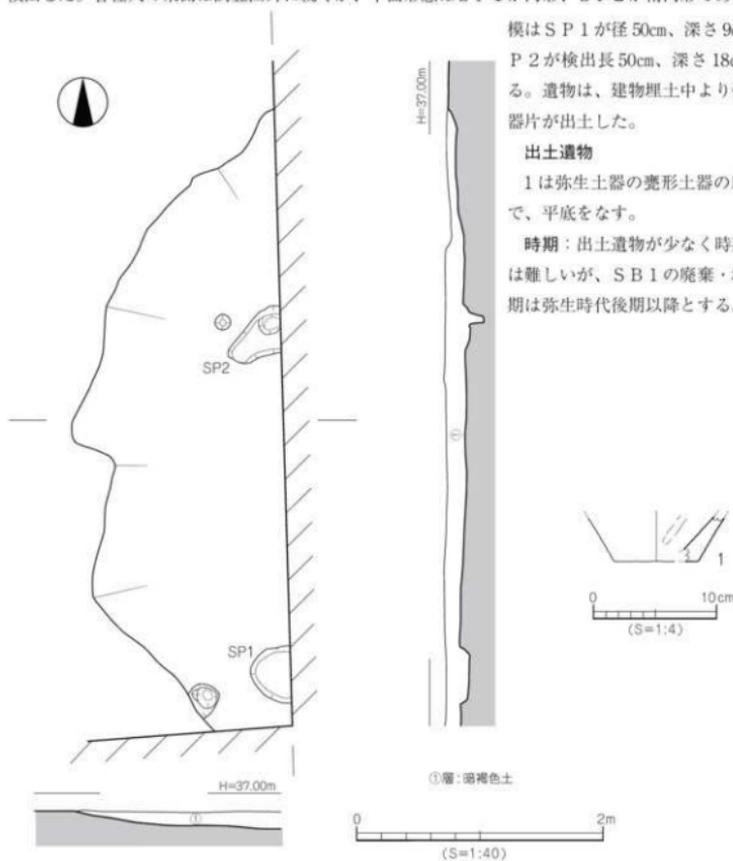
SB1は調査区南東のN5E1区～N6E1区に位置し、東側と南側は調査区外に続く。平面形態は、不整形な円形状で、規模は南北検出長5.06m、東西検出長1.73m、深さ18cmを測る。断面形態は、レンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は、暗褐色土である。内部施設は、支柱穴を2基検出した。各柱穴の東側は調査区外に続くが、平面形態はSP1が円形、SP2が楕円形である。規

模はSP1が径50cm、深さ9cm、SP2が検出長50cm、深さ18cmを測る。遺物は、建物埋土中より弥生土器片が出土した。

出土遺物

1は弥生土器の甕形土器の底部片で、平底をなす。

時期：出土遺物が少なく時期決定は難しいが、SB1の廃棄・埋没時期は弥生時代後期以降とする。



第22図 SB1測量図・出土遺物実測図

2) 土坑 (SK)

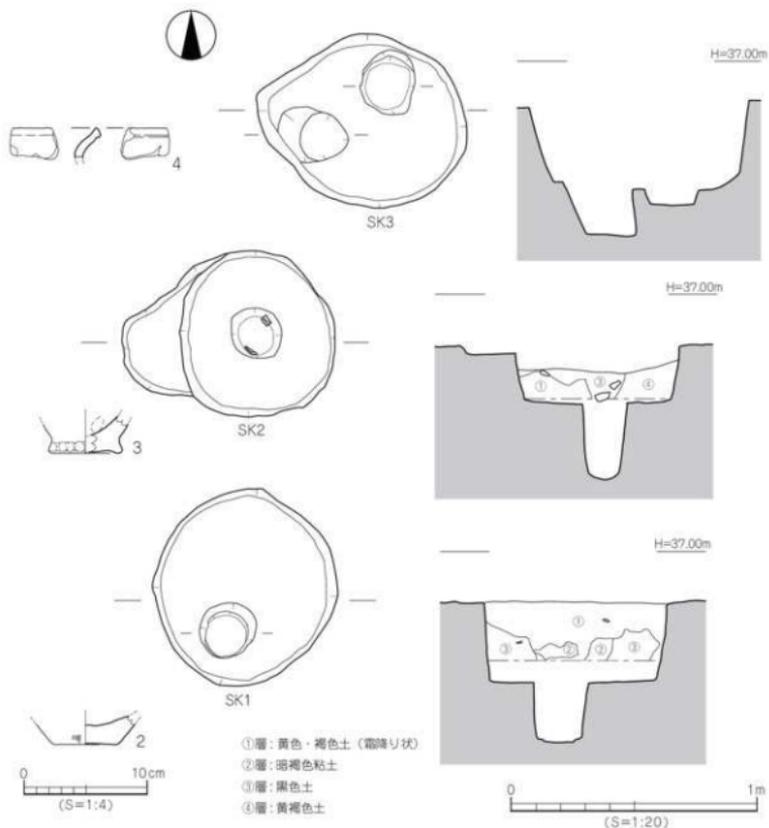
SK 1 (第 23 図、写真図版 11・13・14)

SK 1 は、調査区西部の N2E8 区に位置する。平面形態は円形で、規模は径 0.75m ~ 0.82m、深さ 33cm を測る。断面形態は、逆台形状である。土坑基底面にて、径 22cm、深さ 24cm のピットを検出した。埋土は 3 層に分層され、①層：黄色・褐色土（霜降り状）、②層：暗褐色粘土、③層：黒色土である。出土遺物は、弥生土器である。

出土遺物

2 は弥生土器の壺形土器の底部片で、わずかに上げ底をなす。

時期：出土遺物から、SK 1 の埋没時期は弥生時代後期後半とする。



第 23 図 SK 1・SK 2・SK 3 測量図・出土遺物実測図

S K 2 (第23図、写真図版11・13・14)

S K 2は、調査区西部のN1E8区に位置する。平面形態は円形で、規模は径0.63m～0.67m、深さ23cmを測る。断面形態は、逆台形状である。土坑基底面にて、径17cm、深さ30cmのビットを検出した。埋土は3層に分層され、①層：黄色・褐色土（霜降り状）、②層：黒色土、③層：黄褐色土である。出土遺物は、弥生土器がある。

出土遺物

3は弥生土器の鉢形土器の底部片で、わずかに突出部を持つ上げ底をなす。

時期：出土遺物から、S K 2の埋没時期は弥生時代後期後半とする。

S K 3 (第23図、写真図版11・13・14)

S K 3は、調査区西部のN1E8区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.70m、深さ36cmを測る。断面形態は、逆台形状である。土坑基底面にて、径25cm、深さ19cmと径21cm、深さ7cmのビットを検出した。埋土は、不明である。出土遺物は、弥生土器がある。

出土遺物

4は弥生土器の甕形土器の口縁部片で、「く」の字状を呈する。

時期：出土遺物から、S K 3の埋没時期は弥生時代後期後半とする。

(2) 古墳時代

検出した遺構は掘立柱建物5棟、溝1条である。

1) 掘立柱建物(掘立)

掘立1(第24図、写真図版12・14)

掘立1は調査区中央部のN2E3区～N3E5区に位置し、溝SD1・SD3・SD4に切られる。掘立2とは切り合うが、先後関係は不明である。2間×3間の東西棟で、建物規模は東西長5.4m、南北長4.3mを測る。柱穴は、10基を検出した。平面形態は円形で、規模は径50～70cm、深さ32～46cmを測る。柱痕は、全ての柱穴から検出した。平面形態は円形で、規模は径18cmを測る。柱穴埋土は、不明である。出土遺物は、弥生土器と須恵器がある。

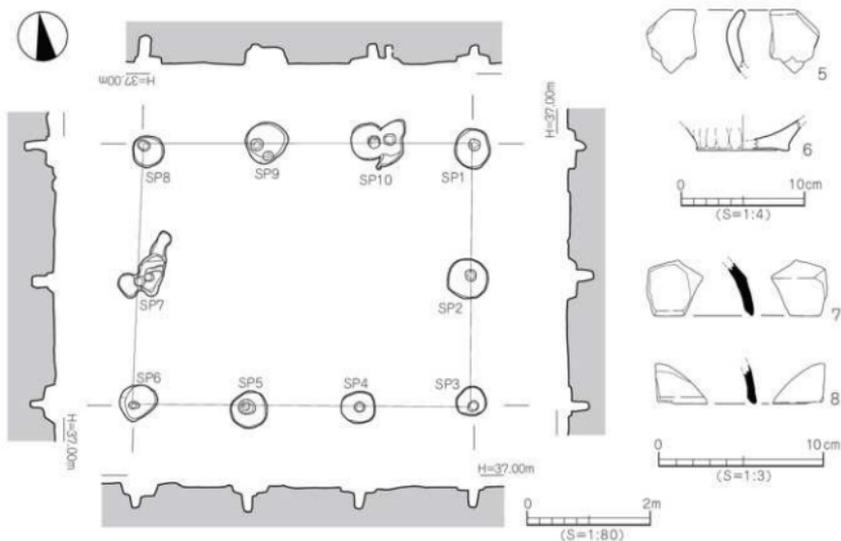
出土遺物(5～8)

5は弥生土器の甕形土器の口縁部。6は弥生土器の甕形土器の底部片。7・8は須恵器の坏蓋片で、口縁端部は内傾する。

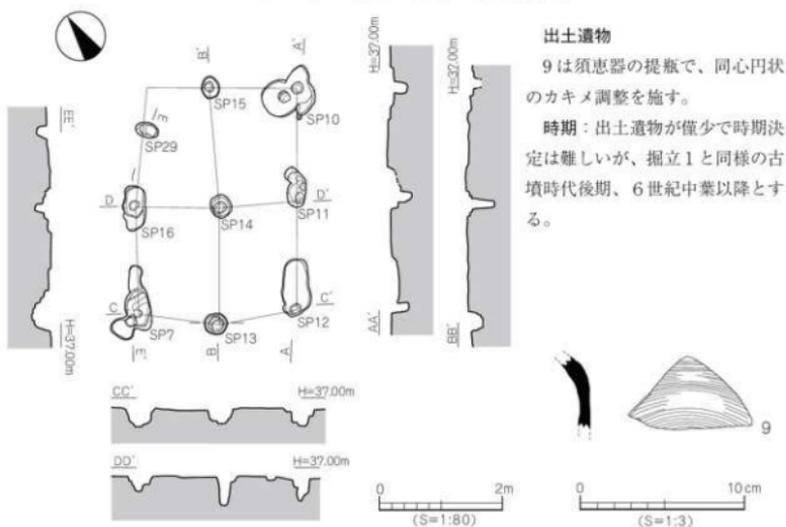
時期：出土した須恵器から、掘立1は古墳時代後期、6世紀中葉以降とする。

掘立2(第25図、写真図版12・14)

掘立2は調査区中央部のN2E3区～N3E5区に位置し、溝SD1・SD3・SD4に切られる。掘立1と切り合うが、先後関係は不明である。2間×2間の総柱で、建物方位は南西から北東に主軸を取り、東西長3.9m、南北長3.7mを測る。柱穴9基の平面形態は円形と楕円形で、規模は径25～80cm、深さ18～46cmを測る。柱穴埋土は、不明である。出土遺物は、須恵器がある。



第24図 掘立1測量図・出土遺物実測図



出土遺物

9は須恵器の提瓶で、同心円状のカキメ調整を施す。

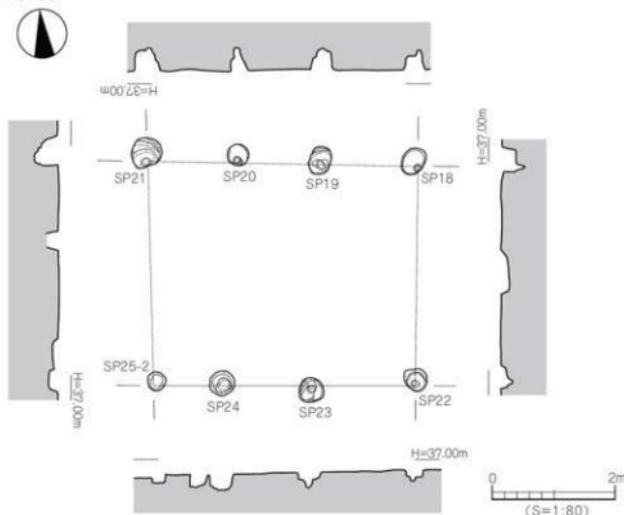
時期：出土遺物が僅少で時期決定は難しいが、掘立1と同様の古墳時代後期、6世紀中葉以降とする。

第25図 掘立2測量図・出土遺物実測図

掘立3 (第26図、写真図版13)

掘立3は調査区西部のN1E5区～N2E7区に位置し、溝SD7(6世紀前半)を切っている。1間×3間の東西棟で、建物規模は東西長4.4m、南北長3.55mを測る。柱穴8基の平面形態は円形で、規模は径30～52cm、深さ15～40cmを測る。柱穴埋土は不明である。各柱穴から、出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため時期決定は難しいが、SD7より後出することから、掘立3は概ね6世紀前半以降とする。



第26図 掘立3測量図

掘立4 (第27図、写真図版13)

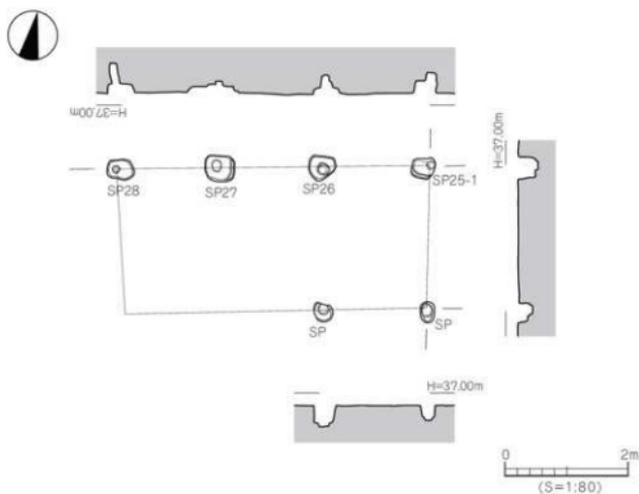
掘立4は調査区西部のN2E7区～N3E8区に位置し、SD7を切りSD5に切られている。1間×3間の東西棟で、建物規模は東西長5.1m、南北長2.4mを測る。柱穴6基の平面形は円形と楕円形で、規模は径24～48cm、深さ20～50cmを測る。柱穴埋土は、不明である。出土遺物は弥生土器片があるが、図化可能な遺物はない。

時期：時期決定しうる遺物はないが、SD7より後出することから、掘立4は概ね6世紀前半以降とする。

2) 溝(SD)

SD7 (第28・29図、写真図版13・14)

SD7は調査区の西部から中央部のN2E4区～N3E8区に位置し、南西側は調査区外に続く。SD4・SD5及び掘立3と掘立4に切られている。規模は検出長13.83m、幅0.78m、深さ13cmを測る。断面形態は、レンズ状である。埋土は2層に分層され、①層：暗褐色粘質土、②層：薄褐色粘性土、③層：暗褐色粘性土である。出土遺物は、弥生土器と須恵器、石製品がある。

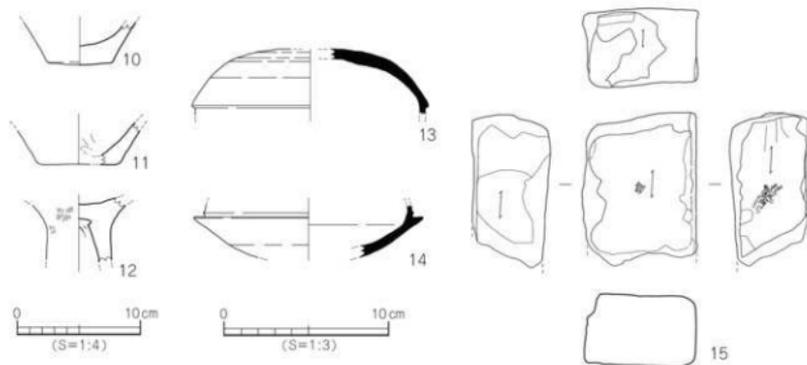


第27図 掘立4測量図

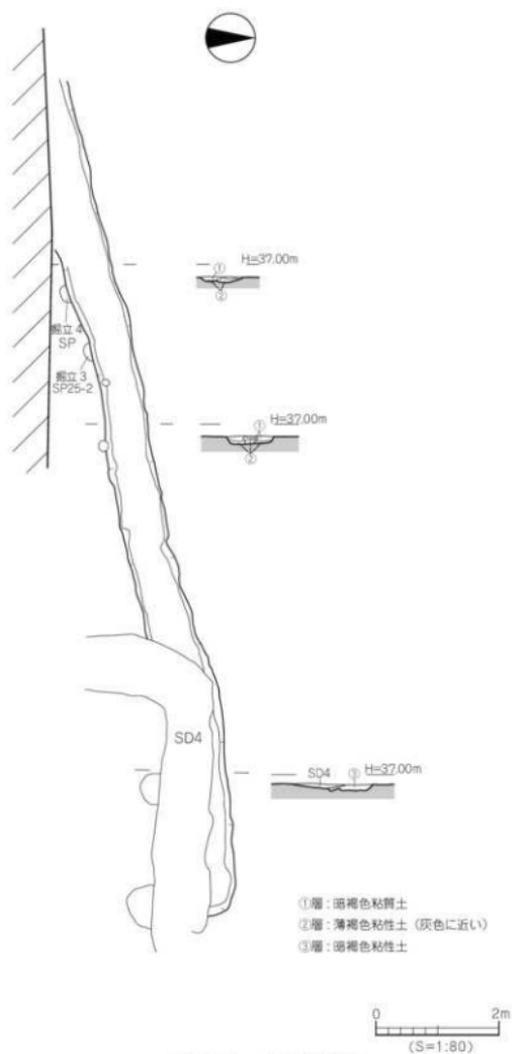
出土遺物 (10～15)

10～12は弥生土器で、10・11は甕形土器の底部片、12は高坏形土器の基部である。13は須恵器坏蓋、14は坏身である。13は断面三角形の稜を持つ。15は石英粗面岩の砥石で、3面の砥面を持つ。

時期：出土した須恵器の特徴から、SD7の埋没時期は6世紀前半とする。



第28図 SD7出土遺物実測図



第 29 図 SD7 測量図

(3) 近世

1) 溝 (SD)

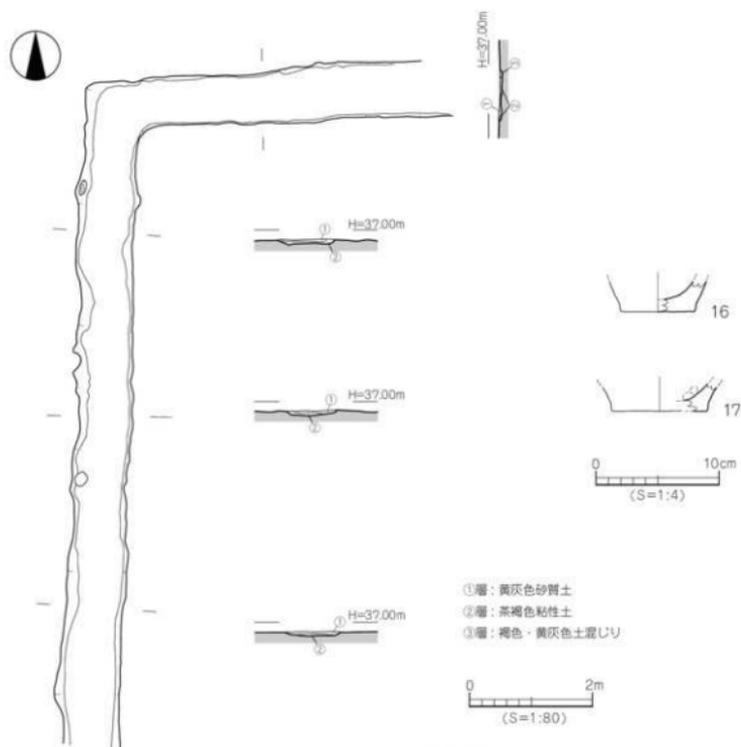
SD 1 (第30図、写真図版11)

SD 1は調査区南東部のN3E2区～N6E4区に位置し、「L」字状に曲がる。近世の柱穴に切られ、掘立1と掘立2の柱穴を切る。規模は検出長16.0m、幅0.82m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は3層に分層され、①層：黄灰色砂質土、②層：茶褐色粘性土、③層：褐色・黄灰色土混じりである。出土遺物は弥生土器、須恵器、陶磁器がある。

出土遺物 (16・17)

16・17は弥生土器の甕形土器の底部片で、平底をなす。

時期：SD 1は検出状況と埋土から、近世の農耕に伴う溝とする。



第30図 SD 1測量図・出土遺物実測図

SD 2 (第31図、写真図版11)

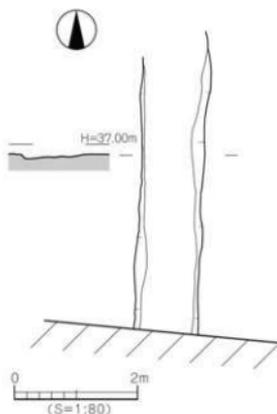
SD 2は、調査区南東部のN5E3区～N6E3区に位置する。規模は検出長4.98m、幅1.01m、深さ8cmを測る。断面形態は皿状であり、埋土は不明である。出土遺物は須恵器、陶磁器がある。

時期：SD 2は検出状況と出土遺物から、近世の農耕に伴う溝とする。

SD 3 (第32図、写真図版11)

SD 3は調査区中央部のN3E4区～N4E4区に位置し、南側は調査区外に続く。近世の柱穴に切られ、掘立1と掘立2を切る。規模は検出長4.58m、幅0.81m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状であり、埋土は不明である。出土遺物は、須恵器と陶磁器がある。

時期：SD 3は検出状況と出土遺物から、近世の農耕に伴う溝とする。



第31図 SD 2測量図

SD 4 (第33図、写真図版13)

SD 4は調査区中央部のN2E3区～N3E5区に位置し、SD 7、掘立1、掘立2を切り、南側は調査区外に続く。規模は検出長9.31m、幅0.96m、深さ7cmを測る。断面形態は、レンズ状である。埋土は2層に分層され、①層：黄灰色砂質土、②層：褐色粘質土である。出土遺物は、弥生土器と須恵器がある。

出土遺物

18は弥生土器の甕形土器の底部片で、小さな平底をなす。

時期：SD 4は、検出状況と埋土がSD 1と酷似することから、近世の農耕に伴う溝とする。

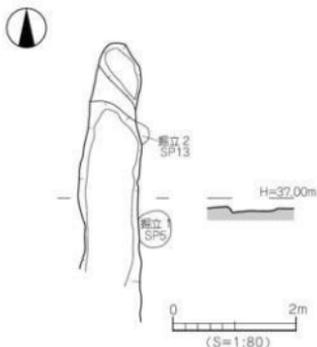
SD 5 (第34図、写真図版13)

SD 5は調査区西部のN1E8区～N3E8区に位置し、掘立4、SD 7を切り、南側は調査区外に続く。規模は検出長4.0m、幅0.7m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状であり、埋土は不明である。出土遺物は弥生土器、須恵器、陶磁器がある。

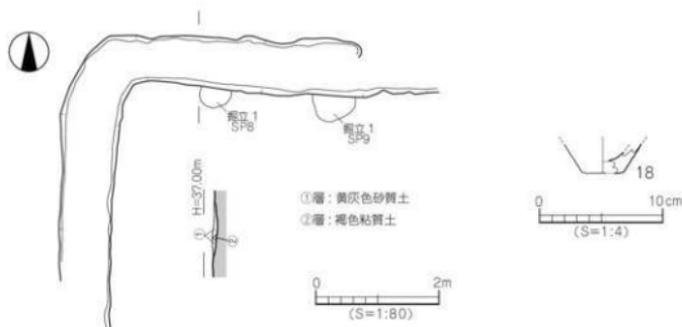
出土遺物

19は須恵器の坏蓋片で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。

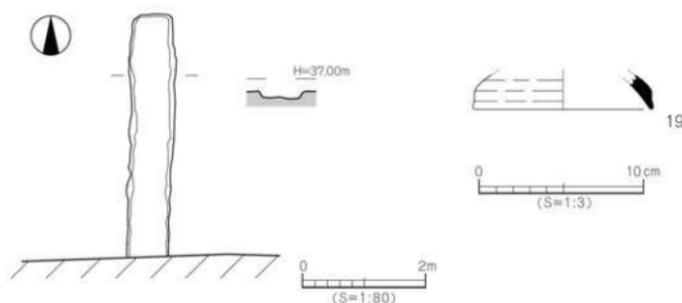
時期：SD 5は出土遺物から、近世の農耕に伴う溝とする。



第32図 SD 3測量図



第33図 SD4測量図・出土遺物実測図



第34図 SD5測量図・出土遺物実測図

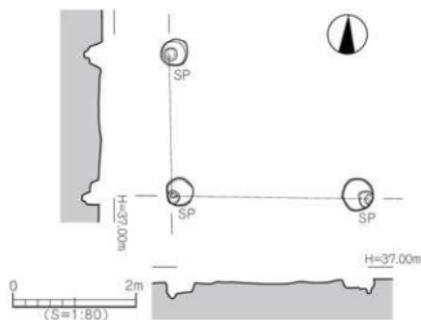
(4) 時期不明遺構と遺物

1) 掘立柱建物 (掘立)

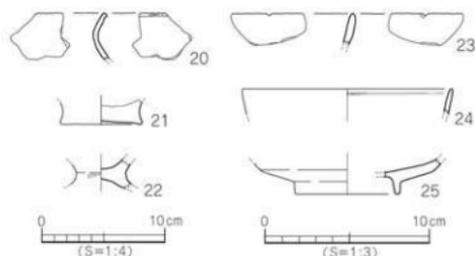
掘立5 (第35図、写真図版14)

掘立5は、調査区北部のN1E4区～N1E5区に位置する。1間×1間以上の建物で、規模は東西検出長3.18m、南北検出長2.35mを測る。柱穴3基の平面形態は円形で、規模は径43～50cm、深さ23～28cmを測る。柱穴埋土は、不明である。出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため時期決定は困難である。



第35図 掘立5測量図



第36図 地点不明出土遺物実測図

2) 地点不明出土遺物 (20～25)
(第36図、写真図版14)

20～22は弥生土器。20は、甕形土器の口縁部片、21は底部片。22は高坏形土器もしくは脚付鉢の基部。23は土師器の甕形土器の口縁部片。24は陶磁器碗の口縁部で、口縁部内面に1条の圈線が巡る。25は陶器の高台付碗である。

第4章 小 結

本調査からは弥生時代、古墳時代、近世の遺構と遺物を検出した。遺構は堅穴建物1棟、土坑3基、掘立柱建物5棟、溝6条、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器である。

弥生時代 遺構では、堅穴建物1棟(SB1)と土坑3基がある。SB1は削平が著しく平面形態は不明瞭な円形状を呈し、立ち上がりも明確でないものである。内部施設では周壁溝も無く、柱穴も浅いことから、報告ではSB1としているが、自然の地形の窪みの可能性も考えられる。

土坑3基は、しっかりとした掘り方をもち、規模は、径67～86cm、深さ23～36cmを測る。遺物は、弥生時代後期後半期の土器片が出土している。

古墳時代 遺構では、掘立柱建物4棟、溝1条である。掘立柱建物は方位より3グループ(グループ①・②・③)に分けられると考えられる。グループ①は建物方位を真北より10°余り西に振る、掘立柱1と掘立柱3、グループ②は建物方位を真北より80°余り西に振る掘立柱4、グループ③は建物方位を真北より30°余り東に振る掘立柱2である。グループ②は、昭和63年度に調査が完了した開遺跡で検出した6世紀前半以降の掘立柱建物と方位が同じであり、同時期の建物と考えられる。そのほかの建物も、ほぼ同時期の6世紀後半までの時期と考えられる。このほか、SD7は出土遺物から掘立柱建物と同じ6世紀代の溝と考えられる。

近世 遺構では溝5条がある。溝は方向、埋土と出土遺物から、近世の農耕に伴う溝と考えられる。

本調査からは、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構を検出した。調査地周辺の調査では過去に弥生時代の遺物の出土例はあるが、遺構は検出されていない。本調査で検出した堅穴建物と土坑が、初めての検出事例となる。調査から集落に関連する土坑を検出したことにより、弥生時代後期の集落が、本調査地周辺に展開するものと考えられる。

古墳時代の遺構は、調査地の東500mに位置する開遺跡1次、2次調査から堅穴建物5棟、掘立柱建物6棟を検出している。本調査から、掘立柱建物4棟と溝を検出したことにより、本調査地から開遺跡までの広い範囲に、6世紀代の集落が展開していたことが明らかとなった。

【文献】

「開遺跡1次調査、開遺跡2次調査」『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書57

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) □→口縁部、底→底部、天→天井部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウソモ、赤→赤色土粒、密・精→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 17 竪穴建物一覧

竪穴 (S B)	地区	平面形	規模 長さ×幅×壁高 (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	N5E1~ N6E1	不整形	(5.06) × 1.73 × 0.18	暗褐色土	主柱穴		弥生時代後期以降	

表 18 掘立柱建物一覧

掘立	地区	方位	規模 (間)	桁行長 (m)	梁行長 (m)	床面積 (㎡)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	N2E3~ N3E5	東西	2 × 3	5.40	4.30	23.2	不明	弥生土器 須恵器	6世紀中葉以降	SD1・3・4 に切られる。
2	N2E3~ N3E5	北東~南西	2 × 2	3.90	3.70	14.4	不明	須恵器	6世紀中葉以降	SD1・3・4 に切られる。
3	N1E5~ N2E7	東西	1 × 3	4.40	3.55	15.6	不明		6世紀前半以降	SD7を切る。
4	N2E7~ N3E8	東西	1 × 3	5.10	2.40	12.2	不明	弥生土器	6世紀前半以降	SD7を切り、SD5に切られる。
5	N1E4~ N1E5	東西	(1) × (1)	(3.18)	(2.35)	(7.47)	不明	不明		

表 19 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	N2E8	円形	逆台形状	0.82 × 0.75 × 0.33	黄色~褐色土(霜降状) 暗褐色粘土・黒色土	弥生土器	弥生時代後期後半	
2	N1E8	円形	逆台形状	0.67 × 0.63 × 0.23	黄色~褐色土(霜降状) 黒色土・黄褐色土	弥生土器	弥生時代後期後半	
3	N1E8	精円形	逆台形状	0.86 × 0.70 × 0.36		弥生土器	弥生時代後期後半	

表 20 溝一覧

(1)

溝 (S D)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	N3E2~N6E4	南東	皿状	16.0 × 0.82 × 0.08	黄灰色砂質土 赤褐色粘性土 融・赤色土粒	弥生土器 須恵器 陶磁器	近世	掘立1・掘立2を切る。
2	N5E3~N6E3	南北	皿状	4.98 × 1.01 × 0.08	不明	須恵器 陶磁器	近世	
3	N3E4~N4E4	南北	皿状	4.58 × 0.81 × 0.10	不明	須恵器 陶磁器	近世	掘立1・掘立2を切る。

演一覽

(2)

溝(SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考	
4	N2E3~N3E5	南東	レンズ状	9.31 × 0.96 × 0.07		黄灰色砂質土 褐色粘質土	弥生土器 須恵器	近世 近世	掘立1・掘立2を切る。
5	N1E8~N3E8	海北	皿状	4.00 × 0.70 × 0.10			弥生土器 須恵器 陶磁器		SD7、掘立4を切る。
6	欠番								
7	N2E4~N3E8	東西	レンズ状	13.83 × 0.78 × 0.13		暗褐色粘質土 青褐色粘質土 暗褐色粘質土	弥生土器 須恵器 石製品	6世紀前半	SD4・5、掘立3・4に切られる。

表 21 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
1	甕	底径 (6.6) 残高 3.7	平底の底部片。	ナデ	ナデ (指頭痕)	黒褐色 にぶい黄褐色	砂粒 ○	黒照	14

表 22 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
2	甕	底径 (5.2) 残高 2.3	わずかに上げ底の底部片。	⑩ ナデ ハケ→ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~2) ○		14

表 23 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
3	鉢	底径 (5.4) 残高 3.0	上げ底の底部片。	ナデ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	灰黄色・暗灰黄色 灰黄色	石 (1) ○		14

表 24 SK3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
4	甕	残高 2.5	外反する口縁部の端部は肥厚され、 下方に段を持つ。	ナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) 金 ○		14

表 25 掘立1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
5	甕	残高 5.1	短く外反する口縁部の端部は丸い。	マメフ	マメフ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1) ○		14
6	甕	底径 (7.0) 残高 2.5	突出する上げ底の底部。	ナデ (指頭痕)	マメフ	にぶい黄褐色 暗灰黄色	石・長 (1~2) ○		14
7	坏蓋	残高 3.3	口縁部片。口縁端部は段を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~2) ○		14
8	坏蓋	残高 2.5	口縁部片。口縁端部は内傾する面を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		14

表 26 掘立2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
9	提籠	残高 4.5	胴部片。同心円状のカキ目を施す。	カキ目	回転ナデ	灰黄色 灰色	密 ○		14

表 27 SD7出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
10	甕	底径 (5.2) 残高 3.5	底部片。僅かに中央部が突出する。	ナデ	ナデ	橙色 灰白色	石・長 (1) ○		
11	甕	底径 (6.0) 残高 3.4	底部の小片。	ナデ (指頭痕)	マメフ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ○		
12	高坏	残高 5.3	柱部と坏部の接合部。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 褐色	石 (1) 赤 ○		
13	坏蓋	残高 4.0	丸味を持つ天井部。天井部と口縁部を分ける境に明瞭な稜を持つ。	回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄灰色 灰色	密 ○	自然釉	
14	坏身	残高 3.3	短く水平に伸びる受部。受部端部は尖り気味に丸い。	◎ 回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密・長 (1) ○		

表 28 SD7出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
15	砥石		石英粗面岩	9.1	6.8	4.4	492.29		14

表 29 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
16	甕	底径 (5.8) 残高 2.5	平底の底部の小片。	マメフ	マメフ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~2) ○		
17	甕	底径 (7.6) 残高 2.2	平底の底部の小片。	ナデ (指頭痕)	ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	石長 ①~② 金 ○		

表 30 SD4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
18	甕	底径 (3.4) 残高 2.4	底部の小片。	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長 (1~2) ○		

表 31 SD5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
19	坏蓋	口径 (10.6) 残高 2.1	口縁部の小片。端部は丸味を持つ。	◎ ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		

表 32 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
20	甕	残高 3.8	口縁部片。器壁は薄い。	ナデ	ナデ	にぶい橙黄色 にぶい橙黄色	石 (1) ○		
21	甕	底径 (6.4) 残高 2.0	僅かに上げ底の底部片。	ナデ	剥離	にぶい橙色 にぶい褐色	石 (1) ○		
22	高坏	残高 2.4	坏部と脚部の接合部。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 褐色	石 (1) ○		
23	甕	残高 1.9	口縁部片。器壁は薄い。	マメフ	ナデ	褐色 灰色	石 (1) ○		
24	碗	底径 (12.8) 残高 1.6	口縁部片。口縁部内面に1条の溝彫あり。	施釉	施釉	釉(灰オリーブ色) (呉須) 青灰色	密 ○		
25	碗	底径 (5.8) 残高 2.2	高台付。	施釉	施釉	暗灰褐色 にぶい赤褐色	密 ○		

第V章

下 芍 屋 遺 跡

第V章 下菟屋遺跡

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第37図)

平成7年2月13日、松山市平井町甲2389番、甲2390番、甲2391番における宅地造成に先立って、当該地が松山市の周知の埋蔵文化財包蔵地「№152 平井遺物包含地」内に位置することから、埋蔵文化財確認願及び文化財保護法は第57条の2第1項の届出書（以下、届出書という）が松山市教育委員会（以下、市教委という）に提出された。これを受け、市教委は平成7年2月27日に試掘調査を実施し、結果、古墳時代の竪穴建物、溝状遺構、土坑状遺構、柱穴と土師器、須恵器を確認し、当該地の一部において遺跡が展開することを推測するに至った。その後、この結果と届出書を受けた愛媛県教育委員会より発掘調査の指示が下りたため、申請者及び関係者と協議し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、国庫補助を受け、市教委文化教育課が主体となり、平成7年6月19日より着手した。

なお、申請地周辺では、現在までに多くの調査が行われている。申請地の南西から北西には松山市道が建設に先立ち発掘調査が行われ、旧国道11号より北では東から下菟屋遺跡2次、3次調査、4次調査、南では平井遺跡3次調査～9次調査が行われ、弥生時代から古代の遺構や遺物が多数検出されている。

(2) 調査の経緯 (第38・40図)

初めに、調査区の設定を行った。範囲は、東西方向に北側約14mと南側約28m、南北方向に約30mの台形状の調査区を設定した。掘削は、試掘調査の結果より重機を使用して地表下20cmまで行った。掘削土は、南部を排土置き場とした。重機による掘削後、遺構検出を行い、竪穴建物、溝、土坑、柱穴を検出した。遺構測量用に6mグリッドを設置し、平板測量にて50分の1の遺構配置図の作成と遺構埋土の土色確認を行った。続いて、調査壁の測量を行った。遺構の掘削は、竪穴建物より開始した。遺構内からは遺物が出土し、測量と写真撮影を行った。竪穴建物、土坑、溝、柱穴のすべての遺構の掘削が終了後、遺構完掘状況の測量と写真撮影を行い屋外調査を終了する。

第2節 層位 (第39図)

基本層位は、土色の違いにより4層に分層した。

I層：耕作土。

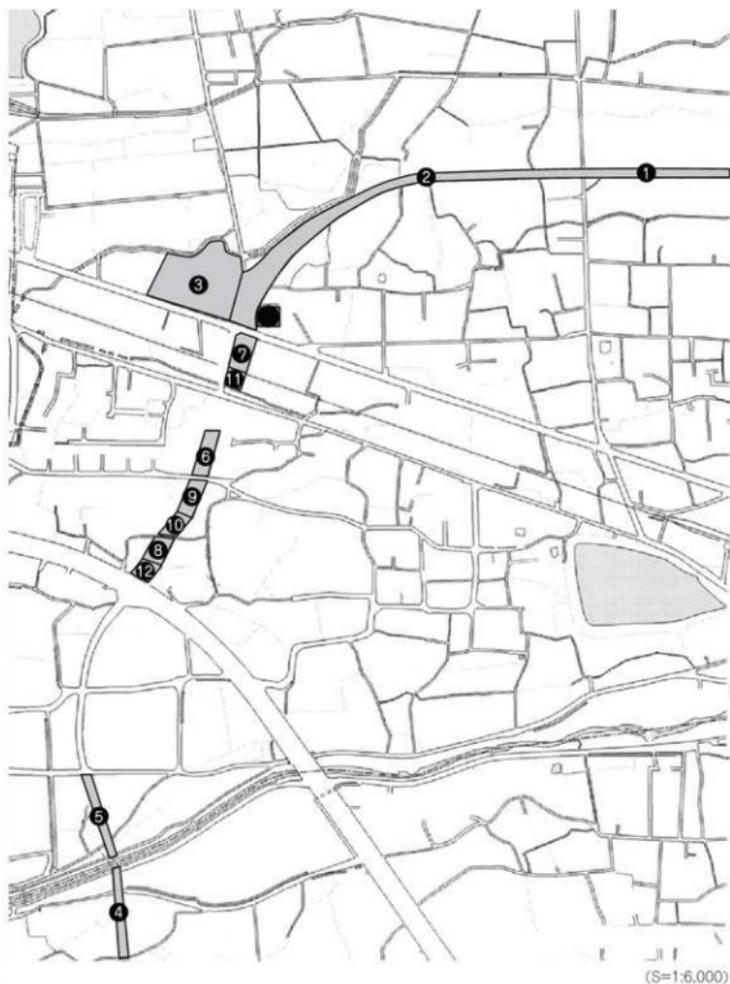
II層：床土。

III層：淡灰褐色土（遺物包含層）。

IV層：黄色粘性土（地山）。

グリッド名は、南北方向に北から南に1・2…5・6、東西方向に東からA・B…D・Eとした。北東隅から西にA1区、B1区と呼称する。

遺構は竪穴建物9棟、土坑5基、溝4条、性格不明遺構1基、石組遺構1条、柱穴186基を検出し、遺物は弥生土器、須恵器、石製品が出土した。



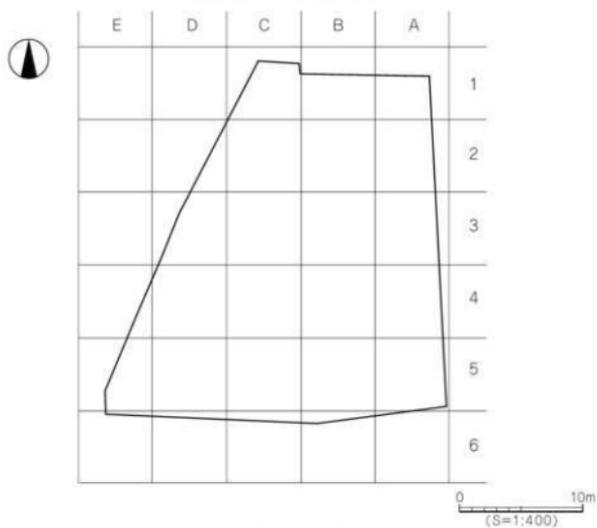
- 下町屋遺跡
- ① 下町屋遺跡 2 次調査 ② 下町屋遺跡 3 次調査 ③ 下町屋遺跡 4 次調査 ④ 平井遺跡 ⑤ 平井遺跡 2 次調査
 ⑥ 平井遺跡 3 次調査 ⑦ 平井遺跡 4 次調査 ⑧ 平井遺跡 5 次調査 ⑨ 平井遺跡 6 次調査 ⑩ 平井遺跡 7 次調査
 ⑪ 平井遺跡 8 次調査 ⑫ 平井遺跡 9 次調査

第 37 図 周辺調査地位置図



(S=1:1,500)

第 38 図 調査地位置図



第 39 図 区割図



第 40 図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

(1) 古墳時代

検出した遺構は、竪穴建物9棟、土坑5基、溝4条、性格不明遺構1基である。

1) 竪穴建物 (SB)

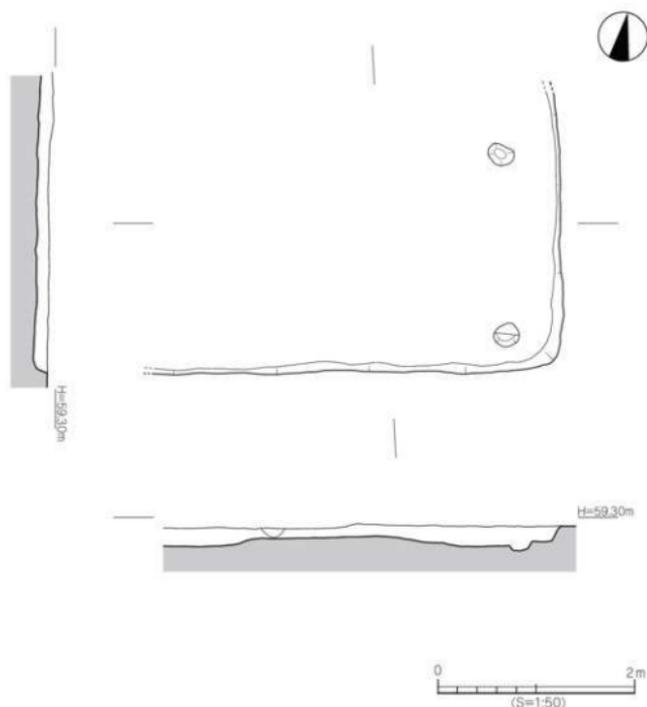
SB1 (第41・42図、写真図版16)

SB1は調査区北西部のC1区に位置し、北側と西側は調査区外に続く。平面形態は1ヶ所のコーナー部を検出したことにより、方形と考えられる。規模は東西検出長4.05m、南北検出長3.10m、壁高20cmを測る。埋土は、不明(未注記)である。出土遺物は須恵器と土師器がある。

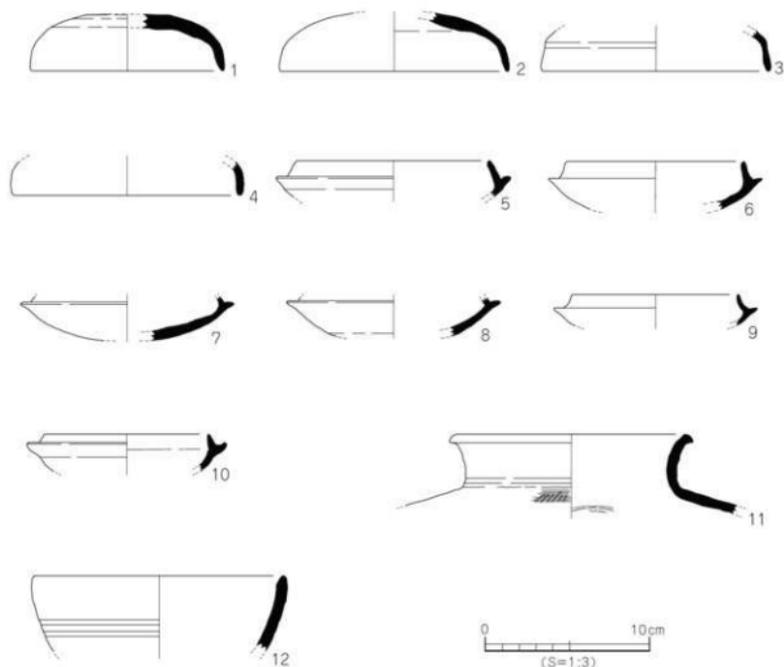
出土遺物 (1~12)

1~4は坏蓋。1は、焼け歪み有。2は、口縁端部が尖り気味に丸い。3・4の口縁部は丸い。5~10は坏身。6・7・9は焼け歪み有。11は甕形土器。口縁部は肥厚され下方に拡張される。12は塊で、外面に2本の沈線を巡らす。

時期：出土した須恵器の形態より、SB1の廃棄・埋没時期は6世紀末とする。



第41図 SB1測量図



第42図 SB1 出土遺物実測図

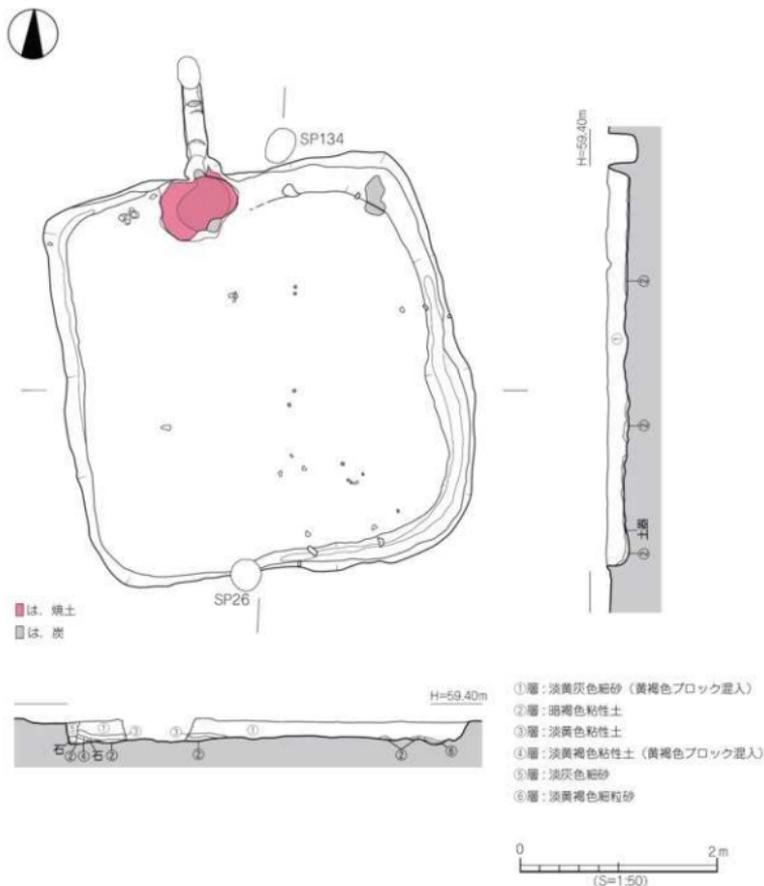
SB2 (第43～46図、写真図版16・18・19・22・23)

SB2は調査区北部のB・C2区に位置し、SP26に切られ、SB3を切る。平面形態は方形を呈し、規模は南北長4.2m、東西長4.1m、壁高18cmを測る。建物埋土は、6層に分層でき、①層：淡黄灰色細砂（黄色ブロック混入）、②層：暗褐色粘性土、③層：淡黄色粘性土、④層：淡黄褐色粘性土（黄色ブロック混入）、⑤層：淡灰色細砂、⑥層：淡黄褐色細粒砂である。内部施設は周壁溝、カマド、煙道がある。周壁溝は、住居の東半部で検出した。規模は幅20～46cm、深さ10cmを測る。カマドは住居北壁中央に位置し、平面形態は馬蹄形である。規模は1.1m×0.74m、高さ14cmである。煙道は、カマド中央から住居外に延び北端を柱穴に切られる。規模は長さ1.25m、幅20cm、深さ7～14cmを測る。カマドと煙道の埋土は10層に細分され、①層：淡赤色粘性土、②層：暗色粘性土（炭、灰含む）、③層：濃赤色粘性土（カマド本体）、④層：淡黄色細粒砂層（造り付けカマド本体）、⑤層：明黄色粘性土、⑥層：明色粘性土、⑦層：淡灰色土（灰層）、⑧層：淡灰色土（灰層）、⑨層：淡灰黄色細粒砂層、⑩層：淡黄赤色細粒砂ブロックである。出土遺物は、土師器、須恵器、砥石、焼土、炭がある。

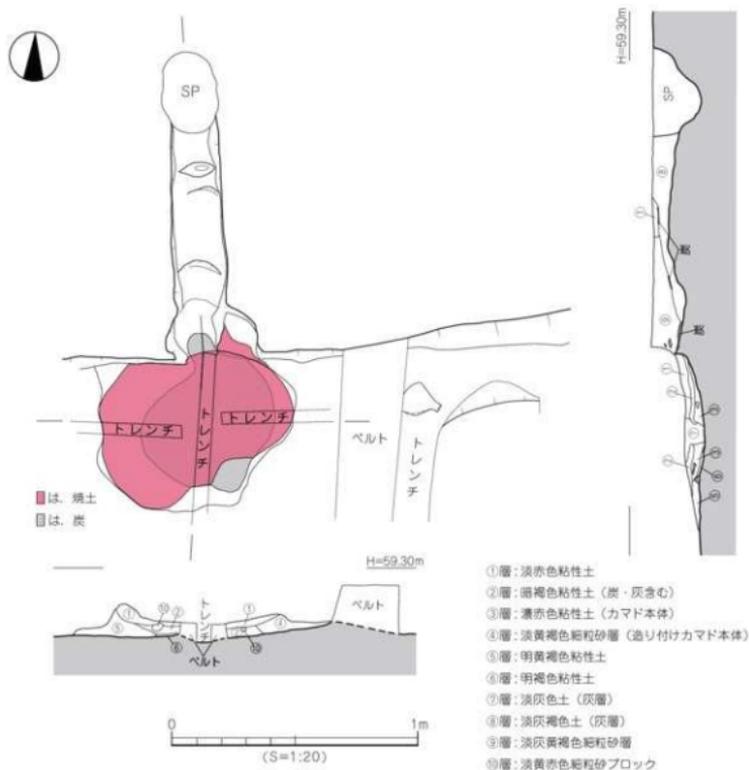
出土遺物 (13～25)

13～17は坏蓋。13・15・16の口縁端部は尖り気味に丸い。14・17の口縁端部は丸い。18・19は坏身。18の受部は短く水平に伸びる。19の受部は外上方に伸びる。20は坏で、体部外面に2本の沈線が巡る。21は埴。直立する口縁部。22・23は土師器の甌。22は口縁部片。23は把手部。24は弥生土器の高坏形土器の口縁部片。25は砥石で、4面の砥面をもち、よく使い込まれている。

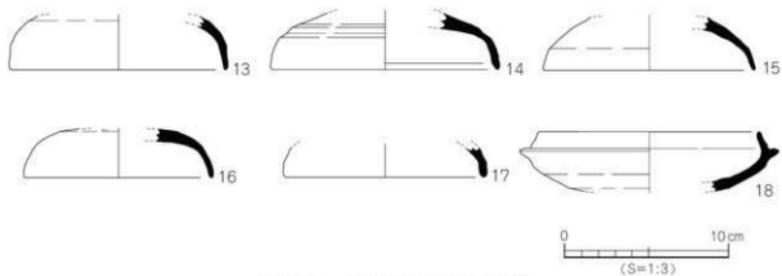
時期：出土した須恵器の形態より、SB2の廃棄・埋没時期は6世紀後半～末とする。



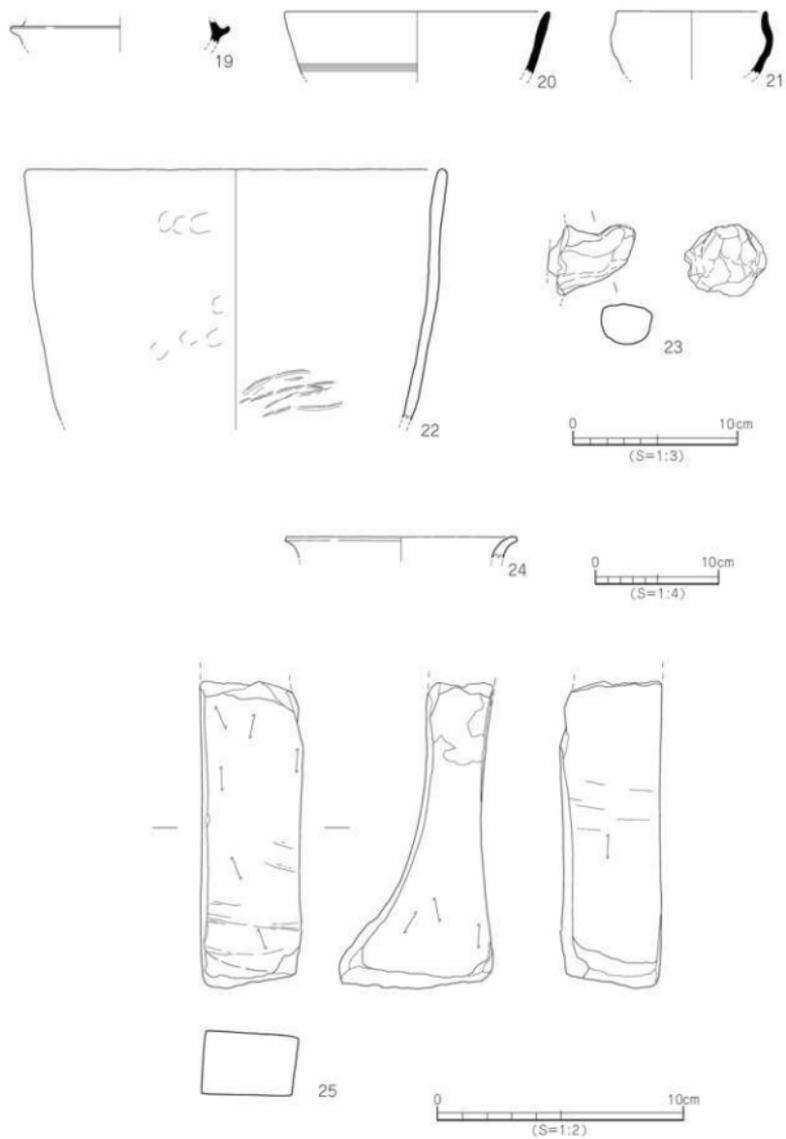
第43図 SB2測量図



第44図 SB2カマド測量図



第45図 SB2出土遺物実測図①



第46図 SB2出土遺物実測図②

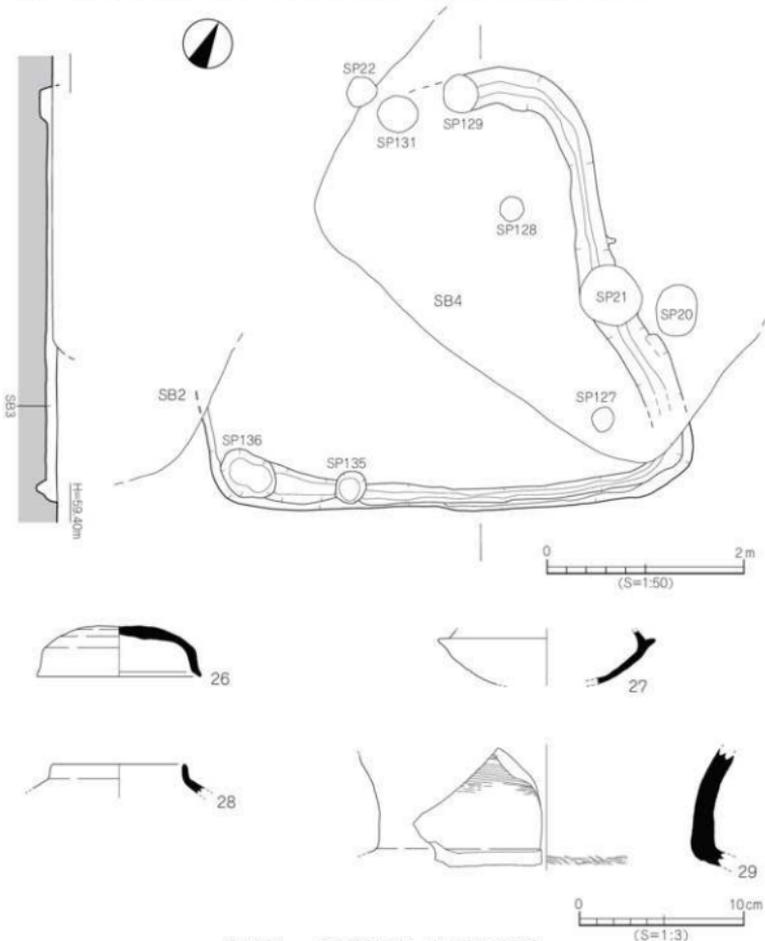
SB3 (第47図、写真図版17・22)

SB3は調査区北部のA・B2区に位置し、SB2、SB4、及び6基の柱穴に切られる。平面形態は方形で、規模は一辺4.9m、壁高14cmを測る。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝の規模は、幅20～30cm、深さ10cmを測る。建物理土は不明(未注記)である。出土遺物は須恵器がある。

出土遺物 (26～29)

26は短頸壺の蓋。天井部は平坦で、口縁端部は内傾する面を持つ。27は坏身。短く水平に伸びる受部。
28は短頸壺。短く直立する口縁部。29は甕形土器。外反気味の口縁部。

時期：出土した須恵器の形態より、SB3の廃棄・埋没時期は6世紀後半とする。

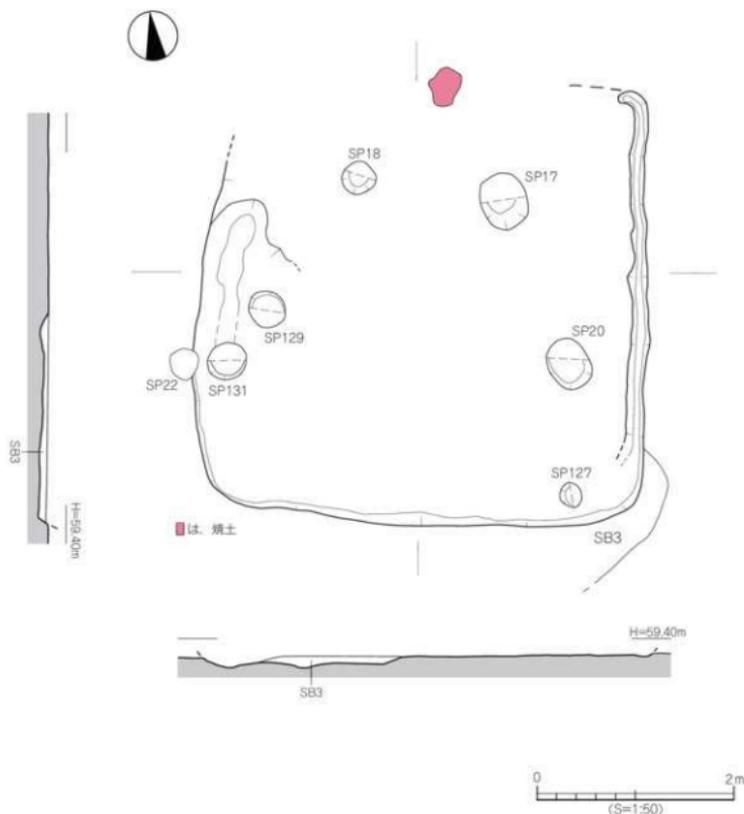


第47図 SB3測圖・出土遺物実測図

SB4 (第48図、写真図版17・22)

SB4は調査区北部のA1～B2区に位置し、SB3を切り、10基の柱穴に切られる。平面形態は方形で、規模は一辺4.5m、壁高4cmを測る。内部施設は、周壁溝を検出した。規模は幅10～18cm、深さ2cmを測る。このほか、住居北側にて焼土を検出した。出土地点から判断すると、焼土はSB4のカマドの一部である可能性が考えられる。建物埋土は不明(未注記)である。出土遺物は須恵器があるが、小片の為に図化出来ない。

時期：出土した須恵器の形態とSB3に後出することから、SB4の廃棄・埋没時期は6世紀末とする。



第48図 SB4測量図

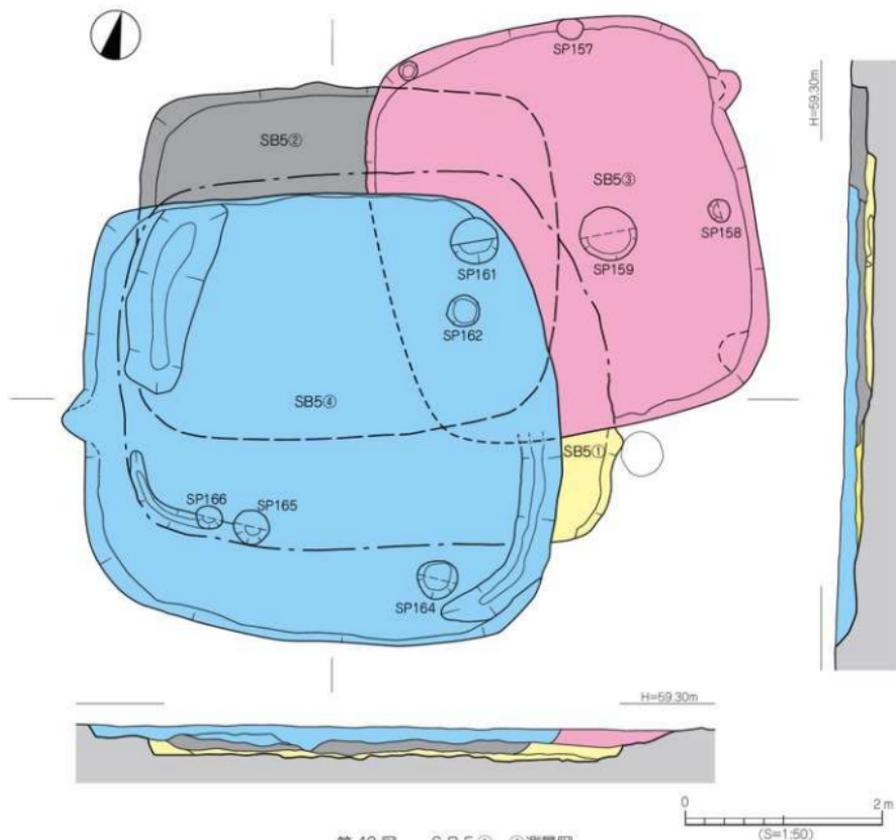
SB5① (第49・50図、写真図版22・23)

SB5①は調査区中央西のC3～D4区に位置し、SB5②、SB5③、SB5④、及び4基の柱穴に切られる。平面形態は方形で、規模は長さ4.95m、幅3.80m、壁高30cmを測る。内部施設は周壁溝を検出した。周壁溝は建物南西部と北西部に位置し、規模は幅12～70cmを測る。建物埋土は不明(未注記)である。出土遺物は須恵器と土師器があるが、図化しうるものはない。

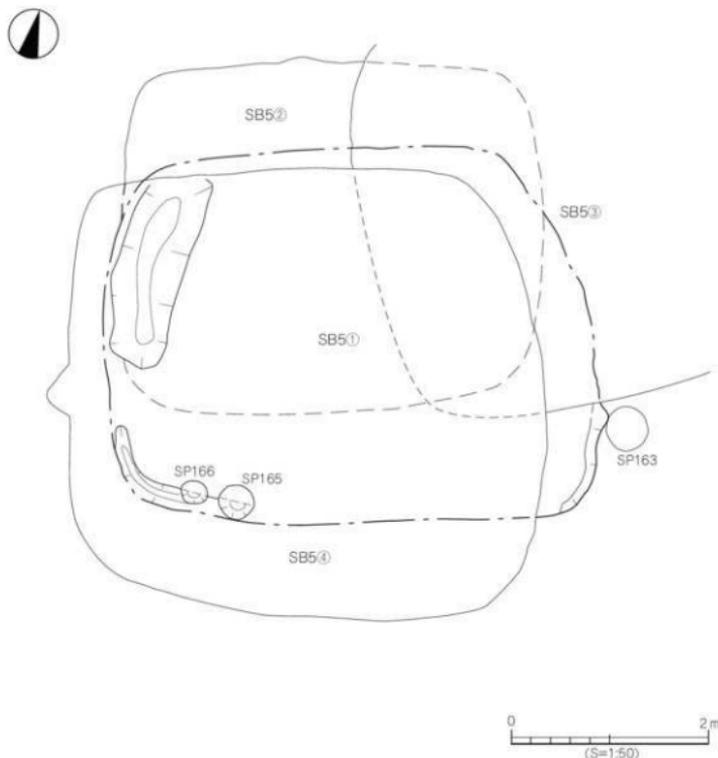
時期：出土した須恵器の形態より、SB5①の廃棄・埋没時期は6世紀後半とする。

出土遺物 (30～54)

SB5の出土遺物はSB5一括で取り上げられており、平面図とレベルとを照らし合わせて出土遺物の分類を行った。その結果、SB5②3点、SB5③3点、SB5④3点の計9点について出土遺物の特定を行った。SB5②出土と思われる遺物は、30～32、SB5③出土と思われる遺物は33～36、SB5④出土と思われる遺物は37～39である。それ以外の遺物は、SB5一括として報告を行う。



第49図 SB5①～④測量図



第50図 SB5①測量図

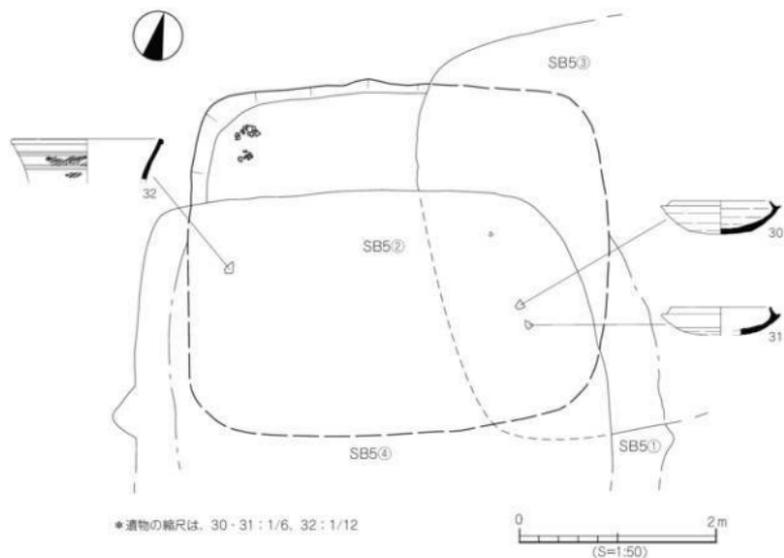
SB5② (第49・51・52図、写真図版22・23)

SB5②は調査区中央西のC3～D4区に位置し、SB5③、SB5④、SP161、SP162に切られ、SB5①を切る。平面形態は方形で、規模は長さ4.35m、幅3.65m、壁高18cmを測る。建物埋土は不明(未注記)である。出土遺物は須恵器がある。

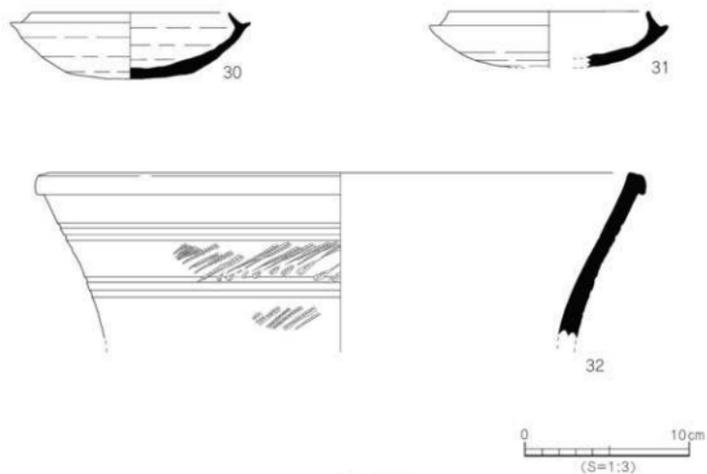
出土遺物 (30～32)

30・31は坏身。30のたちあがりには内傾し、端部は尖り気味に細い。受部は水平に伸びる。31は、内傾するたちあがりと、水平に伸びる受部を持つ。32は甕で、口縁部は肥厚され下方に拡張される。外面に2本一組の凹線2条と、櫛状工具による刺突文2条を巡らす。

時期：出土した須恵器の形態より、SB5②の廃棄・埋没時期は6世紀後半～末とする。



第51図 SB5②測量図・遺物出土状況図



第52図 SB5②出土遺物実測図

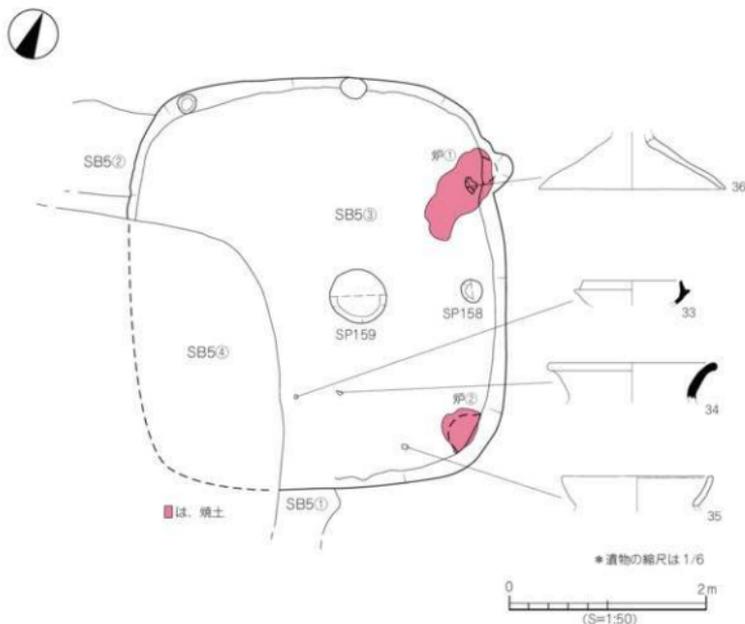
SB5③ (第49・53～55図、写真図版20・22)

SB5③は調査区中央西のC3～D4区に位置し、SB5④、SP158、SP159、SP161、SP162に切られ、SB5①、SB5②を切る。平面形態は方形で、規模は一辺4.25m、壁高11cmを測る。建物埋土は不明(未注記)である。内部施設は、炉を2箇所検出した。炉①は建物東壁の北側に位置し、東に張り出す。平面形態は不整形で、規模は長さ1.07m、幅0.68m、深さ5cmを測る。埋土は7層に分けられ、①層:淡灰色灰層、②層:淡黄灰色細砂層、③層:暗灰色灰層、④層:淡黄赤色粘性土、⑤層:暗褐色粘性土、⑥層:カーボンブロック、⑦層:淡灰赤色ブロックである。炉②は、建物南東コーナーに位置する。平面形態は楕円形状で、規模は長さ0.48m、幅0.36mを測る。埋土は4層に分けられ、①層:淡黄赤色層(焼土)、②層:淡黄灰色細砂層(灰層)、③層:淡黄褐色細砂層、④層:淡黄褐色細砂ブロックである。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

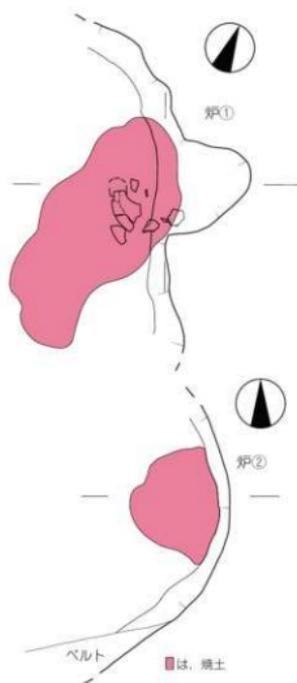
出土遺物 (33～36)

33は坏身。内傾するたちあがりとし、短く水平に伸びる受部を持つ。34は壺で、口縁端部は肥厚され丸い。35は土師器の甕形土器の口縁部で、口縁端部は内傾する。36は、土師器の鉢形土器または高坏形土器の脚部片である。

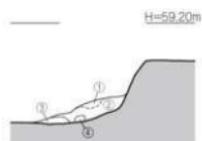
時期:出土した須恵器の形態より、SB5③の廃棄・埋没時期は6世紀末とする。



第53図 SB5③測量図・遺物出土状況図



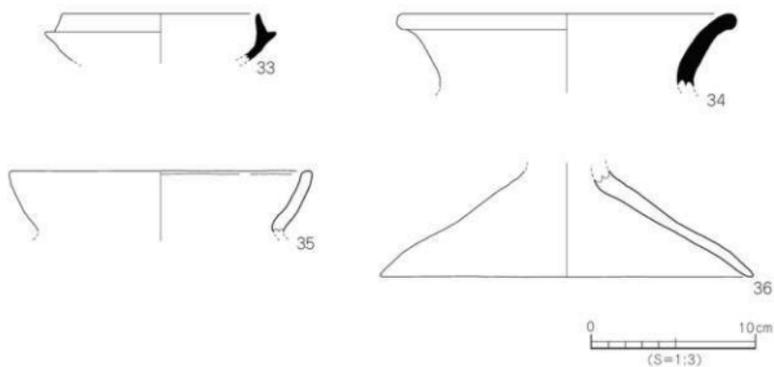
- ①層：淡灰色灰層
- ②層：淡黄灰色細砂層
- ③層：暗灰色灰層
- ④層：淡黄赤色粘性土
- ⑤層：暗褐色粘性土
- ⑥層：カーボンブロック
- ⑦層：淡灰色色ブロック



- ①層：淡黄赤色層（粘土）
- ②層：淡黄灰色細砂層（灰層）
- ③層：淡黄褐色細砂層
- ④層：淡黄褐色細砂ブロック



第54図 SB5③炉①・炉②測量図



第55図 SB5③出土遺物実測図

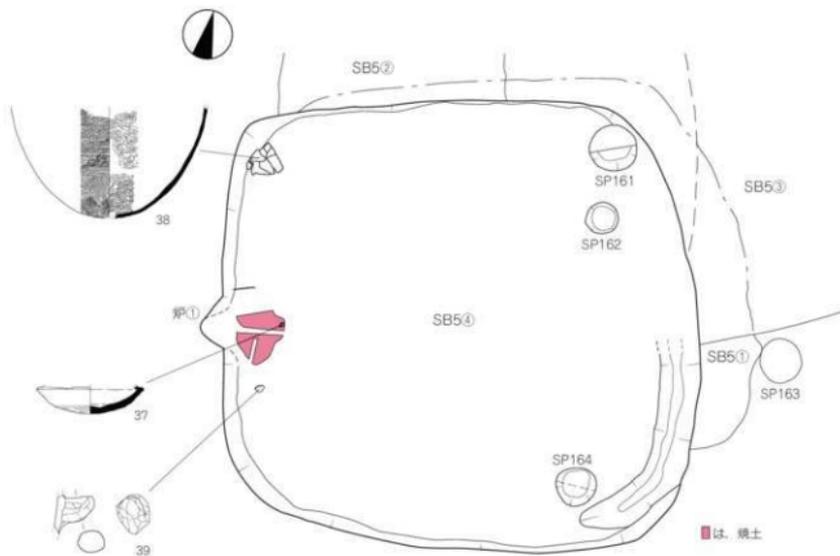
SB5④ (第49・56～58図、写真図版22・23)

SB5④は調査区中央西のC3～D4区に位置し、SB5①、SB5②、SB5③を切り、SP161、SP162、SP164～166に切られる。平面形態は方形で、規模は長さ5.1m、幅4.6m、壁高15cmを測る。建物埋土は不明(未注記)である。内部施設には炉がある。炉は建物西壁中央に位置し、西側に張り出す。平面形態は円形状で、規模は長さ0.94m、幅0.88mを測る。炉埋土は、9層に分かれ、①層：淡黄灰色灰層、②層：淡灰褐色混灰層、③層：淡黄褐色灰層、④層：淡赤色粘性土、⑤層：暗褐色粘性土(カーボン含む)、⑥層：暗褐色粘性土(カーボンなし)、⑦層：濃赤色粘性土、⑧層：淡黄赤色粘性土、⑨層：暗黄灰色灰層である。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

出土遺物 (37～39)

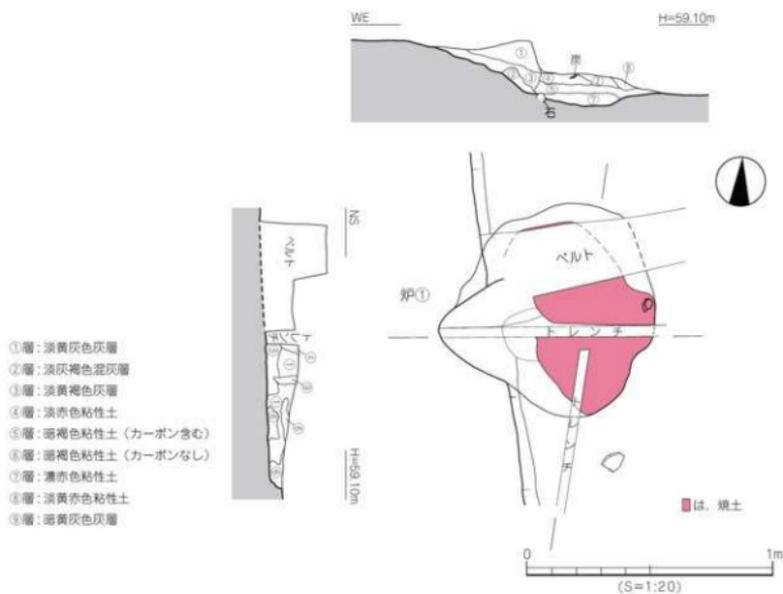
37は坏身。短く水平に伸びる受部。土師質で焼け歪みがある。38は甕の胴底部片。39は土師器の甌形土器の把手部。

時期：出土した須恵器の形態とSB5③に後出することから、SB5④の廃棄・埋没時期は6世紀末～7世紀初頭とする。

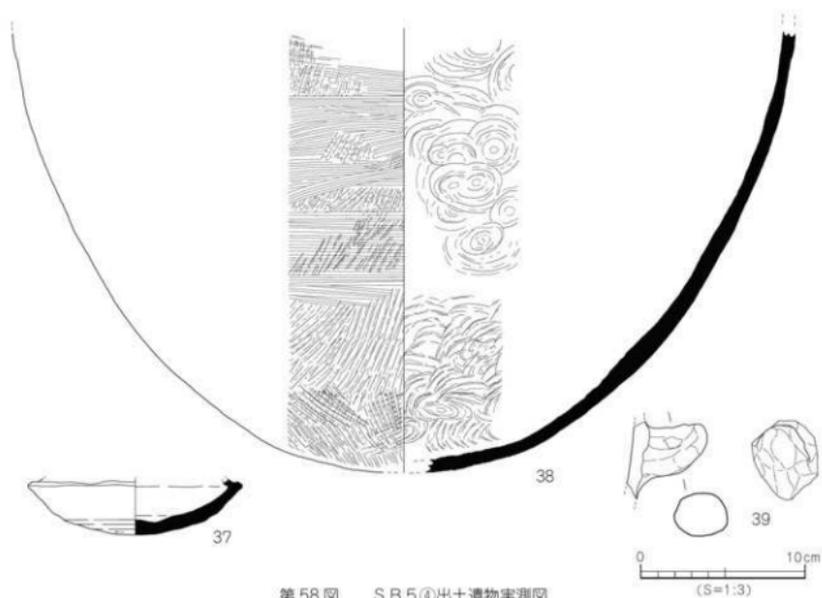


*遺物の縮尺は、37・39：1/6、38：1/12

第56図 SB5④測量図・遺物出土状況図



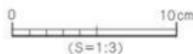
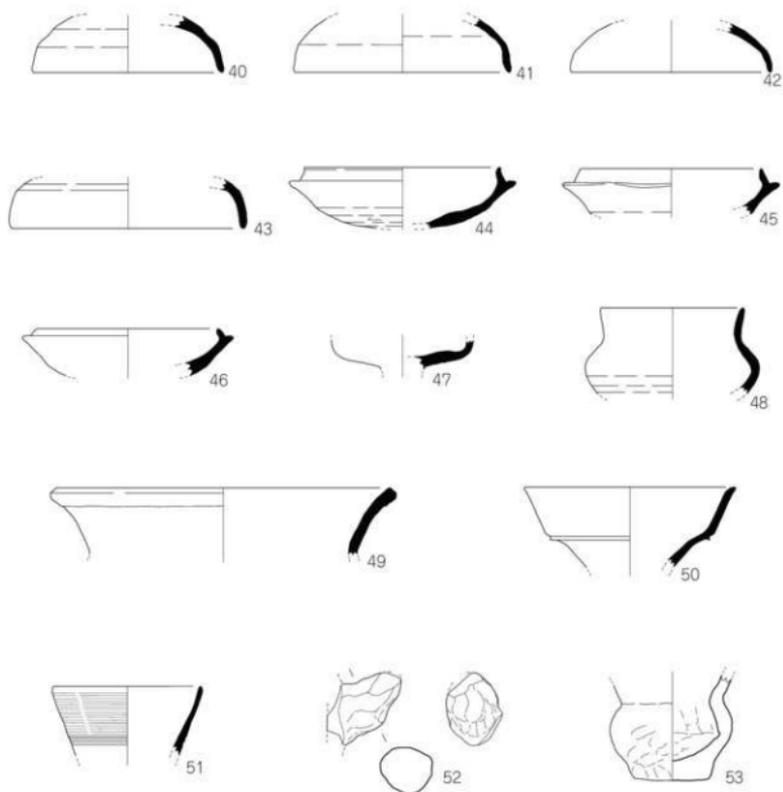
第 57 図 SB5④炉①測量図



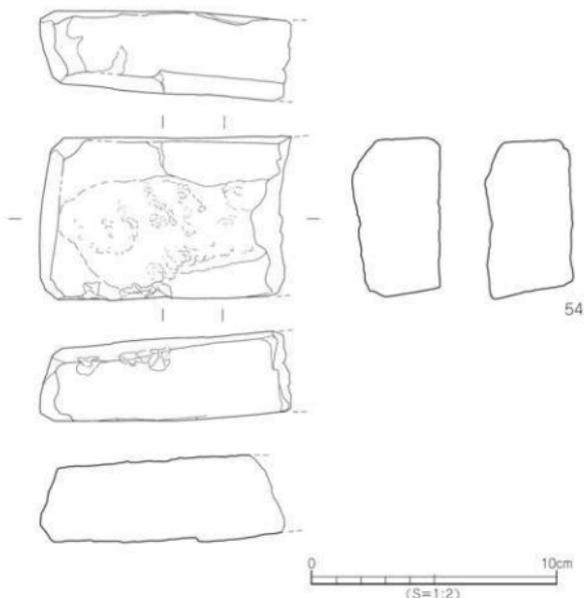
第 58 図 SB5④出土遺物実測図

SB5一括出土遺物 (40～54) (第59・60図、写真図版23)

40～43は坏蓋。口縁部片で、口縁端部は丸味を持つ。44～46は坏身で、短く水平に伸びる受部を持つ。45は焼け歪みがある。47は高坏の坏部片。48は短頸壺で、短く直立気味の口縁部をもつ。49は広口壺で、口縁部を長方形に肥厚させる。50は甗で、口縁部は段を持つ。51は提瓶の口縁部片で、外面に2条の沈線を施す。52・53は土師器。52は甗形土師器の把手部。53は小型壺で、平底の底部をもつ。54は砥石である。3面に砥面をもち、使用痕が顕著に残る。



第59図 SB5一括出土遺物実測図①



第60図 SB5一括出土遺物実測図②

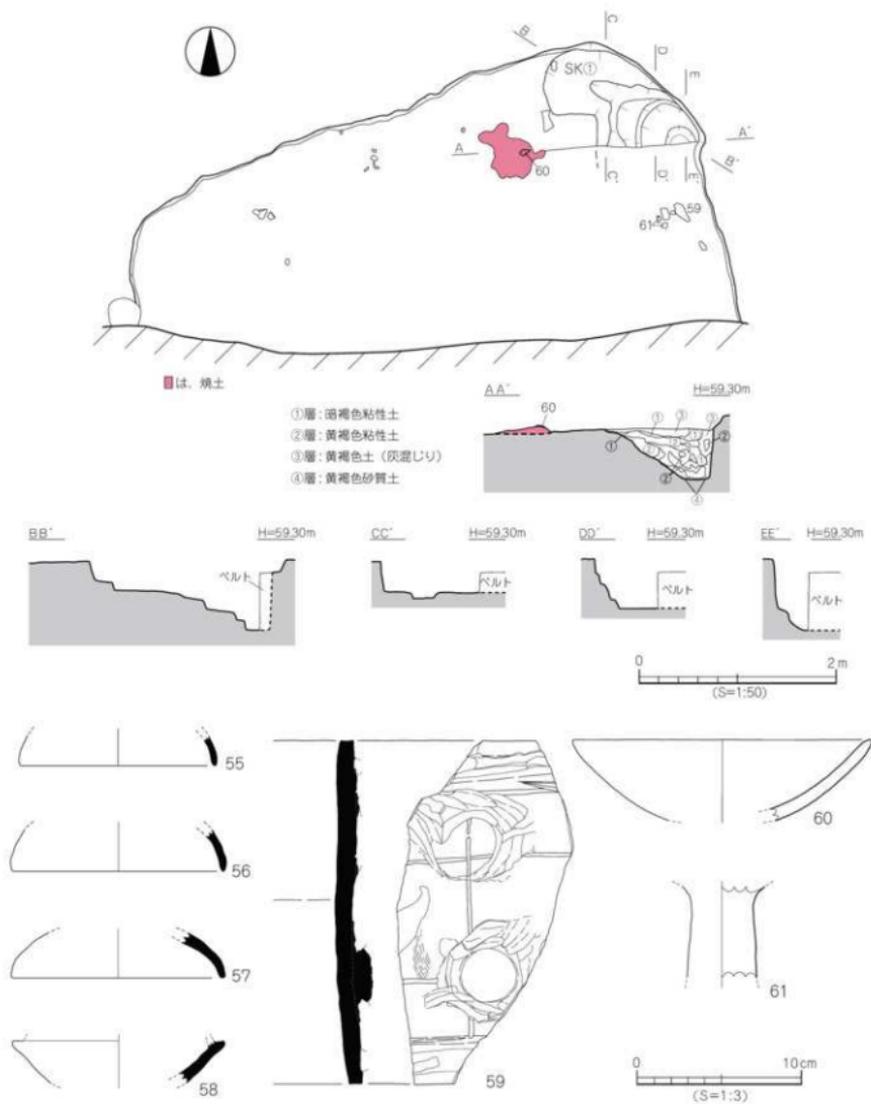
SB6 (第61図、写真図版24)

SB6は調査区南部のC5～D6区に位置し、SP180に切れ、南側は調査区外に続く。平面形態は二箇所のコーナー部を検出したことにより方形と考えられ、規模は東西長5.8m、南北検出長3.0m、深さ18cmを測る。建物埋土は不明(注記なし)である。内部施設は貯蔵穴(SK①)を検出した。SK①は、建物北東隅に位置し、平面形態は楕円形状である。規模は長軸3.5m、短軸1.1m、深さ70cmを測る。埋土は4層に分層でき、①層:暗褐色粘性土、②層:黄褐色粘性土、③層:黄褐色土(灰混じり)、④層:黄褐色砂質土である。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

出土遺物(55～60)

55～57は坏蓋。口縁部の小片で、口径12～13cmを測る。58は坏身で、受部は短く水平に伸びる。59は須恵器の器種不明土器である。板状で、外面両端部に凸帯を貼り付け、沈線を横方向に2条と縦方向に1条施し、交点に円状の凸帯を貼り付ける。焼け重みがある。60・61は土師器の高坏形土器。60は坏部片、61は柱部で、61は中実となる。

時期:出土した須恵器の形態より、SB6の廃棄・埋没時期は6世紀後半～末とする。



第61図 SB6測量図・出土遺物実測図

2) 土坑 (SK)

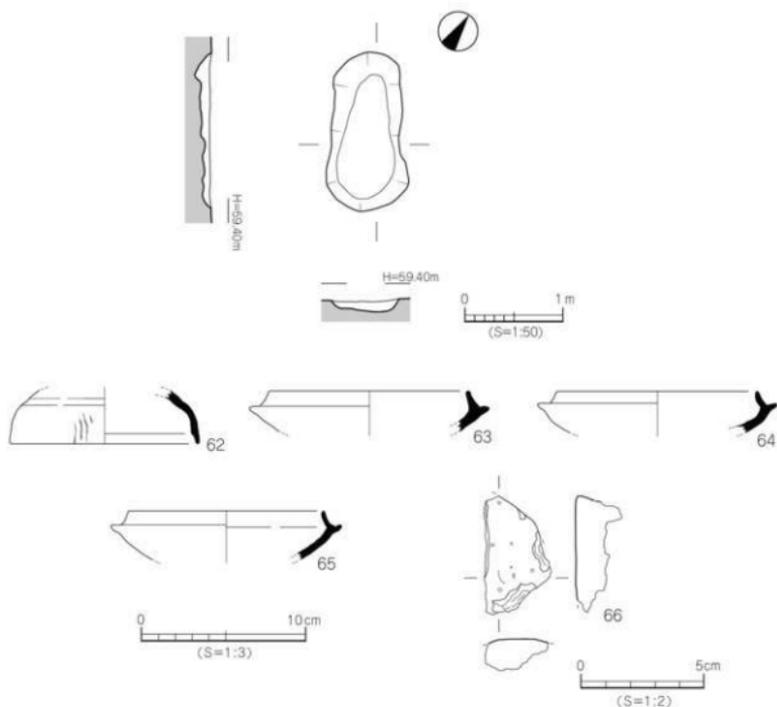
SK 1 (第 62 図、写真図版 22)

SK 1 は、調査区中央北部の B 2・3 区に位置する。平面形態は楕円形状で、規模は長径 1.6 m、短径 0.7 m、深さ 9cm を測る。断面形態は皿状で、埋土は不明である。出土遺物は、須恵器と石製品がある。

出土遺物 (62～66)

62 は坯蓋片で、口縁部外面に縦方向の 4 本の沈線を施す。63～65 は坏身。たちあがり径 12cm を測り、器高は低い。66 は砥石で、2 面の砥面を持つ。

時期：出土遺物の特徴から、SK 1 の埋没時期は 6 世紀後半～末とする。



第 62 図 SK 1 測量図・出土遺物実測図

S K 2 (第63図、写真図版22・23)

S K 2は調査区南部のB 5区に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径2.0m、短径1.4m、深さ9cmを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は不明である。出土遺物は、土師器と須恵器がある。

出土遺物 (67～75)

67～69は坏身。67・68のたちあがりは内傾し、端部は尖り気味である。69は受部の小片。70は高坏の脚部片で「ハ」の字状に開く。71は脚付壺の脚部片で、脚端部は内傾する。72は壺の底部片で、73は甕の胴部片である。74は提瓶の胴部片で、内面に円盤充墳痕をもつ。75は土師器の高坏形土師器の柱部で中実となる。

時期：出土遺物の特徴から、S K 2の埋没時期は6世紀末とする。

S K 3 (第64図、写真図版22)

S K 3は調査区西部のD 2区に位置する。平面形態は楕円形状で、規模は長径1.3m、短径0.7m、深さ36cmを測る。断面形態は逆台形状で、埋土は暗褐色粘性土を基調とし、明黄褐色砂質土がブロック状に少量混入する。出土遺物は、須恵器がある。

出土遺物 (76)

76は坏身。たちあがり径11.2cmを測り、たちあがり端部は尖り気味に丸い。

時期：出土遺物の特徴より、S K 3の埋没時期は6世紀末～7世紀初頭とする。

S K 4 (第65・66図)

S K 4は調査区東部のA 2・3区に位置し、東側は調査区外に続く。平面形態は不整形で、規模は2.6m×2.2m、深さ23cmを測る。断面形態は、レンズ状である。埋土は4層に分層でき、①層：暗灰褐色粘性土、②層：黄褐色粘性土、③層：黄褐色土（褐色土混じり）、④層：黄褐色粘性土（褐色土混じり）である。出土遺物は、須恵器、土師器、弥生土器がある。

出土遺物 (77～89)

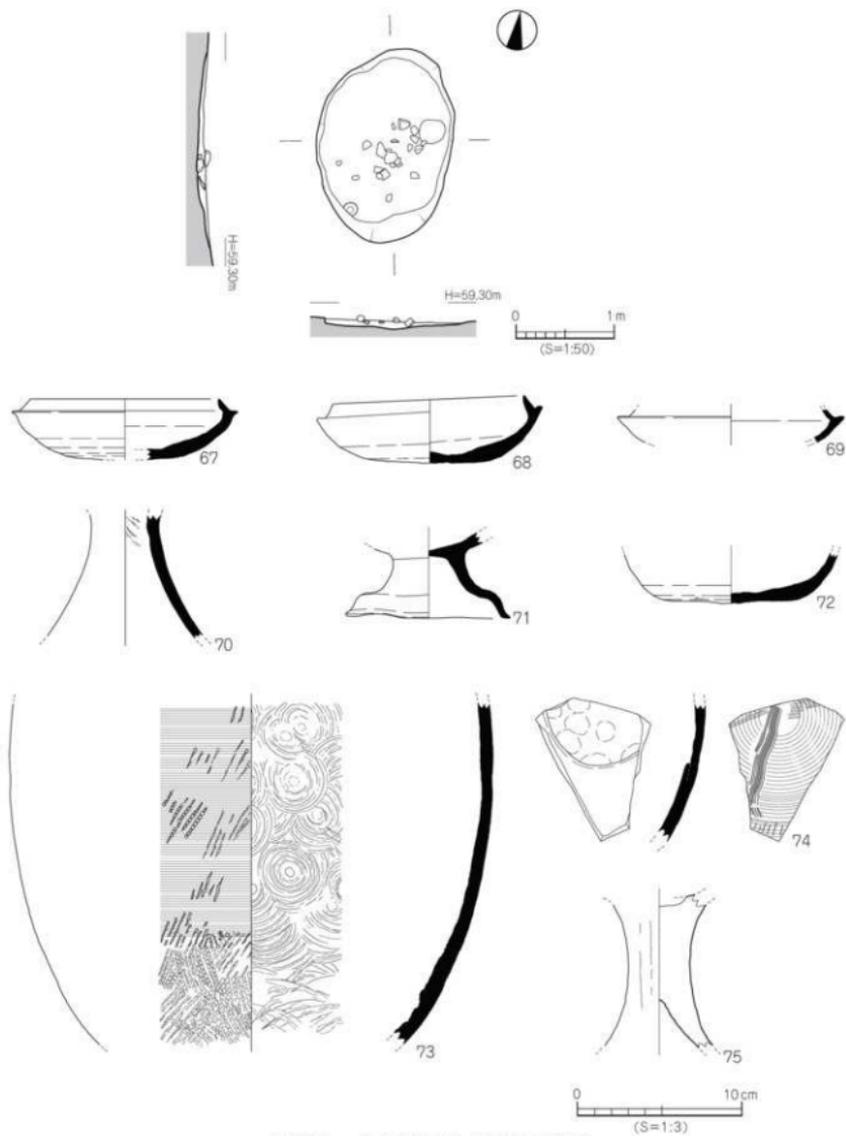
77～79は坏蓋。77は天井部と口縁部の境界に凹線状の凹みが巡る。78・79は口縁部の小片で、口端部は尖り気味に丸い。80～84は坏身。80・81は内傾するたちあがりを持ち、82は焼け歪み有り。83・84は短く水平に伸びる受部を持つ。85は壺で、口縁部は長方形に肥厚され、外面に沈線が1条巡る。86は甕の肩部片で、外面に平行叩きを施す。87・88は土師器。87は甕形土師器の口縁部で、口縁端部は丸味をもつ。88は高坏形土師器の坏部片、89は弥生土師器の甕形土師器の底部片で、89は上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、S K 4の埋没時期は6世紀後半とする。

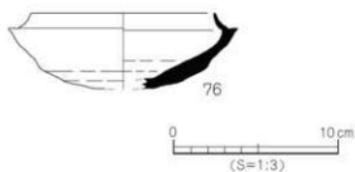
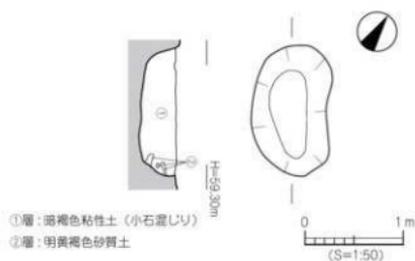
S K 5 (第67図、写真図版22・25)

S K 5は調査区中央西部のC・D 3区に位置し、S B 5に切られる。平面形態は楕円形状で、規模は長径2.5m、短径1.6m、深さ14cmを測る。断面形態、埋土とも不明である。出土遺物は須恵器があるが、図化しうるものはない。

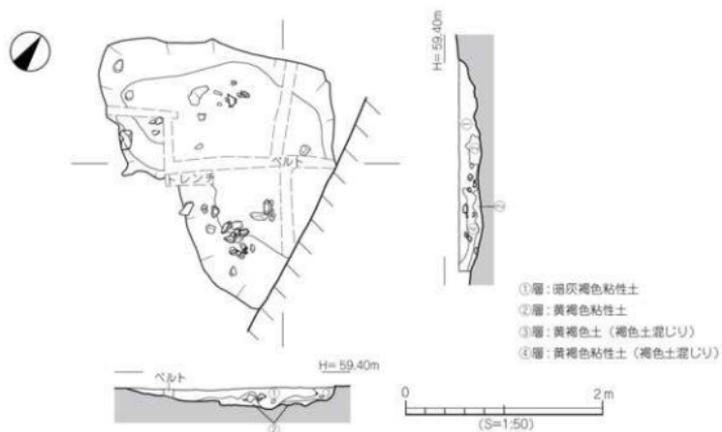
時期：出土遺物とS B 5に先行することから、S K 5の埋没時期は6世紀後半とする。



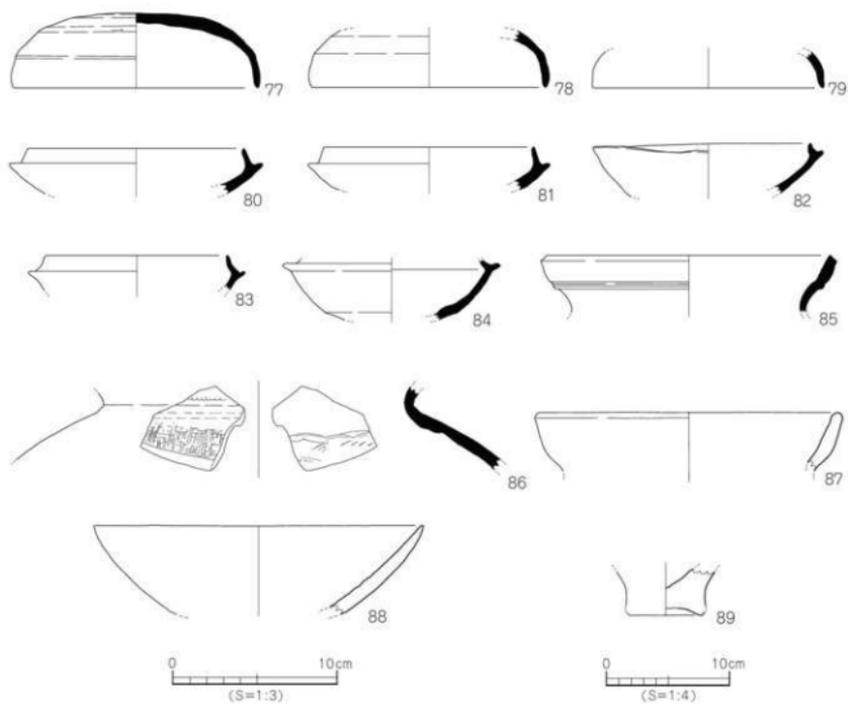
第63図 SK2測量図・出土遺物実測図



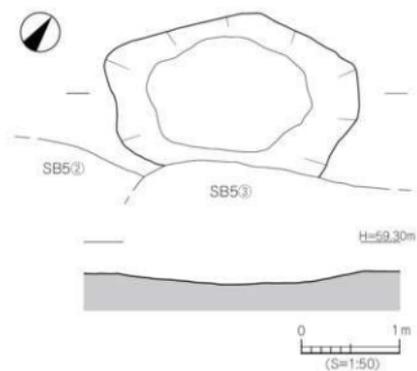
第64図 SK3測量図・出土遺物実測図



第65図 SK4測量図



第 66 図 SK 4 出土遺物実測図



第 67 図 SK 5 測量図

3) 溝 (SD)

SD 1

(第68・69図、写真図版22)

SD 1は調査区中央のA3～C4区に位置し、SK4、SP93、SP150に切られる。規模は検出長12.1m、幅0.4～0.7m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は不明である。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

出土遺物 (90～100)

90～92は坏蓋。90は口縁端部が内傾する面を持つ。92は天井部が丸味を持つ。93～96は坏身。93・94・96の受部は短く水平に伸び、95は外上方に短く伸びる。97は高坏で、柱部外面に2条の凹線が巡る。98・99は壺で、98の口縁部は方形状に肥厚する。99は肩部に波状文とカキメ調整を施す。100は、弥生土器の甕形土器の口縁部片である。

時期：出土遺物より、SD1の埋没時期は6世紀末～7世紀初頭とする。

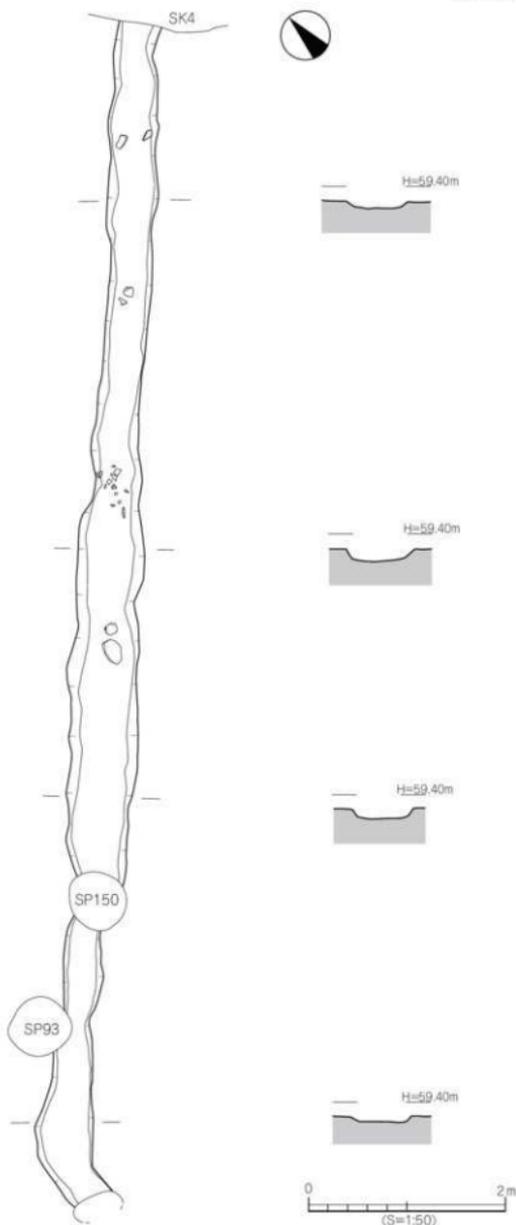
SD 2

(第70～72図、写真図版22・24・25)

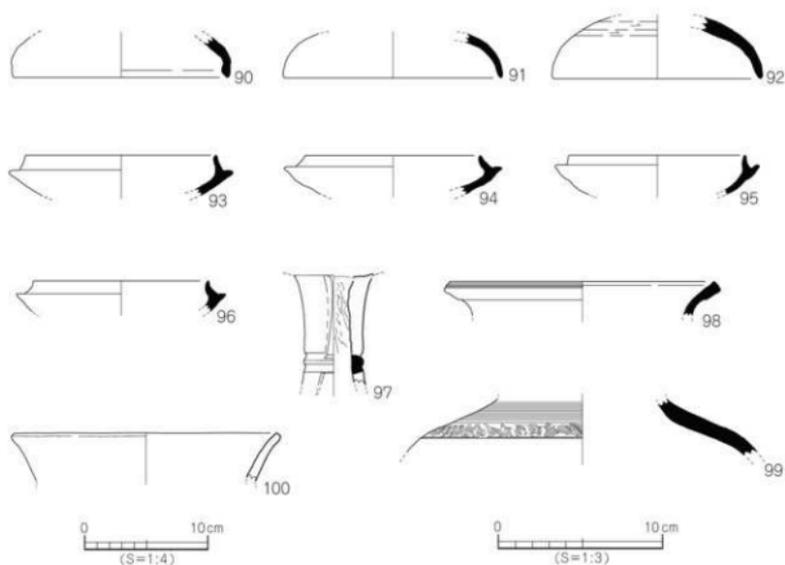
SD 2は調査区南西部のD4～5区に位置し、SD3に切られる。規模は検出長10.7m、幅0.35～0.6m、深さ5～8cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は不明である。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

出土遺物 (101～118)

101は坏蓋で、口縁端部は尖り気味に丸い。102～105は坏身。102の受部は水平に伸び尖り気味である。103の受部は外上方に伸びる。



第68図 SD1測量図



第 69 図 S D 1 出土遺物実測図

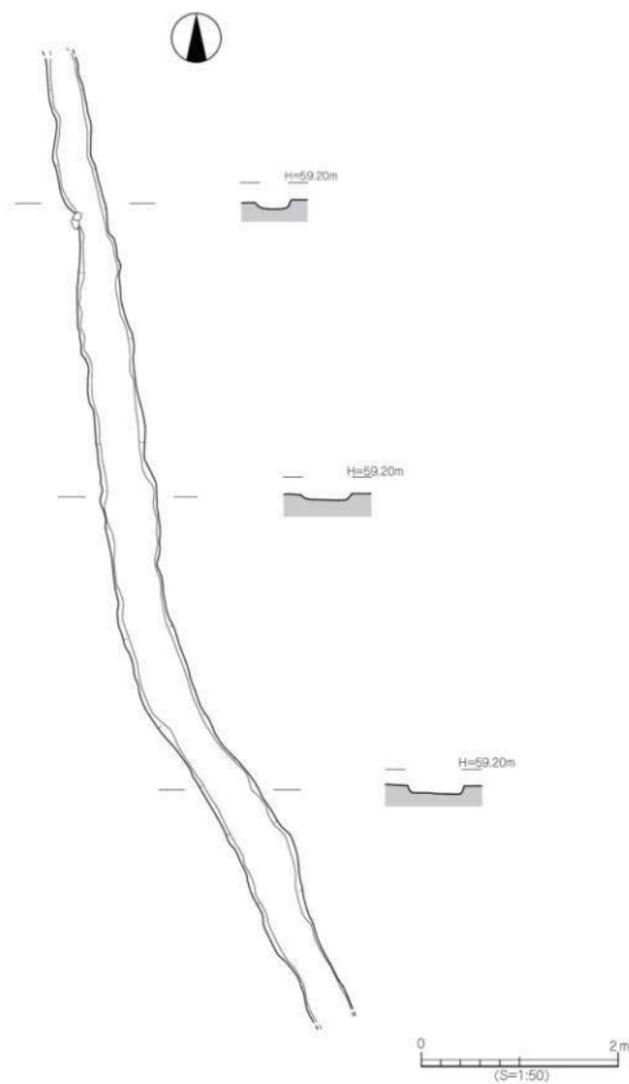
104の受部は水平に伸びる。105のたちあがりは短く内傾し、尖り気味である。106～110は壺で、106は外反する口縁部片、107は直立する口縁部をもち、肩部に火ぶくれが見られる。108は直立する口縁部に火ぶくれが見られる。109は平底の底部。110は丸底の底部片である。111は甕の頸肩部片で、外面にカキ目調整を施す。112は甕で、頸部と胴部に2条の沈線、胴部沈線間に刺突文を施す。113～117は土師器。113～116は高坏形土器。113は坏部片、114～116は柱部片である。117は甕形土器の把手部で、断面形態は円形状をなす。118は弥生土器の壺形土器で、口縁部は外反する。

時期：出土遺物より、S D 2の埋没時期は6世紀末～7世紀初頭とする。

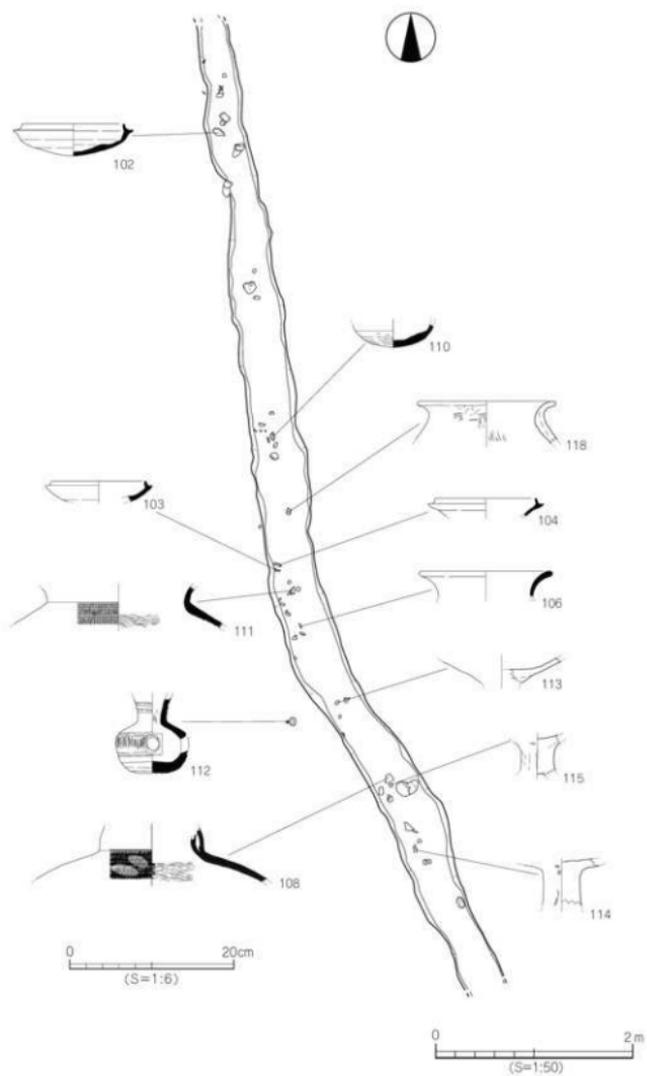
S D 3（第73図、写真図版22）

S D 3は調査区南部のC・D 5区に位置し、S D 2を切る。規模は、検出長5.6m、幅0.4～0.9m、深さ8～10cmを測る。断面形態は、レンズ状である。埋土は、不明である。出土遺物は須恵器があるが、小片の為に図化しえない。

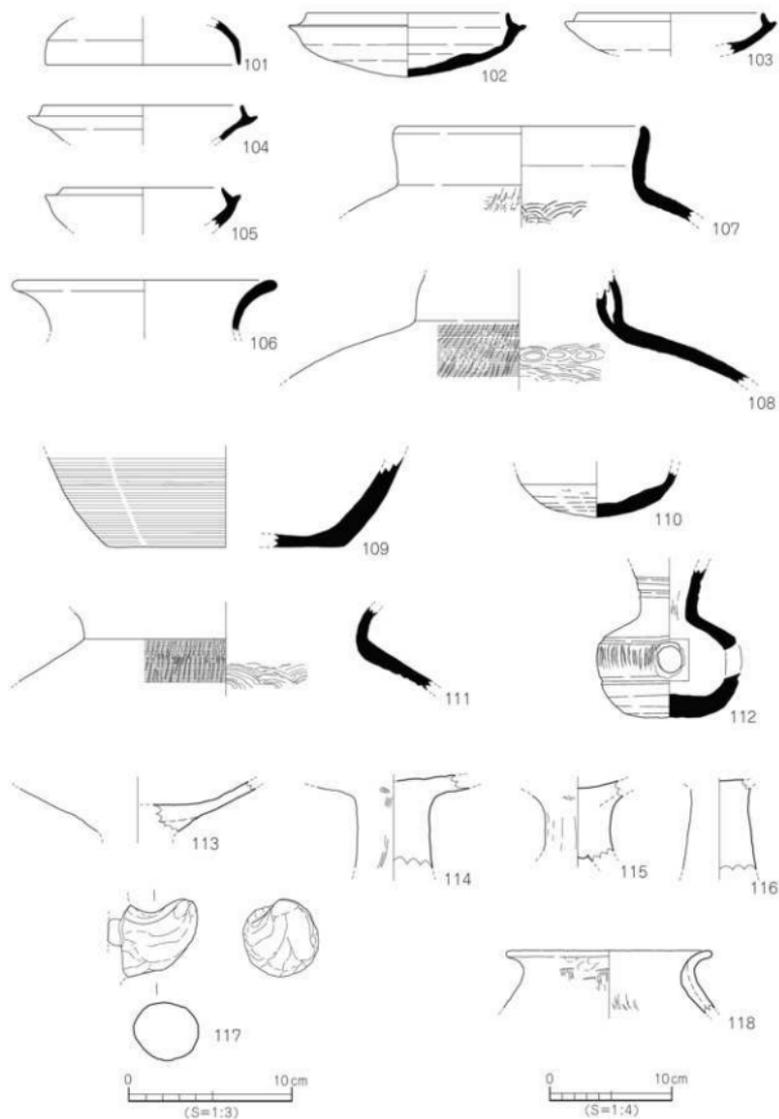
時期：出土遺物とS D 2に後出することから、S D 3の埋没時期は7世紀初頭以降とする。



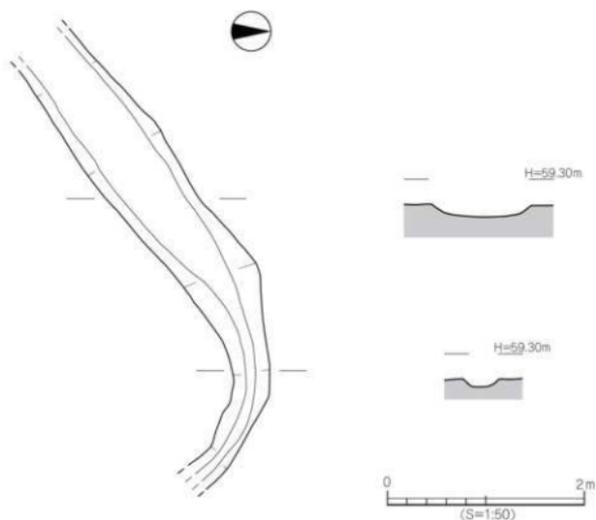
第 70 図 SD 2 測量図



第71図 SD2遺物出土状況図



第72図 SD2出土遺物実測図



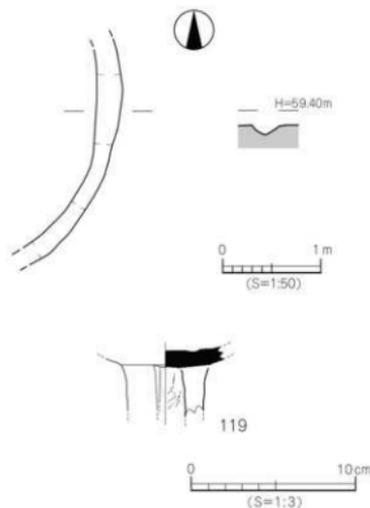
第73図 SD3測量図

SD4（第74図、写真図版22）
SD4は調査区中央部のB4区に位置する。規模は検出長2.2m、幅0.25m、深さ9cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は不明である。出土遺物は、須恵器がある。

出土遺物（119）

119は高坏の脚部片で、3方向の透かしを施す。

時期：出土遺物より、SD4の埋没時期は6世紀後半とする。



第74図 SD4測量図・出土遺物実測図

4) 石組遺構 (第75・76図、写真図版21・22・25)

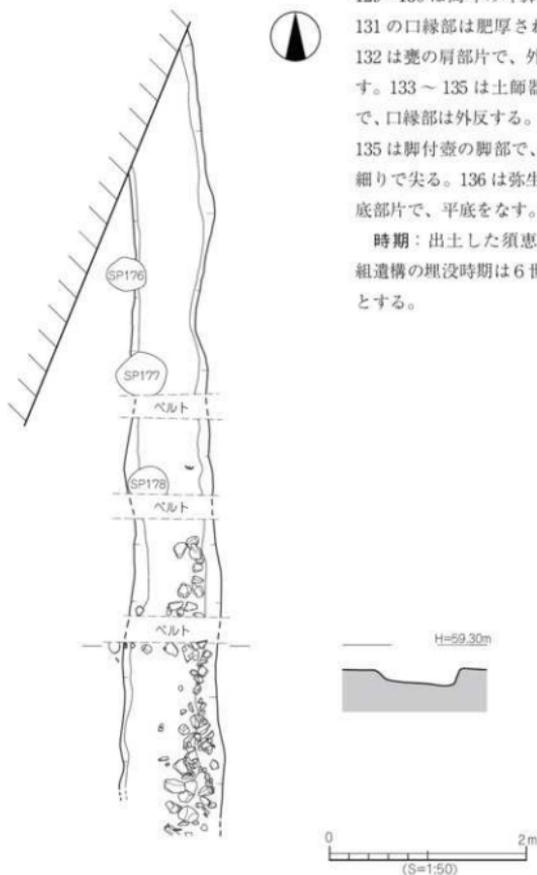
石組遺構は調査区南西部のE4・5区に位置し、3基の柱穴に切られる。北側と南側は調査区外に続く。平面形態は、溝状で溝中にレキを敷いている。規模は検出長6.7m、幅0.7～0.9m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は不明である。出土遺物は、須恵器と土師器がある。

出土遺物 (120～136)

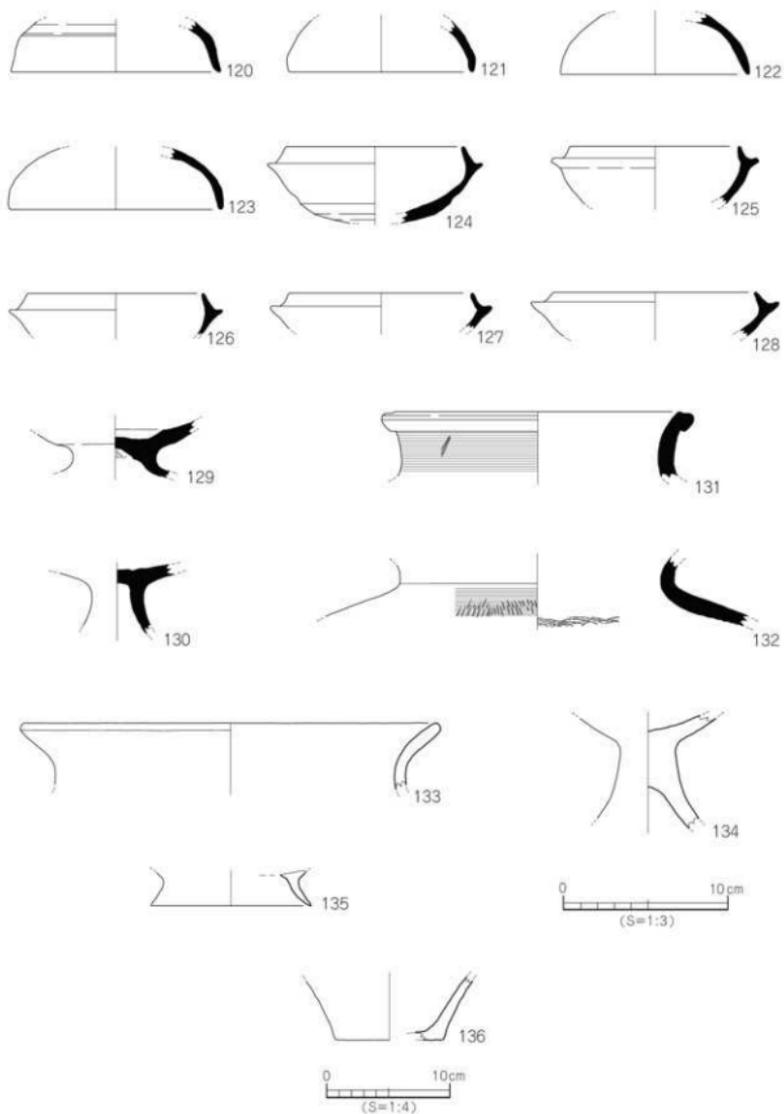
120～123は坏蓋片、口縁端部は丸い。124～128は坏身で、124はたちあがりは内傾する。125は土師質で、焼け重みがある。126・127の受部は、短く水平に伸び、128の受部は外上方に伸びる。

129・130は高坏の坏脚部片。131は壺で、131の口縁部は肥厚され下方に拡張する。132は甕の肩部片で、外面に平行叩きを施す。133～135は土師器。133は甕形土器で、口縁部は外反する。134は高坏形土器、135は脚付壺の脚部で、135の脚端部は先細りで尖る。136は弥生土器の甕形土器の底部片で、平底をなす。

時期：出土した須恵器の形態より、石組遺構の埋没時期は6世紀末～7世紀初頭とする。



第75図 石組遺構測量図



第76図 石組遺構出土遺物実測図

5) 性格不明遺構 (SX)

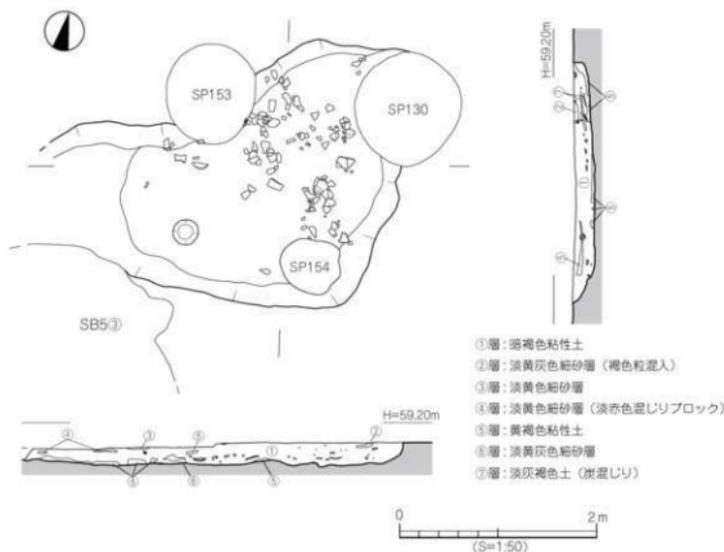
SX 1 (第77・78図、写真図版22・25)

SX 1は調査区中央北部のC2・3区に位置し、SB5③、SP130、SP153に切れ、西側は削平されている。平面形態は不整形で、規模は2.7m×2.6m、深さ17cmを測る。基底面はほぼ平坦である。埋土は7層に分層でき、①層:暗褐色粘性土、②層:淡黄灰色細砂層(褐色粒混入)、③層:淡黄色細砂層、④層:淡黄色細砂層(淡赤色混じりブロック)、⑤層:黄褐色粘性土、⑥層:淡黄灰色細砂層、⑦層:淡灰褐色土(炭混じり)である。出土遺物は、須恵器、土師器、石製品がある。

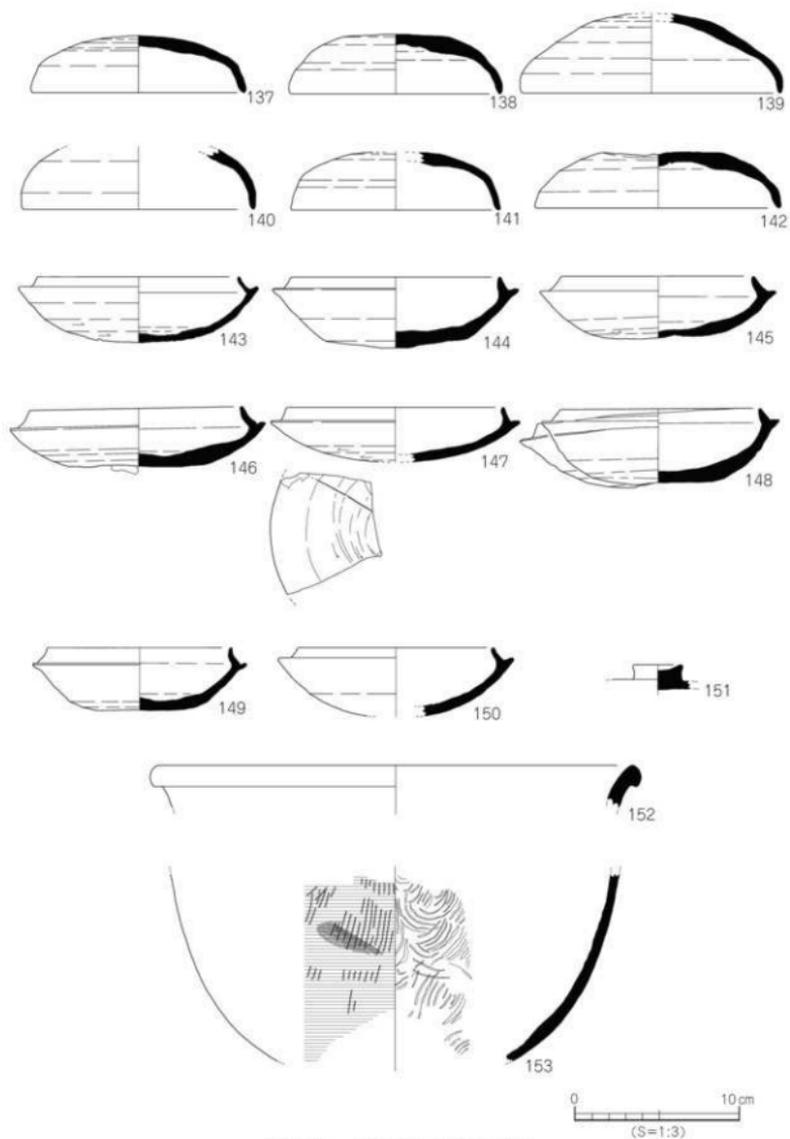
出土遺物 (137～165)

137～142は坏蓋。137・138の口縁部は尖り気味に丸く、139・140の口縁部は直立して接地する。142の天井部は、焼け歪みがみられる。143～150は坏身。143・144の受部は外上方に短く伸び、145の受部は水平に短く伸びる。146は底部に別個体が付着し、147は、底部外面にヘラ記号を施す。146・148は焼け歪みが著しい。149の底部は平底である。151は高坏の蓋で、中央部が凹む。152・153は甕で、152の口縁端部は肥厚され下方に拡張される。153は胴部片で、外面に平行叩きを施す。154～164は土師器。154～162は甕形土器で、154の口縁部は水平な面を持つ。155の口縁部は、内方に肥厚する。156は口縁端部が内傾する面をもつ。158の口縁部は尖り気味に丸く、159・160の口縁部は、先細りする。163は高坏の柱部、164は瓶の把手部である。165は砥石。

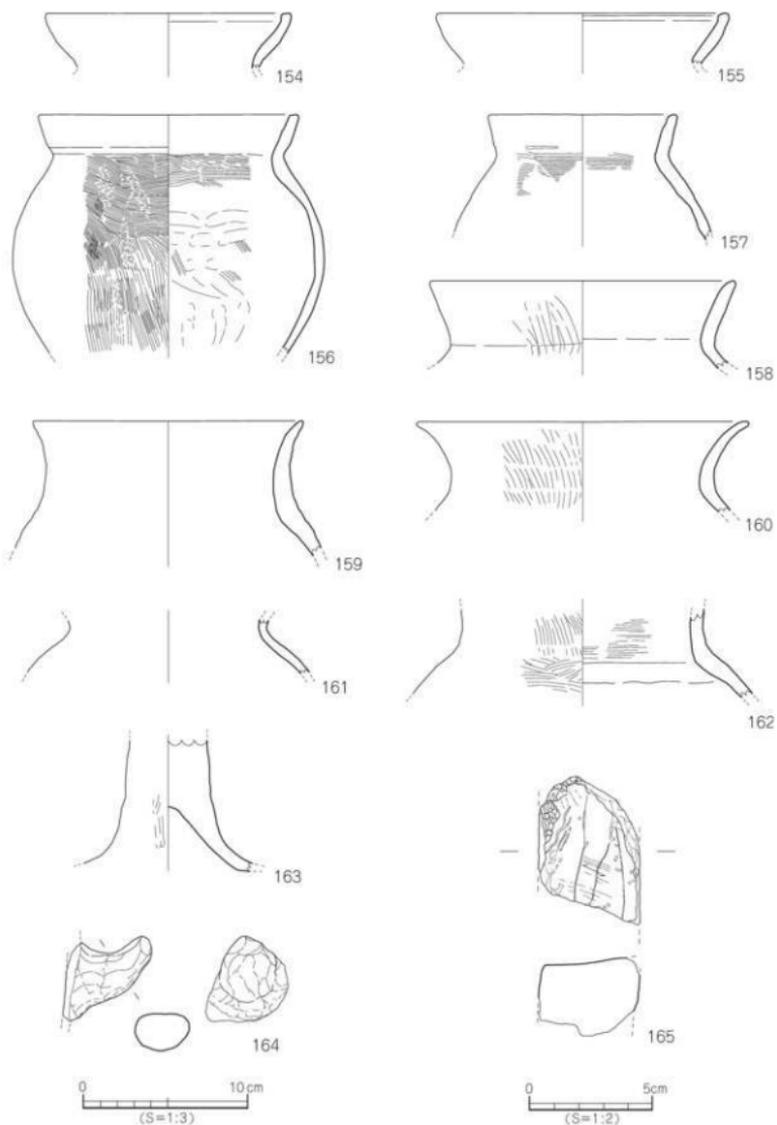
時期: 出土した土師器と須恵器の特徴より、SX 1の埋没時期は6世紀後半とする。



第77図 SX 1測量図



第78図 SX1出土遺物実測図①



第79図 SX1出土遺物実測図②

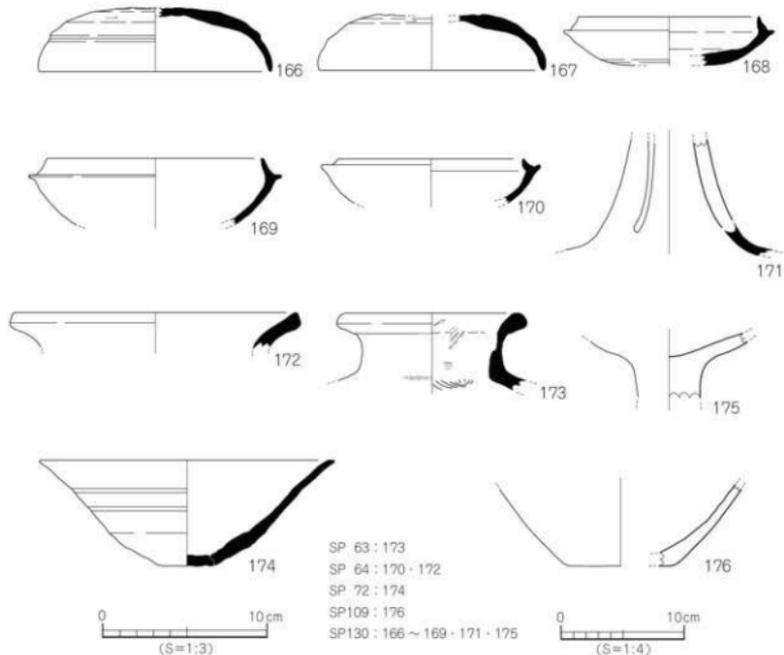
(2) その他の遺構と遺物

1) 柱穴 (SP) 出土遺物 (166~177) (第80・81図, 写真図版22・26)

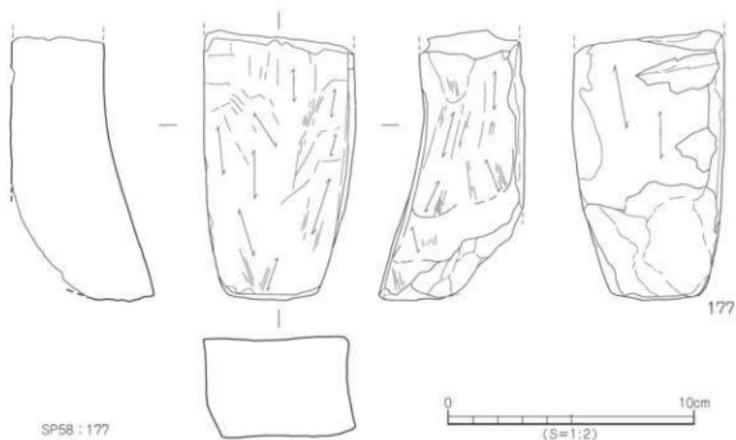
SP 130からは、166~169、171、175の6点が出土している。166・167は須恵器坏蓋。166の天井部と口縁部を分ける境界に凹線状の凹みが巡る。167は平坦な天井部をもつ。168・169は坏身、171は高坏、175は土師器の高坏形土器である。SP 64からは、坏身 (170) と。壺 (172) が出土している。SP 63からは、壺 (173)、SP 72からは、鉢 (174) が出土している。SP 109からは、弥生土器の甕形土器の底部 (176) がSP 58からは砥石 (177) が出土している。

2) グリッド出土遺物 (178~190) (第82図, 写真図版26)

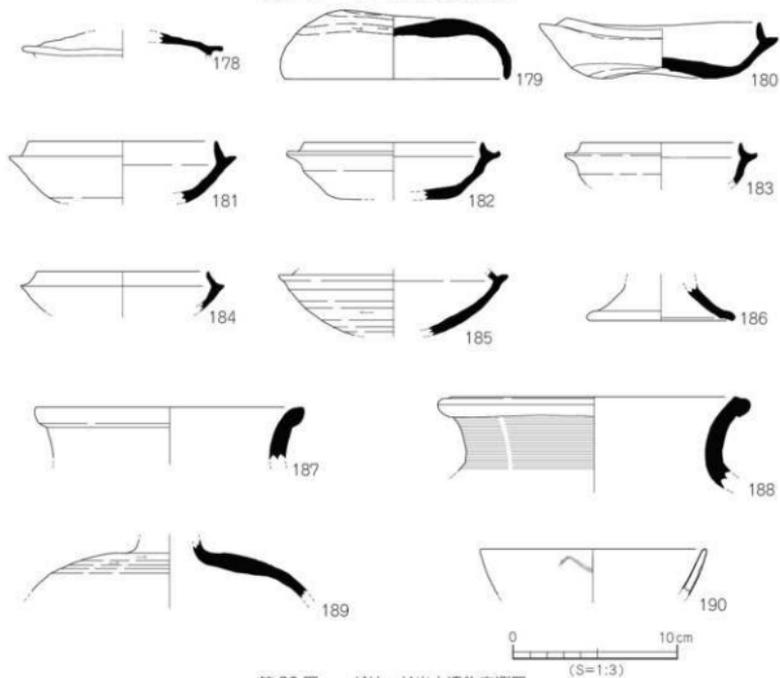
178は須恵器壺蓋、焼け歪みがみられる。179は坏蓋、天井部は焼け歪みがみられる。180~185は坏身である。180は焼け歪みが著しい。179と180は重なって出土した。181・184のたちあがりには内傾し、182・183のたちあがりには直立する。186は高坏の脚部で、脚裾部は「ハ」の字状に開く。187・188は壺で、188の口縁部は丸く肥厚する。189は蓋で、中央が中空状である。190は陶磁器の碗で、胎土は白色で、緑軸が掛けられている外面に蓮弁文が描かれている。



第80図 SP出土遺物実測図①



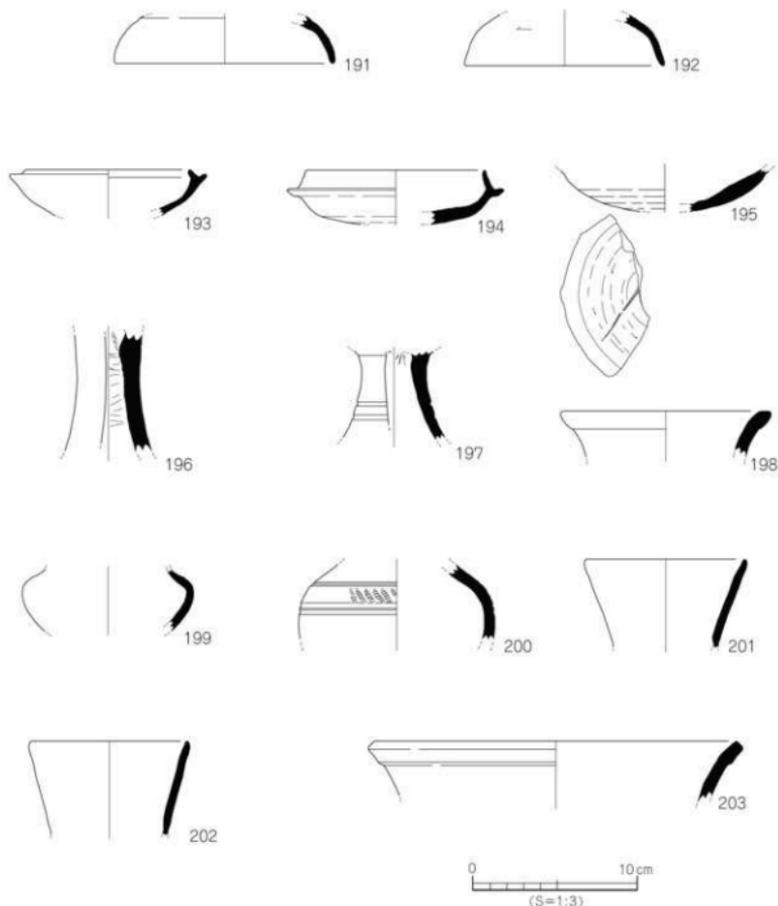
第81図 SP出土遺物実測図②



第82図 グリッド出土遺物実測図

3) 包含層出土遺物 (191~203) (第83図、写真図版26)

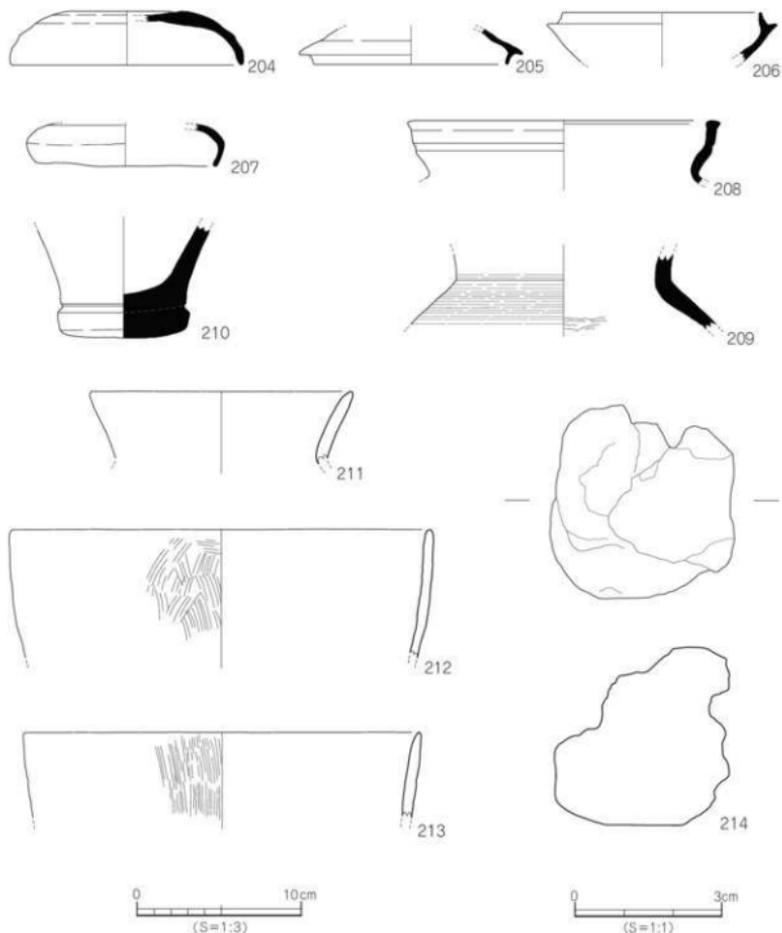
191・192は須恵器坏蓋。193~195は坏身である。195の底部外面には、ヘラ記号を施す。196・197は須恵器高坏の脚部片で、長方形の透かしを施す。198は広口壺の口縁部片、199は短頸壺の胴部片である。200は甕の胴部で、沈線と刺突文を施す。201・202は平瓶の口縁部片で、口縁端部は先細りする。203は甕の口縁部片で、口縁端部は長方形に肥厚する。



第83図 包含層出土遺物実測図

4) 地点不明出土遺物 (203 ~ 213) (第84図、写真図版26)

204・205は須恵器坏蓋、204は天井部が窪む。205は内傾するかえり部。206は坏身で、たちあがり内傾する。207は短頸壺の蓋で、焼け歪みがみられる。208は壺の口縁部片で、焼け歪みがみられる。209は甕で、外面にカキ目調整を施す。210は播鉢である。211～213は土師器。211は壺形土器、212・213は甌形土器の口縁部である。214は鉄滓で、重量21.66gを測る。



第84図 地点不明出土遺物実測図

第4節 小 結

本調査では、古墳時代後期の竪穴建物9棟、土坑5基、溝4条、性格不明遺構1基を検出した。遺物では弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石製品が出土した。

竪穴建物には重複するものや、カマドを持つものがある。竪穴建物9棟は一辺が4～5mの方形を呈し、SB4以外の8棟は磁北方向に建物軸線を取る。また、SB2・3・4は重複がみられ、SB5は4棟が重複しており、長期にわたり集落が展開していたことがわかる。

カマドと炉を持つ建物はSB2、SB5③、SB5④、SB6の4棟がある。SB2は北壁中央にカマドを持ち、北壁から建物外側に向けて北に1.2mの煙道が確認できた。松山平野内で建物カマドの明確な煙道が検出された事例はきわめて少なく、これほど長い煙道の検出は初例である。このほか、SX1からは土師器と須恵器が多量に出土し、土器を廃棄した様相を示している。

遺物では、出土した須恵器の中に焼け歪みや焼成不良品が数多くみられた。また、建物内からは焼成時に出来る不純物の窯壁片が出土している。

調査地の北から北東部の丘陵麓には松山東南部古窯址群と総称される駄馬、駄馬姥ヶ懐、茨谷（ばらだに）、悪社谷、枝朶下池（しだのしたいけ）などの須恵器生産窯があり、6世紀後半～8世紀代の須恵器窯業の一大生産地であることがわかっている。出土遺物から、下苜屋遺跡は窯業生産地から消費地への中継地点と考えられる。近年の調査では隣接する下苜屋遺跡3次調査において、須恵器を多量に出土する集積あるいは廃棄土坑が検出されていることから、調査地や周辺地域は生産地から消費地の中継点という集落の性格が明らかになってきた。

【文献】

「下苜屋遺跡2次調査・3次調査」 松山市文化財調査報告書75

「久米窪田古屋敷遺跡」 松山市文化財調査報告書148

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
 (2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 (): 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) 口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏→坏部、
 肩→肩部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウソモ、赤→赤色土粒、黒→黒色土粒、密・
 精→精製土。

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 33 竪穴建物一覧

竪穴 (S B)	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×壁高 (m)	埋 土	内部施設	出土遺物	時 期	備考
1	C 1	方形	(405) × (310) × 0.20	不明		土師器 須恵器	6世紀末	
2	B・C 2	方形	4.20 × 4.10 × 0.18		カマド 煙道	土師器・須恵器・ 石製品・ 焼土・炭	6世紀後半~末	SB340①、S P26に収めらる。
3	A・B 2	方形	4.90 × (4.60) × 0.14	不明	周壁溝	須恵器	6世紀後半	S B 2-1、S P 28 127-128-131-135- 136に収めらる。
4	A1~B2	方形	4.50 × (4.50) × 0.04	不明	周壁溝	須恵器	6世紀末	S B 340①、S P 27-28-29-32-35 -39-41に収めらる。
5①	C3~D4	方形	4.95 × 3.80 × 0.30	不明	周壁溝	土師器 須恵器	6世紀後半	S B 5②-③-④、 S P 101-102-103- 104に収めらる。
5②	C3~D4	方形	4.35 × 3.65 × 0.18	不明		須恵器	6世紀後半~末	S B 5③40①、S B 5③-④、S P 101に収めらる。
5③	C3~D4	方形	4.25 × 4.25 × 0.11	不明	炉 (2基)	土師器 須恵器	6世紀末	S B 5①-240①、 S B 5③、S P 100- 101に収めらる。
5④	C3~D4	方形	5.10 × 4.60 × 0.15	不明	炉	土師器 須恵器	6世紀末~ 7世紀初頭	S B 5①-240①、 S P 99-102-104 -105に収めらる。
6	C5~D6	方形	5.80 × 3.00 × 0.18	不明	貯蔵穴	土師器 須恵器	6世紀後半~末	S P 180 に 切られる。

表 34 土坑一覧

土坑 (S K)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備考
1	B 2・3	楕円形	皿状	1.6 × 0.7 × 0.09	不明	須恵器 石製品	6世紀後半~末	
2	B 5	楕円形	レンズ状	2.0 × 1.4 × 0.09	不明	須恵器 土師器	6世紀末	
3	D 2	楕円形	逆台形状	1.3 × 0.7 × 0.36		暗褐色粘性土 (明黄褐色砂質土混)	須恵器	6世紀末~ 7世紀初頭
4	A 2・3	不整形	レンズ状	2.6 × 2.2 × 0.23		暗褐色粘性土・黄褐色粘性 土・黄褐色土 (焼土混じり)・ 黄褐色粘性土 (焼土混じり)	須恵器・土師器 須恵器・焼土土器	6世紀後半
5	C・D 3	楕円形	不明	2.5 × 1.6 × 0.14	不明	須恵器	6世紀後半	S B 5 に切ら れる。

表 35 溝一覧

溝 (S D)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A3~C4	北東~南西	皿状	121 × 0.4 ~ 0.7 × 0.14	不明	須恵器 土師器	6世紀末~ 7世紀初葉	SK4・SP93・ 150に切られる。
2	D3~5	北~南	皿状	1070 × 0.35 ~ 0.60 × 0.05 ~ 0.08	不明	須恵器 土師器	6世紀末~ 7世紀初葉	S D 3に切られる。
3	C・D5	南東~南西	レンズ状	560 × 0.40 ~ 0.90 × 0.08 ~ 0.10	不明	須恵器	7世紀初葉以降	S D 2を切る。
4	B4	北~南	レンズ状	220 × 0.25 × 0.09	不明	須恵器	6世紀後半	

表 36 石組遺構一覧

石組遺構	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E4~5	北~南	皿状	6.70 × 0.70 ~ 0.90 × 0.16	不明	須恵器 土師器	6世紀末~ 7世紀初葉	SP176・177・ 178に切られる。

表 37 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (S X)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2・3	不整形	逆台形状	270 × 260 × 0.17		土師器・須恵器・養生土師・石製品	6世紀後半	SP130・153・ 154に切られる。

表 38 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
1	坏蓋	口径 (11.6) 残高 34	厚みのある天井部。口縁端部は尖り気味に丸味を持つ。焼け跡み有。	⑤ 回転ナデ ⑥ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	長 (1~3) ○		
2	坏蓋	口径 (13.8) 残高 35	口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		
3	坏蓋	口径 (13.6) 残高 25	口縁部の小片。口縁部と天井部の境界は、あまい様を持つ。口端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	石・長 (1) ○		
4	坏蓋	口径 (13.7) 残高 21	口縁部の小片。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	長 (1) ○		
5	坏身	口径 (11.7) 残高 23	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部は水平に伸びる。	⑤ 回転ナデ ⑥ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	長 (1) ○		
6	坏身	口径 (10.8) 残高 29	たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は水平に短く伸び、尖り気味である。焼け跡み有。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		自然釉
7	坏身	残高 24	短く水平に伸びる受部。焼け跡み有。	⑤ 回転ナデ ⑥ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) ○		
8	坏身	残高 24	短く水平に伸びる受部。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1~2) ○		
9	坏身	口径 (10.0) 残高 20	たちあがりは内傾する。端部直立し、尖り気味に丸い。受部は短く水平に伸びる。焼け跡み有。	回転ナデ	回転ナデ	暗褐色・明褐色 明青灰色	石・長 (1) ○		
10	坏身	口径 (9.9) 残高 23	内傾するたちあがりの端部は尖り気味である。受部は短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		自然釉
11	壺	口径 (13.8) 残高 49	口縁部は直立気味で、僅かに外反する。口縁端部は肥厚され、下方に拡張する。	⑤ 回転ナデ ⑥ 平行タキナーナデ	⑤ 回転ナデ ⑥ 円弧タキナ	灰色 青灰色	長 (1) 密 ○		
12	壺	口径 (15.1) 残高 46	口縁部の小片。口縁端部は丸い。外面に2本の沈線を通らす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○		自然釉

表 39 SB 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
13	坏蓋	口径 (13.1) 残高 3.3	口縁部の小片。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	石・長 (1) ○		
14	坏蓋	口径 (13.8) 残高 3.4	天井部は厚みを持つ、口縁端部は丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
15	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.2	口縁部の小片。口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長 (散粒) ○	灰被り	
16	坏蓋	口径 (11.4) 残高 3.0	口縁部の小片。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	長 (1) 密 ○		
17	坏蓋	口径 (12.0) 残高 1.8	口縁部の小片。口縁部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	長 (1) ○		
18	坏身	口径 (13.4) 残高 3.6	内傾するたちあがりは短く、水平に伸びる受部。	㊦ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 髑灰色	長 (1) ○		
19	坏身	残高 1.5	短く外上方に伸びる受部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・緑灰色 にふい橙色	長 (1) ○		
20	坏	口径 (16.0) 残高 2.9	口縁部の小片。外傾する口縁端部は丸味を持つ。外面に2本の沈線が通る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		
21	塊	口径 (9.0) 残高 3.9	直立する口縁部。口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
22	瓶	口径 (26.0) 残高 15.4	直立気味にわずかに外傾する頸部～口縁部。口縁端部は丸い。	㊦ ヨコナデ マメツ	マメツ 工具痕	灰色 灰色	長 (1~4) ○		
23	瓶	残高 4.3	把手部。上部がわずかに凹み、端部は上を向く。	ナデ	ナデ	浅黄褐色 橙色	長 (1~2) ○		23
24	高坏	口径 (18.5) 残高 1.7	口縁部の小片。外反する口縁部の端部は丸い。	ヨコナデ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長 (1~5) ○		

表 40 SB 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
25	砥石		石英粗面岩	12.5	4.1	2.4	324.6g		23

表 41 SB 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
26	蓋	口径 (9.9) 器高 3.1	天井部は水平な面を持ち、口縁部はナデに より僅かに凹み、口縁部内面を持つ。	㊦ 回転ヘラケズリ ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
27	坏身	受部径 13.1 残高 3.3	受部は短く水平に伸び、端部は丸い。 たちあがり部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
28	短頸密	口径 (8.0) 残高 1.8	短く直立する口縁部。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		
29	甕	残高 7.3	外反気味にわずかに外傾する口頸部。	カキ目 回転ナデ	㊦ 回転ナデ・ナデ ㊧ 同心円タタキ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		

表 42 SB 5②出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
30	坏身	口径 (12.0) 器高 4.0	内傾するたちあがり部は尖り気味に丸い。 受部は短く水平に伸び、端部は尖り気味である。	回転ナデ マメツ	回転ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長 (1) 赤 ○		23
31	坏身	口径 (12.2) 残高 3.5	内傾するたちあがり部の端部は丸い。 受部は短く水平に伸びる。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色・灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○	自然釉	
32	甕	口径 (35.2) 残高 10.2	外傾する口頸部が縦線埋まり、外面に2本- 線の平線2条と、腹に1本による横文2条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		23

表 43 SB5③出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備 考	写真 図版
				外面	内面				
33	杯身	口径 (11.9) 残高 2.9	僅かに内傾するたちあがり。受部は短く水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 (1~2) ○		
34	壺	口径 (20.0) 残高 4.5	外傾する口縁部の端部は肥厚され、丸い。焼け歪み有。	回転ナデ	回転ナデ	オリブ灰色 明オリブ灰色	石・長 (1~2) ○	自然釉	
35	壺	口径 (18.2) 残高 3.8	外傾し内湾気味に立ち上がる口縁部片。口縁端部は内傾する面を持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ○		
36	高杯	底径 (22.4) 残高 6.5	「ハ」の字状に大きく開く脚部。脚部は先細りで丸い。	マメフ	マメフ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		

表 44 SB5④出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備 考	写真 図版
				外面	内面				
37	杯身	残高 3.5	内傾するたちあがり。受部は短く丸い。土師質で焼け歪み有。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	褐色 灰白色	石・長 (1) 赤 ○		23
38	壺	残高 27.1	丸底の底部から胴部片。外面に「ノ」の字状のへう記号有。	平行タタキ→ カキ目	同心円タタキ	青灰色・灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
39	瓶	残高 4.8	把手部。断面形態は円形状である。	ナデ	マメフ	褐色・淡黄褐色 淡黄褐色	長 (1~2) ○		

表 45 SB5一括出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備 考	写真 図版
				外面	内面				
40	坏蓋	口径 (11.5) 残高 3.5	口縁端部は丸味を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
41	坏蓋	口径 (13.1) 残高 3.3	口縁端部は丸味を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色 青灰色	石・長 (1~2) ○		
42	坏蓋	口径 (12.0) 残高 3.0	口縁端部は丸味を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰色・灰白色	長 (1) ○		
43	坏蓋	口径 (14.0) 残高 3.0	直立気味に接地する口縁端部は丸い。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	長 (1) ○		
44	杯身	口径 (11.9) 残高 3.8	たちあがり内傾し端部は直立する。受部は短く水平に伸び、受部は沈没状の凹みがある。	⑩ 回転ナデ ⑩ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
45	杯身	口径 (10.9) 残高 2.8	内傾するたちあがりの端部は尖り気味である。受部は短く水平に伸びる。焼け歪み有。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1) ○		
46	杯身	口径 (11.0) 残高 2.9	短く内傾するたちあがりの端部は丸い。受部は水平に短く伸びる端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	長 (1)・赤 ○		
47	高杯	残高 1.8	杯部片。水平な底部に、直立に立ち上がる口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	褐色 灰白色	石・長 (1) ○		
48	壺	口径 (8.7) 残高 5.3	口縁部は直立気味で僅かに外傾する。口縁端部は丸味を持つ。	⑩ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
49	壺	口径 (20.3) 残高 4.1	外反する口縁部の端部は断面長方形状に肥厚される。外面に「斜線」のへう記号有。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
50	風	口径 (12.8) 残高 5.0	外反する頸部から、ナデによる明確な段を持ち、口縁部は外傾し端部は丸味を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色・灰色 灰色	石・長 (1) ○	自然釉	
51	瓶蓋	口径 (9.0) 残高 4.2	内傾する口縁部の端部は先細りである。外面に2条の沈線文を施す。	カキ目 回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	長 (1) ○		
52	瓶	残高 4.5	把手部。断面は円形状である。	ナデ	ナデ	浅黄褐色・褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		
53	小壺	底径 4.5 残高 6.5	平底の底部。器壁は厚い。	⑩ ナデ・ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○	黒炭	23

表 46 SB5一括出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
54	砥石	約 1/2	砂岩	10.2	7.6	3.05	422.75		23

表 47 SB6出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
55	坏蓋	口径 (11.8) 残高 1.9	口縁部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) ○		
56	坏蓋	口径 (12.8) 残高 2.6	口縁部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長 (1) ○		
57	坏蓋	口径 (12.7) 残高 2.8	口縁部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1~2) ○		
58	坏身	残高 2.6	受部は短く水平に伸び、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	長 (1~2) ○		
59	不明	長さ 20.0 幅 (10.7)	外面に横方向に2本、縦方向に1本の沈線。交点に凹状と脚部を貼り付ける。	ナデ・回転ナデ 工具によるナデ	回転ココナデ	灰色 灰色	密 ○		24
60	高坏	口径 (18.1) 残高 4.9	土器器の高坏の坏部。口縁端部は尖り気味に丸い。	マメツ	ナデ	浅黄褐色・橙色	石・長 (1~2) ○		
61	高坏	残高 5.6	土器器の高坏の柱部。中実。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ○		

表 48 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
62	坏蓋	口径 (11.4) 残高 3.3	口縁内面はナデにより内傾する面を持つ。口縁外面に縦方向の4本の沈線を施す。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
63	坏身	口径 (12.1) 残高 2.5	内傾するたちあがり端部は丸い。受部は短く水平に伸び、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1~2) ○		
64	坏身	口径 (12.1) 残高 2.6	内傾するたちあがり端部は尖り気味である。受部は外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		自然釉
65	坏身	口径 (11.8) 残高 3.0	内傾し僅かに外反するたちあがり。受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		自然釉

表 49 SK1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
66	砥石		石英粗面岩	4.85	2.7	1.3~1.88	20.906		

表 50 SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
67	坏身	口径 (11.4) 残高 3.8	内傾するたちあがりの端部は、尖り気味である。受部は水平に短く伸び、尖り気味である。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	緑灰色 灰白色	長 (1) ○		
68	坏身	口径 11.5 器高 4.2	内傾するたちあがりの端部は、尖り気味である。受部は短く水平に伸びる。跡が認められる。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	⑤ ナデ 回転ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長 (1) ○		23
69	坏身	受部径 13.8 残高 2.1	受部の小片。水平に伸びる受部の端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
70	高坏	残高 7.6	「ハ」の字状に開く脚部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		
71	壺	底径 10.0 残高 5.3	脚部片。脚部は屈曲し脚部面は平坦である。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		自然釉 23

SK 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
72	壺	残高 31	底部片。	㊟ 割断ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
73	壺	残高 21.0	長胴の胴部片。	平行タキ→ カキ目 7~9本 (cm)	同心円タキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~5) ○		
74	提瓶	残高 8.5	胴部片。内面に円盤光景の模様が 見られる。	タキ→カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		
75	高坏	残高 9.4	土師器の柱部。中実。	マメツ	マメツ	褐色 淡褐色	石・長 (1~2) 赤○		

表 51 SK 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
76	坏身	口径 (11.2) 器高 4.6	内傾するたちあがりは尖り気味に丸い。 受部は水平に短く伸び、尖り気味である。	㊟ 割断ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ○		

表 52 SK 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
77	坏蓋	口径 (14.8) 器高 4.6	口縁部と天井部の境界に凹線状の凹み がある。口縁部は尖り気味に丸い。	㊟ 割断ヘラケズリ 回転ナデ	㊟ ナデ 回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ○	自然釉	24
78	坏蓋	口径 (14.2) 残高 3.5	口縁部の小片。口縁部は尖り気味 に丸い。	㊟ 割断ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
79	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.3	口縁部の小片。口縁部は尖り気味 に丸い。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
80	坏身	口径 (13.1) 残高 2.8	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味 である。受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
81	坏身	口径 (12.7) 残高 2.6	内傾するたちあがりの端部は尖り気 味である。受部は短く水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
82	坏身	口径 (12.3) 残高 3.3	たちあがりは直立気味で端部は尖る。受部 は短く水平に伸び、端部は丸い。胎土赤み有。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
83	坏身	口径 (11.0) 残高 2.2	内傾するたちあがりは僅かに凹面し、端部 は先細りする。受部は僅かに水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○		
84	坏身	残高 3.7	内傾するたちあがり。受部は短く水 平に伸びる。	㊟ 割断ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○	自然釉	
85	壺	口径 (17.2) 残高 3.5	外反する口縁部は屈曲し、端部は肥 厚される。外面に沈線が1条走る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○		
86	壺	残高 5.2	頸部から胴部片。	㊟ ナデ ㊟ 平行タキ→ナデ	㊟ 回転ナデ タキ→ナデ	灰色 灰色	密 ○		
87	壺	口径 (18.1) 残高 3.6	土師器の口縁部。外傾し僅かに内湾 する。口縁部は丸い。	マメツ	ヨコナデ	明褐色 明褐色	石・長 (1~2) ○		
88	高坏	口径 (20.0) 残高 5.5	高坏の坏部片。口縁部は尖る。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) 赤○		
89	壺	底径 (5.6) 残高 3.8	弥生土器の底部片。上げ底。	ナデ	ナデ	灰褐色	石・長 (1~2) ○		

表 53 SD 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
90	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.5	口縁部は端部手前で屈曲し、直立に接 地する。口縁部は内傾する面を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1~2) ○		
91	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.7	口縁部片。口縁部は尖り気味に丸 い。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 明青灰色	石・長 (1) ○		

SD1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
92	坏蓋	口径 (12.6) 残高 38	丸味を持つ天井部、口縁端部は丸味を持つ。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1~3) ○		
93	坏身	口径 (11.6) 残高 25	僅かに内傾する口縁部。受部は短く水平に伸び丸い。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長 (1) ○		
94	坏身	口径 (10.6) 残高 24	内傾するたちあがりに短く水平に伸びる受部。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~3) ○		
95	坏身	口径 (10.7) 残高 24	直立するたちあがり。受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) ○		
96	坏身	口径 (10.6) 残高 19	内傾するたちあがりの端部は屈曲して直立する。受部は短く水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	明青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
97	高坏	残高 67	柱部。外面に2条の凹線を施す。透かしが3方向に2段あり。	回転ナデ	ナデ (しほり痕)	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		
98	壺	口径 (16.0) 残高 21	外反する口縁部。端部は肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色 灰色	石・長 (1) ○		
99	壺	残高 35	肩部に襷描きによる10本の波状文と頸部下にカキ目を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長 (1) ○		
100	甕	口径 (21.3) 残高 39	口縁部片。	ヨコナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		

表 54 SD2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
101	坏蓋	口径 (11.8) 残高 28	口縁部は直立気味に接地し、端部は尖り気味である。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
102	坏身	口径 12.4 器高 40	内傾するたちあがり。受部は水平に伸び、尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	赤・長 (1~2) ○		24
103	坏身	口径 (11.4) 残高 25	内傾するたちあがりの端部は丸い。受部は短く外上方に伸びる。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰白色	長 (1) ○		
104	坏身	口径 (12.2) 残高 22	内傾するたちあがりの端部は丸い。受部は水平に伸び、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		自然釉
105	坏身	口径 (9.7) 残高 26	内傾するたちあがりの端部は先細りである。受部は水平に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	長 (1) ○		
106	壺	口径 (15.6) 残高 32	外反する口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色・緑灰色 灰色	石・長 (1) ○		
107	甕	口径 (14.9) 残高 5.9	直立する口縁部の端部は丸い。肩部に火ぶくれ有。	㊦ 回転ナデ 平ツタキ→カキ目	㊦ 回転ナデ 同心円ツタキ	灰色 灰色	石・長 (1) 黒 ○		自然釉
108	壺	残高 67	頸部~口縁部に火ぶくれ有。	㊦ 回転ナデ ツタキ→カキ目	㊦ 回転ナデ 同心円ツタキ	灰色 灰白色	長 (1) ○		自然釉
109	壺	底径 (14.6) 残高 5.6	平底の底部。外面にカキ目調整を施す。	カキ目	ナデ	オリブ灰色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○		自然釉
110	壺	残高 30	丸底の底部。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色・灰白色 灰色	長 (1) ○		
111	甕	残高 52	外反する口縁部。胴部外面にカキ目調整を施す。	㊦ 回転ナデ ツタキ→カキ目	㊦ 回転ナデ 同心円ツタキ	にぶい褐色、灰褐色 灰白色	長 (1)・赤 ○		
112	甕	胴径 8.9 残高 9.3	頸部と胴部: 2条の沈線。胴部は筒形に筒状文を1条施す。底部2平面である。	㊦ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	青灰色・灰色 灰色	石・長 (1~5) ○		24
113	高坏	残高 32	高坏の基部。組み合わせ技法。	マメツ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長 (1~2) 赤 ○		
114	高坏	残高 58	基部から柱部。中実	マメツ	マメツ	灰白色・橙色 灰白色	石・長 (1~2) ○		

SD2出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
115	高坏	残高 50	柱部、中実	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 浅黄褐色	石・長 (1) ○		
116	高坏	残高 55	柱部、中実	マメツ	マメツ	褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1) ○		
117	瓶	残高 4.8	把手部。舌状で断面円形である。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		25
118	壺	口径 (16.2) 残高 5.2	短く外反する口縁部。口縁端部は丸い。	⑤ ナデ ハケ	⑤ マメツ タタキ	にぶい褐色 にぶい褐色	長 (1~4) 赤 ○		

表 55 SD4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
119	高坏	残高 4.3	3方向の透かし。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1~2) ○		

表 56 石相遺構出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
120	坏蓋	口径 (12.7) 残高 3.1	口縁部片。口縁部は丸い。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
121	坏蓋	口径 (11.1) 残高 3.2	口縁部は直立して接地し、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	石・長 (1) ○	自然釉	
122	坏蓋	口径 (11.4) 残高 3.7	口縁端部は丸味を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
123	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.8	口縁端部は丸い。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	自然釉	
124	坏身	口径 (10.8) 残高 4.7	内傾するたちあがりの端部は丸い。受部は短く水平に伸びる。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
125	坏身	口径 (10.2) 残高 3.6	内傾するたちあがり。受部は短く丸い。土師質で焼け歪み有。	回転ナデ	回転ナデ	明緑灰色 灰白色	石・長 (1) ○	自然釉	
126	坏身	口径 (10.6) 残高 2.5	内傾するたちあがり。受部は短く水 平に伸び、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1) ○		
127	坏身	口径 (11.1) 残高 2.3	内傾するたちあがり。受部は短く水 平に伸び、端部は丸い。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		
128	坏身	口径 (12.1) 残高 2.8	内傾するたちあがりの端部内面に沈 線が通る。受部は外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 明青灰色	長 (1~3) ○		
129	高坏	残高 3.5	基部から大きく開く脚部。	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
130	高坏	残高 4.3	細い基部。	マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○		
131	壺	口径 (17.1) 残高 4.1	短く外反する口縁部。口縁端部は肥厚され、 下加に凹みされる。外面に右が甲の線刻あり。	ナデ カキ目	ヨコナデ	青灰色 灰白色	石・長 (1~3) ○	自然釉	25
132	壺	残高 4.3	頸部から大きく開く胴部片。胴部に カキ目調整を施す。	⑤ ヨコナデ 平行タタキ→カキ目	⑤ ヨコナデ 同心円タタキ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		
133	壺	口径 (25.0) 残高 4.1	口縁部の小片。土師器。	マメツ	マメツ	褐色 褐色 褐色	壺 ○ ○		
134	高坏	残高 6.9	坏脚部片。土師器。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	壺 ○		
135	壺	底径 (9.8) 残高 2.2	脚付壺。「ハ」の字状の脚部。脚部 部は先細りである。土師器。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 浅黄褐色	長 (1) ○		

石垣遺構出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
136	甕	底径 (8.9) 残高 5.2	平底の底部片。弥生土器。	マメツ	マメツ	明赤灰色 赤褐色	石・長 (1~2) ○		

表 57 S X 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
137	坏蓋	口径 (12.8) 器高 3.5	僅かに丸味を持つ天井部。口縁端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) 黒 ○		自然釉
138	坏蓋	口径 (12.8) 器高 3.7	平坦な天井部。口縁端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○		
139	坏蓋	口径 (15.8) 残高 4.8	丸い天井部。口縁部は直立して接地し、口縁部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石長 (1)・赤 ○		
140	坏蓋	口径 (14.0) 残高 3.7	口縁部は直立丸味に接地する。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
141	坏蓋	口径 (12.6) 残高 3.5	口縁端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色・赤灰色 灰白色・暗緑色	石・長 (1~2) ○		自然釉
142	坏蓋	口径 (14.8) 器高 3.5	扁平な天井部。口縁端部は丸い。焼け重み有。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○		25
143	坏身	口径 (12.2) 器高 4.1	内傾するたちあがり。器壁は薄い。受部は外上方に短く伸び、端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	黄灰色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○		25
144	坏身	口径 (12.7) 器高 4.4	内傾するたちあがり。受部は短く外上方に伸びる。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) 赤 ○		
145	坏身	口径 (11.6) 器高 3.9	内傾するたちあがり。受部は水平に伸び、端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○		25
146	坏身	口径 (12.8) 器高 3.7	受部は短く水平に伸びる。底面は平で外周に物取溝が刻み込まれている。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○		25
147	坏身	口径 (13.1) 残高 3.4	内傾するたちあがり。受部は水平に伸びる。底面は平で外周に物取溝が刻み込まれている。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	赤灰白色 明赤灰色	石・長 (1~2) ○		25
148	坏身	口径 (12.1) 器高 4.5	内傾するたちあがり。受部は水平に短く伸び、端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	青灰色 緑灰色	石・長 (1~2) ○		25
149	坏身	口径 (11.2) 器高 3.9	内傾するたちあがりの端部は直立する。受部は短く外上方に伸びる。底面は平である。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		自然釉
150	坏身	口径 (11.8) 残高 4.2	たちあがり。内傾し、端部は丸い。受部は短く外上方に伸び、端部は丸い。	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	◎ 回転ナデ ◎ 回転ナデ	にぶい・橙色 にぶい・橙色	長 (1) ○		
151	蓋	つば径 (2.8) 残高 1.6	有蓋高坏の蓋のつまみ。中央部が凹む。	◎ ヨコナデ ナデ	◎ ヨコナデ ナデ	灰色 灰白色	密 ○		自然釉
152	甕	口径 (28.8) 残高 2.6	口縁端部は肥厚され下方に拡張される。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
153	甕	残高 11.5	胴部片。	平行タタキ→ カキ目	同心円タタキ→ ナデ	灰白色 灰白色	長 (2) 密 ○		
154	甕	口径 (15.6) 残高 14.7	外傾する口縁部。口縁端部は内傾する面を持つ。	◎ ヨコナデ ハケ (12 本/cm)	◎ ハケ ナデ	にぶい・橙色 にぶい・橙色	石・長 (1~2) ○		
155	甕	口径 (17.5) 残高 3.1	外傾する口縁部。口縁端部は内傾する面を持ち、内側に肥厚する。	◎ ヨコナデ	◎ ヨコナデ	橙色 明赤褐色	石・長 (1~2) ○		
156	甕	口径 (18.4) 残高 5.4	外傾する口縁部。口縁端部は丸い。	◎ ヨコナデ ハケ (3 本/cm)	◎ ヨコナデ	橙黄色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
157	甕	口径 (14.8) 残高 3.4	内湾する口縁部。口縁部は水平な面を持ち、内側に肥厚する。	マメツ	◎ ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) ○		
158	高坏	残高 8.1	柱部~脚部片。中央。	ミガキ	◎ ヨコナデ	橙色 明赤褐色	石・長 (1~2) ○		

SX1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
159	甌	残高 5.3	舌状の把手部。断面は楕円形状。	ナデ	マメツ	橙色 浅黄褐色	石・長 (1~2) ○		
160	甕	口径 (20.0) 残高 5.5	外反する口縁部。口縁端部は先細り。	㊸ ヨコナデ ハケ②~4本/cm	ヨコナデ	灰色 褐色	石・長 (1~2) ○		
161	甕	口径 (16.1) 残高 8.3	僅かに外反する口縁部。口縁端部は先細り。	マメツ	㊸ マメツ ナデ	淡黄色 褐色	石・長 (1) ○	黒黒	
162	甕	口径 (11.1) 残高 7.7	僅かに外反する口縁部。口縁端部は丸い。	㊸ ヨコナデ ハケ	㊸ ヨコナデ ハケ (7本/cm)	にぶい・褐色 褐色	石・長 (1~3) ○		
163	甕	残高 3.4	頸部から胴部片。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) ○		
164	甕	残高 5.5	頸部~胴部片。	ハケ④~5本/cm →ナデ	ハケ⑦~8本/cm →ナデ	褐色・浅黄色 浅黄色	石・長 (1~3) ○		

表 58 SX1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
165	砥石		石英粗面岩	6.08	4.1	3.2	91.42		

表 59 SP 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
166	坏蓋	口径 (14.0) 器高 4.0	天井部と口縁部の境界には凹線状の凹みがある。口縁端部は尖り気味である。	㊸ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	石・長 (1~2) ○	SP130	35
167	坏蓋	口径 (13.6) 残高 3.4	平坦な天井部。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊸ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○	SP130	
168	坏身	口径 (10.9) 残高 3.0	内傾するたちあがりの端部は直立し、尖り気味である。受部は水平に短く伸びる。	㊸ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 青灰色	石・長 (1) ○	SP130	
169	坏身	口径 (13.1) 残高 4.1	内傾するたちあがり。受部は短く水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	石・長 (1) ○	SP130	
170	坏身	口径 (11.2) 残高 2.7	短く内傾するたちあがり。受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○	自然釉 SP64	
171	高坏	残高 7.1	脚部片。3方向に透かしを施す。	マメツ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP130	
172	甌	口径 (17.1) 残高 2.3	外反する口縁部。端部は肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗青灰色	石・長 (1) 黒 ○	SP64	
173	甌	口径 (10.4) 残高 4.8	外反する口縁部。口縁端部は肥厚し丸い。	㊸ ナデ ハケ⑦~8本/cm	㊸ ナデ 同心円タタキ	灰白色 灰白色	石・長 (1~5) ○	SP63	
174	鉢	口径 (17.2) 器高 6.6	丸縁を持つ底。口縁端部は尖り気味である。外面に沈線が2条ある。全体に粗雑な作り。	ナデ	ナデ	灰白色 灰色	長 (1) 密 ○	SP72	35
175	高坏	残高 3.9	基部。	マメツ	マメツ	浅黄褐色 褐色	石・長 (1) 赤 ○	SP130	
176	甌	底径 (8.5) 残高 6.7	弥生土器。平底の底部から胴部の残存。	ナデ	ナデ	にぶい・褐色 褐色	石・長 (1~2) ○	SP109	

表 60 SP 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
177	砥石		石英粗面岩	11.0	6.1	4.7	458.66		26

表 61 グリッド出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
178	灰蓋	残高 14	口縁端部は丸い。焼け重み有。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) 黒 ○	自然釉 D5区	
179	灰蓋	口径 13.5 器高 4.3	内湾気味に接地する口縁部。端部は⑤ 回転ヘラケズリ 丸い。焼け重みが著しい。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○	自然釉 C4区	26
180	坏身	口径 (11.8) 器高 3.7	たちあがり直立気味で端部は丸い。受部⑤ 回転ヘラケズリ 部は水平に伸びる。焼け重みが著しい。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) 黒 ○	自然釉 C4区	26
181	坏身	口径 (11.4) 残高 3.8	内傾するたちあがりの端部は尖り気味⑤ 回転ヘラケズリ 味である。受部は水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉 D5区	
182	坏身	口径 (10.9) 残高 3.6	直立気味のたちあがりの端部は尖り⑤ 回転ヘラケズリ る。受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○	D5区	
183	坏身	口径 (9.7) 残高 2.6	直立気味のたちあがりの端部は尖る。 受部は外上方に短く伸び、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	D5区	
184	坏身	口径 (10.4) 残高 2.5	内傾するたちあがりの端部は内面に 面を持つ。受部は短く端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	D5区	
185	坏身	残高 4.0	受部は水平に伸び端部は丸い。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○	自然釉 D5区	
186	高坏	底径 (8.7) 残高 2.3	「ハ」の字状に開く脚部の端部は丸い。 端部内面にナデによる凹みが巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	石・長 (1) ○	D5区	
187	壺	口径 (16.2) 残高 3.2	口縁部片。口縁端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	D5区	
188	壺	口径 (17.1) 残高 5.6	外反する口縁部。口縁端部は肥厚す る。	③ ヨコナデ カキ目	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○	自然釉 E5区	
189	蓋	残高 3.6	天井部中央が径3cmの中空状。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○	D5区	
190	甌	口径 (13.2) 残高 2.9	陶胎器。外面に蓮弁文を描く。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ○	E5区	

表 62 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
191	灰蓋	口径 (13.2) 残高 2.9	口縁部片。口縁端部は丸い。	⑤ 回転ヘラケズリ ③ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) 赤 ○		
192	灰蓋	口径 (12.0) 器高 3.2	口縁部片。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		
193	坏身	口径 (9.9) 残高 2.9	短く内傾するたちあがりの端部は丸い⑤ 回転ナデ い。受部は短く外上方に伸びる。	マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
194	坏身	口径 (10.9) 残高 3.4	内傾する長いたちあがりの端部は先細りである。受部は水平に伸びる。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰白色	石・長 (1~2) ○	自然釉	
195	坏身	残高 2.6	外面にへう記号有り。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	自然釉	26
196	高坏	残高 7.4	柱部。2方向の透かし有り。	回転ナデ	ヨコナデ (しほり痕)	灰白色 灰白色	石・長 (1~2) ○		
197	高坏	残高 5.4	柱部。3方向の透かし有り。外面に 2条の沈線を描す。	回転ナデ	回転ナデ (しほり痕)	灰色 灰色	長 (1) 黒 ○		
198	壺	口径 (12.0) 残高 2.8	外反する口縁部。端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○		
199	壺	残高 3.8	唇の張る胴部片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長 (1) ○	自然釉	
200	甌	残高 4.0	外面に2条一組の沈線文を2箇所に加 らし、沈線間に刺突列点文を1条巡らす。	回転ナデ	回転ナデ	明褐色 灰色	石・長 (1) ○		

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
201	平瓶	口径 (96) 残高 54	外傾する口縁部。肩部は先細りする。	回転ナデ	回転ナデ	明褐色 黄灰色	密 ○	自然釉	
202	平瓶	口径 (95) 残高 58	外傾する口縁部。肩部は先細りする。	回転ナデ	回転ナデ	黄褐色・灰緑色 黄灰色	密 ○	自然釉	
203	甕	口径 (220) 残高 37	口縁部片。口縁端部は肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	長 (1) ○		

表 63 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面/内面)	胎土 焼成	備考	写真 図版
				外面	内面				
204	坏蓋	口径 (140) 残高 33	天井部が凹む。口縁端部は尖り気味である。	⑤ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1~3) ○		
205	坏蓋	口径 (118) 残高 22	かえり端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰白色	石・長 (1) ○	自然釉	
206	坏身	口径 (120) 残高 31	内傾するたちあがり部。受部は水平に伸びる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○		
207	蓋	口径 (108) 残高 26	短断面の蓋。焼け歪みが著しい。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	自然釉	
208	甕	口径 (240) 残高 34	口縁部片。口縁端部は水平な面を持つ。外面に1本の沈線が通る。焼け歪み有。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (1~2) ○		
209	甕	残高 46	頸部から肩部片。肩部外面にカキ目調整を施す。	⑩ ナデ カキ目	⑩ 回転ナデ タタキ	灰白色 灰白色	長 (1) ○		
210	播鉢	底径 7.2 残高 69	厚みのある底部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密・黒 ○	自然釉	26
211	甕	口径 (158) 残高 45	外傾する口縁部。口縁端部は先細りする。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1~2) ○		
212	甕	口径 (253) 残高 79	直立する口縁部。口縁端部は丸い。	⑪ ヨコナデ ハケ(5~6本/cm)	ハクリ	褐色 明赤褐色	石・長 (1~2) ○		
213	甕	口径 (239) 残高 52	僅かに外傾する口縁部の端部は先細りである。	⑫ ヨコナデ ハケ(6~7本/cm)	マメツ	褐色 明赤褐色	石・長 (1~2) ○		

表 64 地点不明出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	写真 図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
214	鉄洋		鉄	3.97	3.75	3.65	21.66	灰付着	26

第Ⅵ章 成果と課題

本報告書では、平成元年と平成7年に国庫補助事業として発掘調査を行った4遺跡について報告を行った。本書で報告を行った4遺跡は、松山平野南東部の久米官衙遺跡群周辺に位置し、今回の報告により弥生時代から古代の遺跡がわずかながら明らかとなった。調査成果を時代ごとに整理する。

弥生時代 中ノ子1遺跡から竪穴建物1棟（SB1）と土坑3基（SK1・2・3）がある。SB1と土坑は弥生時代後期である。SK1・2・3は、柱痕と思われる穴を検出していることから、掘立柱建物の可能性がある。調査地周辺の調査では過去に弥生時代の遺物の出土例はあるが、遺構は検出されていない。本調査で検出した竪穴建物と土坑が、初めての検出事例となる。鷹子新畑遺跡からは弥生時代前期末から中期初頭の遺物が包含層内から出土している。本調査の北側に位置する鷹子新畑遺跡2次調査からは、弥生時代前期末から中期初頭の溝と土坑を検出し、遺構内からは甕形土器や壺形土器の完形品が出土していることから、中ノ子1遺跡周辺からは、弥生時代後期の集落が、鷹子新畑遺跡周辺からは弥生時代前期末から中期初頭の集落に関連する遺構が、展開するものと考えられる。

弥生時代には来住台地上の集落が東側の新畑遺跡まで広い範囲に広がることが確認でき、小野川を隔てた南側の中ノ子1遺跡からは弥生時代後期の遺構と遺物が初めて確認できた。今後は来住台地上の弥生時代集落の変遷を検証していく必要がある。

古墳時代 鷹子新畑遺跡からは、6世紀中葉の竪穴建物1棟と溝3条を検出した。調査地の北に位置する2次調査からは、古墳時代の竪穴建物4棟を検出し、その内の1棟は5世紀末の方形の竪穴建物でカマドが付設されている。調査地周辺には、5世紀後半から6世紀中葉にかけての集落が広がっていた事が確認できた。中ノ子1遺跡では、掘立柱建物4棟、溝1条を検出した。掘立柱建物は方位より3グループ（グループ①・②・③）に分けられると考えられる。SD7は出土遺物から掘立柱建物と同じ6世紀代の溝と考えられる。古墳時代の遺構は、調査地の東500mに位置する開遺跡1次、2次調査から竪穴建物5棟、掘立柱建物6棟を検出していることから、本調査地から開遺跡までの広い範囲に、6世紀代の集落が展開していたことが明らかとなった。下刃屋遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物9棟、土坑5基、溝4条、性格不明遺構1基を検出した。竪穴建物には重複するものや、カマドを持つものがある。重複する住居ではSB2・3・4に重複がみられ、SB5は4棟が重複している。カマドと炉を持つ建物は、4棟がある。SB2は北壁中央にカマドを持ち、北壁から建物外側に向けて北に1.2mの煙道が確認でき、これほど長い煙道の検出は初例である。遺物では、出土した須恵器の中に焼け歪みや焼成不良品が数多くみられ、とくにSX1からは土師器と須恵器が多量に出土し、土器を廃棄した様相を示している。また、建物内からは焼成時に出来る不純物の窯壁片が出土している。調査地の北から北東部の丘陵麓には松山東南部古窯址群と総称される、6世紀後半～8世紀代の須恵器窯業の一大生産地であることがわかっている。近年の調査では隣接する下刃屋遺跡3次調査において、須恵器を多量に出土する集積あるいは廃棄土坑が検出されていることから、調査地や周辺地域は生産地から消費地の中継点という集落の性格と、重複する住居を検出したことにより、長期にわたり集落が展開していたことが明らかとなった。今後は、集落の変遷と窯業生産の中継地点である下刃屋遺跡周辺の集落構造と、窯業生産地と集落内出土遺物の科学的な分析を行い、消費地（特に来住廃寺や久米官衙遺跡）の解明を行っていく必要がある。

古代 南久米沖台B遺跡から古代の掘立柱建物1棟（掘立1）と溝1条（SD4）を検出した。掘立1は柱穴が削平を受け遺存状態は悪いが、柱穴の規模から大型の建物と考えられる。掘立1とSD4の検出で、南久米沖台遺跡には8世紀の集落の一部と集落を区画する溝が存在することが判明した。来住台地北側には沖台遺跡や南久米町遺跡など多数の遺跡があり、近年の調査成果を合わせると、調査地周辺の堀越川北側には、8～10世紀の掘立柱建物が広がることが明らかになった。今後は、8世紀以降の来住廃寺、久米官衙遺跡と堀越川を隔てた遺跡との関係、中ノ子I遺跡では検出されなかった来住廃寺の南に位置する、中ノ子廃寺に関連する遺構や遺物の検出をまち、中ノ子廃寺の建物の位置や配置について検証していく必要がある。

【文献】

- 「開遺跡1次調査、開遺跡2次調査」『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書57
- 「下町屋遺跡2次調査・3次調査」松山市文化財調査報告書75
- 「南久米町遺跡」『来住・久米地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書76
- 「鷹子町遺跡2次調査」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』松山市文化財調査報告書101
- 「久米才歩行遺跡」『来住・久米地区の遺跡Ⅵ』松山市文化財調査報告書108
- 「久米窪田古屋敷遺跡」松山市文化財調査報告書148
- 「鷹子遺跡1次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ
- 「鷹子新畑遺跡2次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ
- 「鷹子新畑遺跡3次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ
- 「鷹子町遺跡2次調査」松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ
- 「久米才歩行遺跡5・6次調査」松山市埋蔵文化財調査年報12
- 「鷹子新畑遺跡4次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
- 「南久米町遺跡5次調査」松山市埋蔵文化財調査年報20

写 真 图 版

南久米沖台B遺跡	写真図版 1 ~ 4
鷹子新畑遺跡	写真図版 5 ~ 10
中ノ子I遺跡	写真図版 11 ~ 14
下苺屋遺跡	写真図版 15 ~ 26

写真図版データ

1. 遺構写真は、撮影機材等は不明である。

南久米沖台B遺跡については、白黒プリントを複写して使用した。

鷹子新畑遺跡については、35mm白黒フィルムから焼き付けた。

中ノ子1遺跡については、35mmカラーポジフィルムを原稿とした。

下菟屋遺跡については、35mmカラーネガフィルムよりカラープリントを焼き付けて、原稿とした。

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 原則として、写真原稿は白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製版 写真図版 175線

印刷 オフセット印刷

用紙 ニューVマット 76.5kg

[大西 朋子]



1. 掘立1検出状況(東より)



1. SD1・SD2・SD3・SX2検出状況(北より)



2. SD4遺物出土状況①(北より)



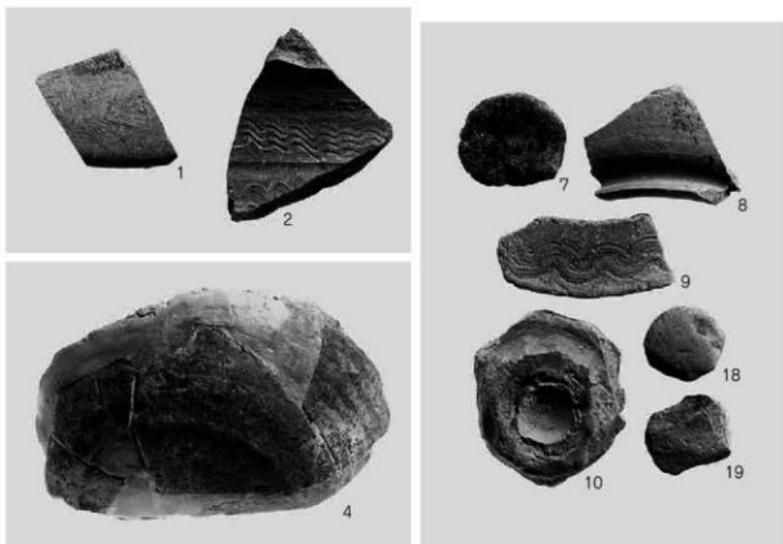
1. SD4遺物出土状況②(北東より)



2. SD4土層堆積状況(北東より)



1. 調査風景 (西より)



2. 出土遺物 (掘立1:1・2、SD4:4、SP135:7、SP7:8、地点不明:9・10・18・19)



1. 調査地遠景 (南より)



2. 重機による掘削状況 (南より)



1. 北壁土層（南より）



1. 遺構検出状況（東より）



1. SB1検出状況(西より)



2. SB1遺物出土状況①(西より)



3. SB1遺物出土状況②(東より)



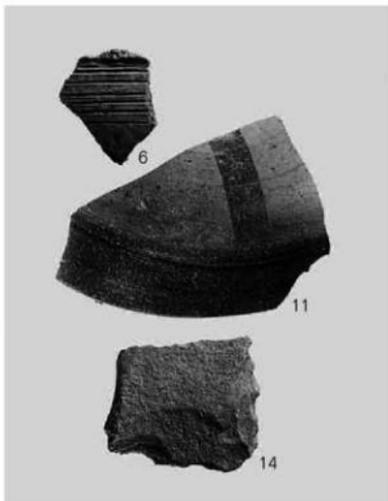
1. SB1完掘状況(東より)



2. 遺構完掘状況(西より)



1. 作業風景 (東より)



2. 出土遺物 (SB1:1・2・3、地点不明:6・11・14)



1. 遺構検出状況(西より)



2. SD1・SD2・SD3完掘状況(南西より)



1. 掘立1・掘立2完掘状況①(北より)



2. 掘立1・掘立2完掘状況②(南西より)



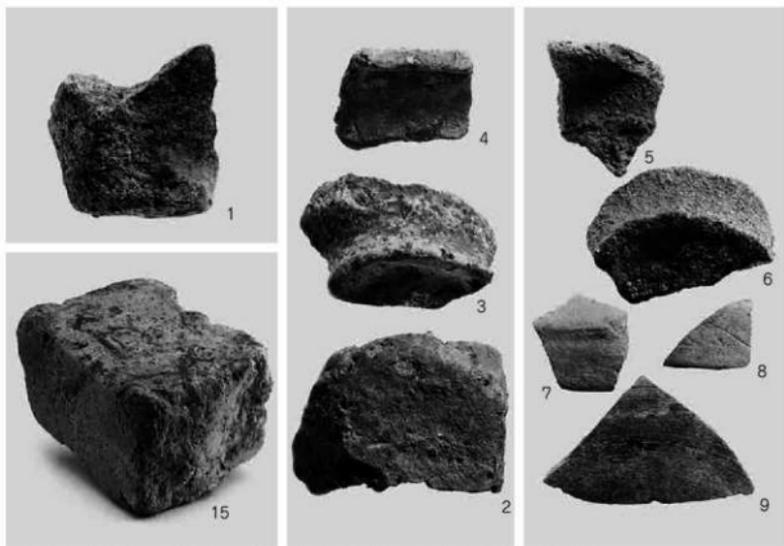
1. 掘立3・掘立4・SD4・SD5・SD7完掘状況(北東より)



2. SK1・SK2・SK3完掘状況(西より)



1. 調査区より久米中学校を望む(南より)



2. 出土遺物 (SB1:1、SK1:2、SK2:3、SK3:4、掘立 1:5～8、掘立 2:9、SD7:15)



1. 重機による掘削状況（北より）



2. 遺構検出状況（北より）



1. SB1検出状況(北東より)



2. SB2検出状況(北より)



1. SB3・SB4検出状況(北東より)



2. SB3・SB4完掘状況(南より)



1. SB2カマド検出状況(上:南より、下:東より)



1. SB2カマド完掘状況(上:南より、下:西より)



1. SB 5③炉①検出状況
(北東より)



2. SD 2遺物出土状況 (北より)



1. 石組遺構検出状況
(南より)



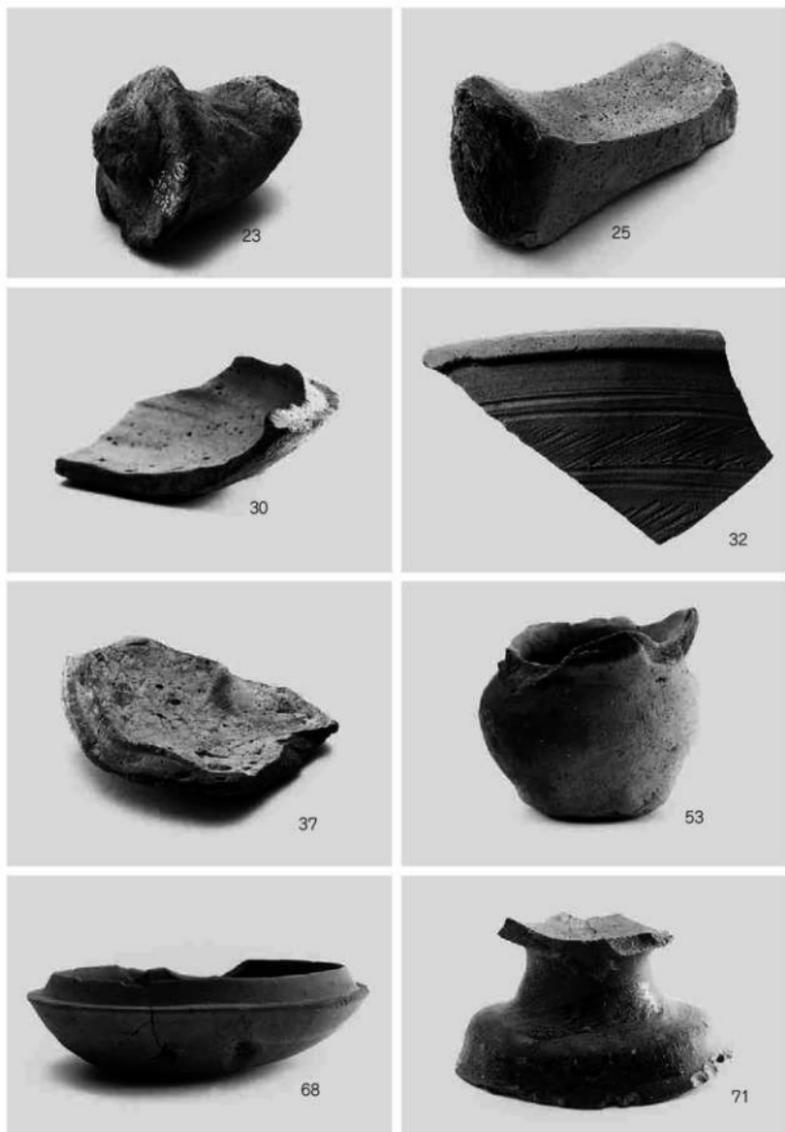
2. 現地説明会



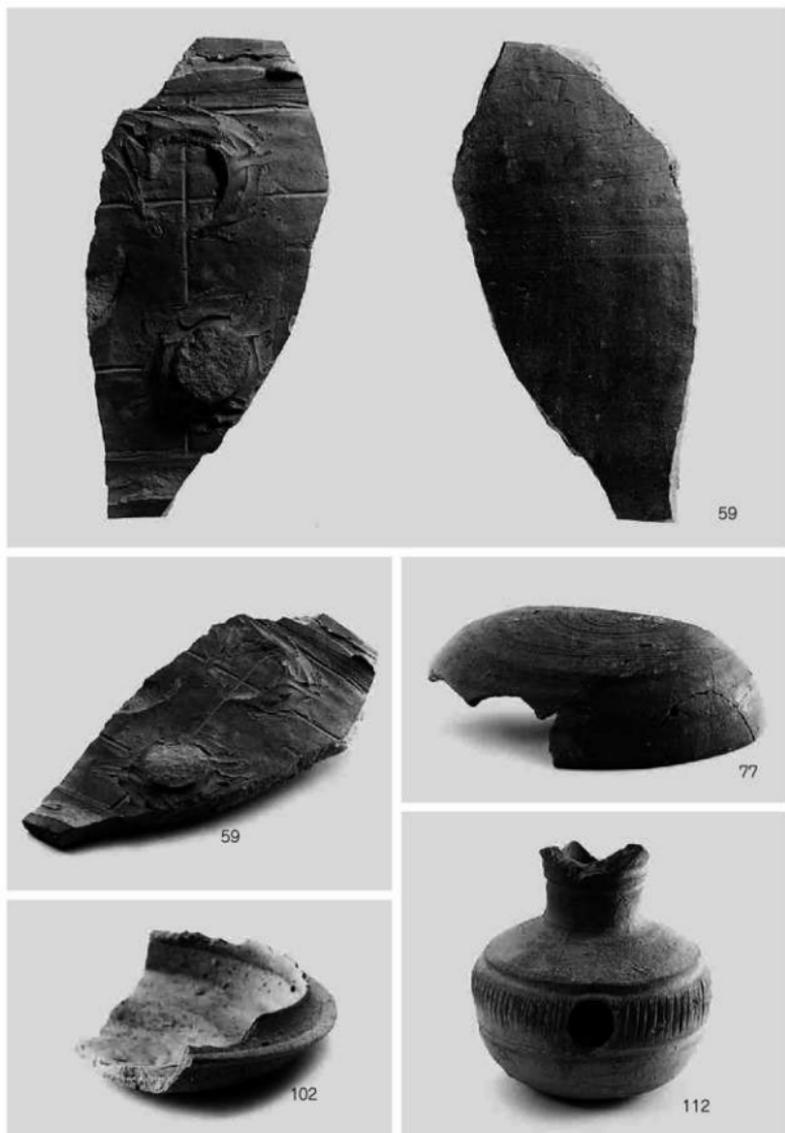
1. 遺構完掘状況① (南より)



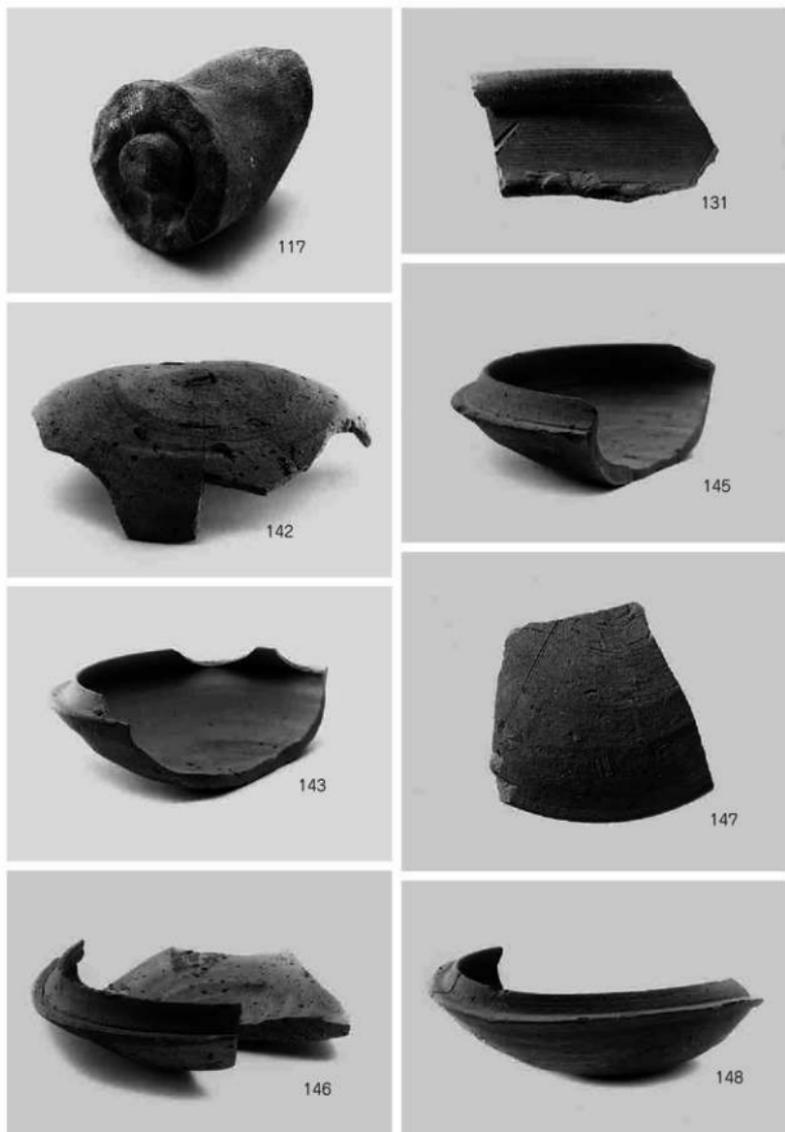
2. 遺構完掘状況② (南西より)



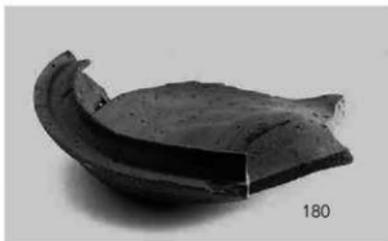
1. 出土遺物 (SB2:23-25, SB5②:30-32, SB5④:37, SB5一括:53, SK2:68-71)



1. 出土遺物 (SB6:59、SK4:77、SD2:102・112)



1. 出土遺物 (SD2:117、石組遺構:131、SX1:142・143・145~148)



1. 出土遺物 (SP130:166, SP72:174, SP58:177、グリッド:179・180、包含層:195、地点不明:210・214)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみくめおきたいひらせき・たかのこしんぱたいせき・なかのこいらいせき・しもかりやせき
書名	南久米沖台B遺跡・鷹子新畑遺跡・中ノ子I遺跡・下苺屋遺跡
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第155集
編著者名	高尾和長・大西朋子
編集機関	財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2012(平成24)年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみくめおきたいひらせき 南久米沖台B遺跡	松山市南久米町	38201		33°48'54"	132°48'02"	19890802 / 19890906	230.48	個人住宅の建設 国庫補助事業
たかのこしんぱたいせき 鷹子新畑遺跡	松山市鷹子町	38201		33°48'43"	132°48'49"	19891004 / 19891016	44.5	個人住宅の建設 国庫補助事業
なかのこいらいせき 中ノ子I遺跡	松山市南土居町	38201		33°47'59"	132°48'00"	19891004 / 19891026	426.58	個人住宅の建設 国庫補助事業
しもかりやせき 下苺屋遺跡	松山市平井町	38201		33°48'40"	132°49'22"	19950619 / 19950927	1,065.06	宅地造成 国庫補助事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南久米沖台B遺跡	集落	古代	掘立柱建物・溝	須恵器・土師器	
鷹子新畑遺跡	集落	古墳	竪穴建物・溝	須恵器・土師器	
中ノ子I遺跡	集落	弥生 古墳	竪穴建物・土坑 掘立柱建物・溝	弥生土器 須恵器	
下苺屋遺跡	集落	古墳	竪穴建物・土坑・性格不明 遺構	土師器・須恵器・砥石	焼け跡みの須恵器が多数出土。

要 約	<p>調査からは古墳時代から古代にかけての、集落に関連する遺構と遺物を検出した。南久米沖台B遺跡からは、来住庵寺の北側に広がる集落の一部を検出した。鷹子新畑遺跡からは、古墳時代後期の竪穴建物を検出した。中ノ子I遺跡からは古墳時代後期の、掘立柱建物群を検出した。下苺屋遺跡からは古墳時代後期後半から末にかけての、須恵器の生産地から消費地との中継地点と思われる遺構と遺物を検出した。</p>
-----	---

松山市文化財調査報告書 第155集

南久米沖台B遺跡
鷹子新畑遺跡
中ノ子I遺跡
下苺屋遺跡

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成24年3月13日 発行

編 集 財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

発 行 松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印 刷 平和印刷工業株式会社

〒790-0921 松山市福音寺町728番地
TEL (089) 947-9155 (代)

